

# 絵画から記号へ

## —弥生時代における農耕儀礼の盛衰—

春 成 秀 爾

- 
- |              |                  |
|--------------|------------------|
| 1 序説         | 3 絵画から記号への移行過程   |
| 2 絵画と記号の出現頻度 | 4 弥生時代の象徴体系とその盛衰 |
- 

### 論文要旨

近畿地方の弥生Ⅴ期（2世紀）の壺形土器には、円形、直線形、三叉形、弧形などの記号を、篋描き沈線や竹管紋・浮紋で表現した例が知られている。これらの記号の大部分は、当初から抽象化された記号として出発したとする説が有力である。

その一方、先行するⅣ期（1世紀）の土器や銅鐸には、鹿を筆頭に建物、鳥、人物、船などの具象的な絵画が描かれている。画題の出現頻度によると、鹿と建物または鹿と鳥を主題とする神話・儀礼が存在したことを推定しうる。

円形にせよ、直線形にせよ、個々の記号には多くの変異が存在する。Ⅳ期の絵画も同様に画題ごとに変異があり、鹿・建物や船は、写実的なものからそうでないものへと順を追っていくことができる。そして、記号もまた複雑なものから単純なものへと辿っていくことが可能である。そこで、表現の省略が進んでいるが画題を特定できるものと、個々の記号のうち複雑な形状をもつものを比較すると、鹿から円形記号へ、建物から直線形記号へ、船から弧形記号へ、というように、絵画と記号が連続する関係にあり、絵画の大幅な省略によって記号が成立したことが判明する。

こうして、Ⅴ期においても、鹿と建物または鳥を対合関係とする神話・儀礼が存続したことを推定できる。記号はⅥ期（3世紀）になると消滅する。

絵画から記号へ、そしてその消滅は、農耕儀礼のために手間をかけて土器を作り、儀礼そのものも時間をかけて念入りにおこなう段階から、農耕儀礼の実修にあれこれ省略を加えて時間をかけなくなる段階への移行、すなわち集団祭祀の衰退を意味している。絵画をもち農耕儀礼の場で用いる「聞く銅鐸」が政治的儀礼に用いる「見る銅鐸」へと変質するのも、その一環である。それは、特定の親族あるいは首長の顕在化を表す墳丘墓の発達に示される政治的儀礼の比重の増大に起因するものであった。

## 1 序 説

近畿地方の弥生時代中期後半(弥生Ⅳ期)に、土器に描いた図像は、鹿や建物などを写実的に線描きした絵画である。ところが、後期(Ⅴ期)になると、絵画は突然、姿を消し、かわって抽象的な記号ふうの図像(以下、記号と略記)が発達する。そして、後期末(Ⅵ期)になると、記号もまた消滅する。

記号は何を象徴しているのか。絵画から記号への変化、そしてその消滅は何を語っているのか。

### 研究史

弥生土器の記号に関する研究史の冒頭を飾るのは、小林行雄による奈良県唐古遺跡の報告書のなかの記述である〔小林 1943b〕。小林は、これを「記号的文様」あるいは「記号的図形」と呼び、唐古遺跡出土例を集成・分類した(図1)。そして、使用者を表現する記号とする説を、同一地点の堅穴に違った記号のものが共存している事実をあげて批判し、また、製作者の記号とする説に対しても、「全体としていささか変化多きに過ぎて、そのうちに特定の土器製作者個人の姿を求むべくもやや影薄き感があった」として斥けた。しかし、「かかる図形施文の意義を尋ねんとする懸案に対しては、不幸にしてついに適確なる解答を与えるには至らなかった」。ただ、自らが確立した弥生土器の様式区分を援用して、絵画が第Ⅳ様式土器に、記号が第Ⅴ様式に発達することを明らかにし、絵画から記号への移行を示唆した。そのうえで、記号の使用が第Ⅳ様式にすでに部分的に「絵画に互して出現した」ことにも注意した。

それから間に敗戦と窮乏の時期をはさんでいたが、1971年に佐原眞が問題にするまでの約30年の間、記号を研究対象として取りあげることはほとんどなかった。佐原は、弥生時代畿内の政治的まとまりを示す現象として記号に着目し、その集成と分布図の作成をおこなった。そして、Ⅴ期に発達する長頸壺に記号を描いている例が多いこと、大和南部、河内中・南部、和泉すなわち畿内中樞部に集中的に分布する傾向があることを指摘した〔佐原 1971: 131~134〕(図2)。

約10年後、『考古学雑誌』では、増加してきた弥生土器の絵画と記号関係の資料の集成をはかって2回にわたる特集号を編んだ。絵画についての総論を書いた佐原は、記号にも触れ、その時期的な上限がⅡ期までさかのぼること、分布の西限が播磨(そして、飛んで日向)、東限が三河であることを明らかにした。また、弥生土器に、写実的表現と抽象的表現の共存する例があることに注目し、絵画から生まれた記号と、その動きに誘発されて生じた記号の二者があることを指摘した。そして、同じ記号で「遺跡をこえてみられるものもある」ことから、「明らかに記号が何かの意味をもって働いている」ことを見通した。さらに、記号は畿内で成立し、他地方へ伝わったとして、大和政権成立前史におこった重要な事象と位置づけた〔佐原 1980〕。

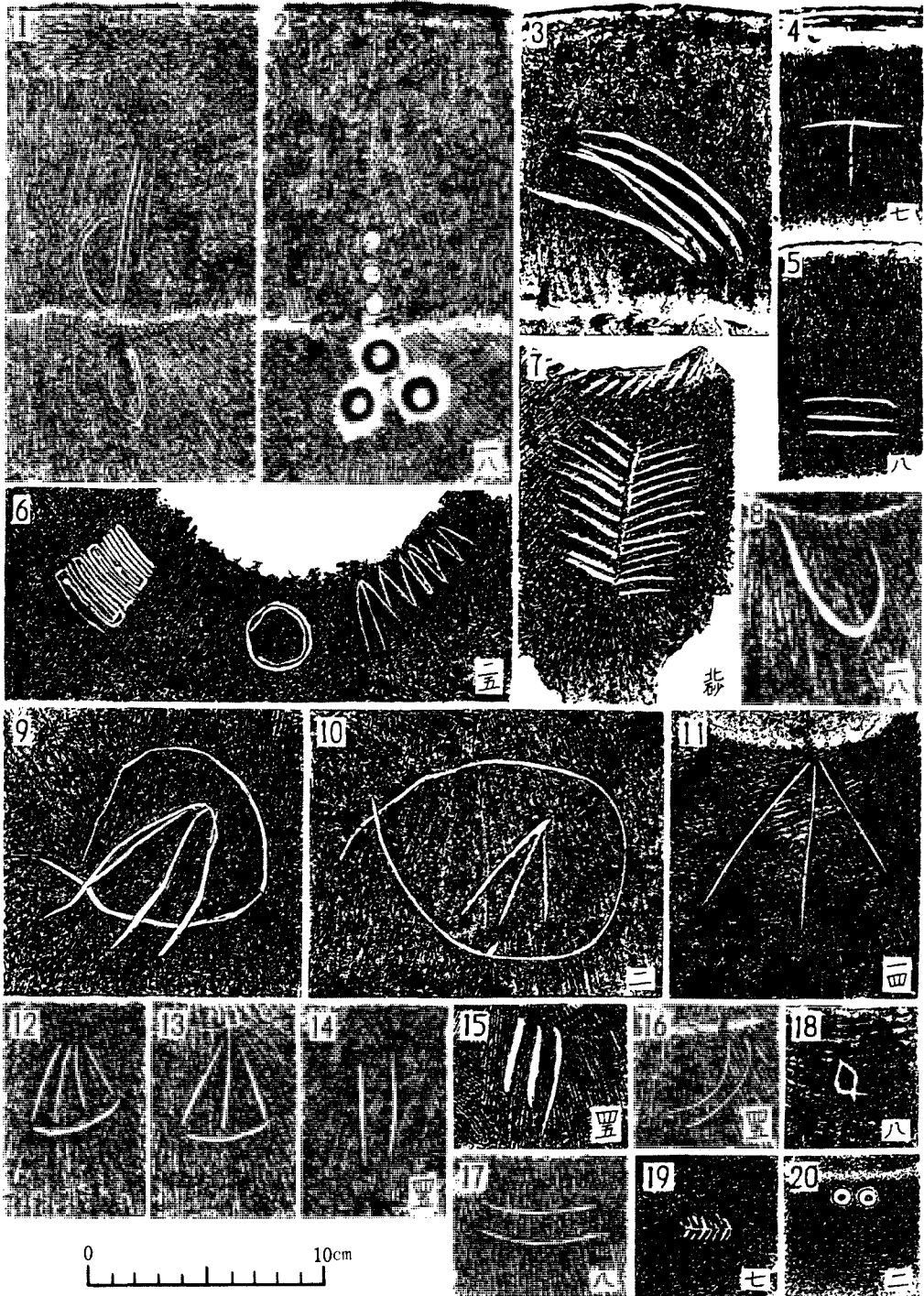


図1 唐古遺跡出土第Ⅴ様式土器の記号〔小林 1943〕(右下の文字は出土壜穴番号を示す) Fig.1

その後の注目すべき研究は、藤田三郎の分析と解釈である。藤田は、I期からV期までの記号約350例を、I型—曲線、II型—直線、III型—刺突に3大別し、さらにそれらを10類に細別する詳細な分類をおこなった<sup>(1)</sup>(図3)。そして、絵画と記号、または複数の記号を横に並列した14例を掲げ、左に鹿、右に狩人を配列した神奈川県「伊勢山」(=稲荷遺跡)<sup>(2)</sup>、三重県上箕田例を参考にして、左はI型=自然界または女性、右はII型=人間界または男性とみなし、この「構図は二元的世界の対立、あるいは結合としてとらえること」ができるとした。さらに、絵画と記号を配列した例では、三叉形記号は狩人の右側に位置することから、三叉形は狩人を意

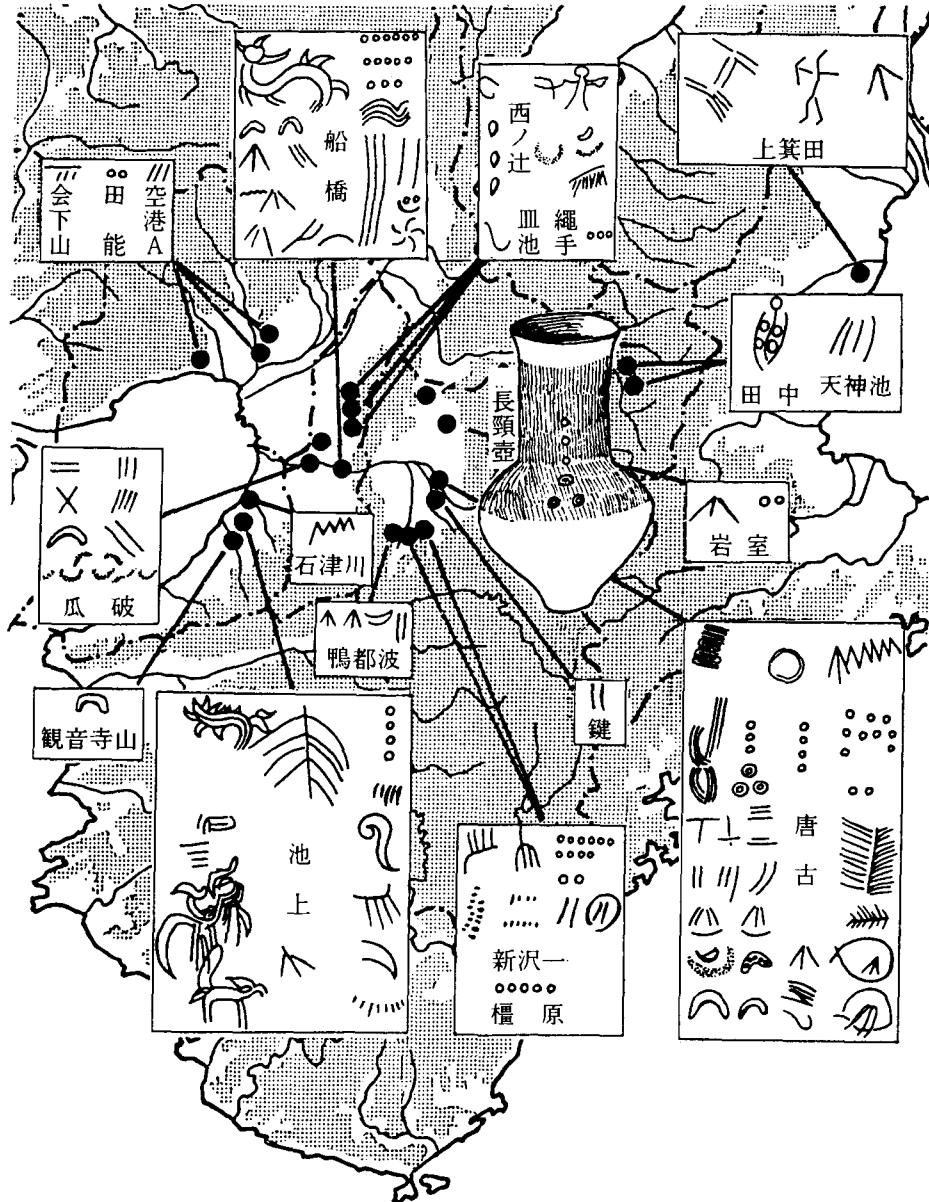


図2 記号の分布 [佐原 1971]

Fig.2

味する記号である可能性を説いた。  
 そして、「記号のあるところ、体系がある」というカラーの言葉〔カラー(川本訳) 1978: 133〕を引用して、「記号文の分布圏内にあつては記号を通じて一つの共通認識があつた」と述べ、「記号文」は「記号」としての位置づけが必要であることを強調した〔藤田 1982〕。

橿原考古学研究所は、このような動向をとらえて、絵画と記号を描いた土器を全国的に集めて特別展を催し、その写真目録を刊行した〔勝部・橋本編 1986〕。

こうして、記号が絵画と並んで、弥生時代の人々の「呪力・物語・思想を伝える媒介」で「原文字的な性格」をもつ資料という佐原の評価〔佐原 1980: 115〕は、共通の認識となり、記号はひろく注目されるようになってきた。

その後、斎藤明彦は、増加してきた大和の記号を集成し、記号が奈良盆地の東南部に集中的に分布していること

を明らかにした。また、記号と長頸壺との関連を特に検討した〔斎藤 1988〕。

橋本裕行は、東日本でそれまでその大部分が「紋様」として扱われていたものなから、絵画と記号を計79遺跡で173例(うち記号が130例以上を占める)抽出した。その結果、絵画と記号が通用する範囲は東日本の東海、中部高地、北陸、関東地方まで広がっていたこと、そして、北陸のあり方が畿内と一致する一方、のこりの地方ではⅢ期後半からⅣ期に三叉形が盛行したあと、東海地方ではⅥ期にもう一度盛行することなど、それぞれ地域色をもっていたことを明らかにした。また、Ⅰ期以来みられる三叉形記号も集成し、弥生土器の絵画の「シャーマン」が三本指に表現してあることから、三叉形は「シャーマン」の「しるし」と想像した〔橋本 1989〕。

**問題点**

弥生土器の絵画・記号例の増加とその分析の進展は、以上のように、それが使用された弥生

|                   |                |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
|-------------------|----------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|-------------------|-------|
| I                 | A              | A <sub>1</sub>     |                     | A <sub>2</sub>     |                     | A <sub>3</sub>     |                     | A <sub>4</sub>     |                     | A <sub>5</sub>     |                     | A <sub>N</sub>     |                   |       |
|                   |                | A <sub>1</sub> '   | —                   | A <sub>2</sub> '   | =                   | A <sub>3</sub> '   | ≡                   | A <sub>4</sub> '   | ≡                   | A <sub>5</sub> '   | ≡                   | A <sub>N</sub> '   | ≡                 |       |
|                   |                | A <sub>1</sub> ''  | ⊥                   | A <sub>2</sub> ''  | ⊥                   | A <sub>3</sub> ''  | ⊥                   | A <sub>4</sub> ''  | ⊥                   |                    |                     | A <sub>N</sub> ''  | ⊥                 |       |
|                   |                | A <sub>1</sub> ''' | +                   |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     | A <sub>N</sub> ''' | +                 |       |
|                   | B              | B <sub>1</sub>     | /                   | B <sub>2</sub>     | //                  | B <sub>3</sub>     | ///                 | B <sub>4</sub>     | ////                |                    |                     |                    | B <sub>N</sub>    | ////  |
|                   |                | B <sub>1</sub> '   | X                   | B <sub>2</sub> '   | XX                  | B <sub>3</sub> '   | XXX                 |                    |                     |                    |                     |                    | B <sub>N</sub> '  | XXX   |
|                   |                | B <sub>1</sub> ''  | ∧                   | B <sub>2</sub> ''  | ∧                   | B <sub>3</sub> ''  | ∧                   | B <sub>4</sub> ''  | ∧                   |                    |                     |                    | B <sub>N</sub> '' | ∧     |
|                   |                |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
|                   | II             | C                  | C <sub>1</sub>      | ∩                  | C <sub>2</sub>      | ∩                  |                     |                    |                     |                    | C <sub>N</sub>      | ∩                  |                   |       |
|                   |                |                    | C <sub>1</sub> '    | ∩                  |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     | C <sub>N</sub> '   | ∩                 |       |
|                   |                | D                  | D <sub>1</sub>      | ∩                  | D <sub>2</sub>      | //                 | D <sub>3</sub>      | ///                | D <sub>4</sub>      | ////               | D <sub>5</sub>      | /////              | D <sub>N</sub>    | ///// |
|                   |                |                    | D <sub>1</sub> '    | ∩                  |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
| D <sub>1</sub> '' |                |                    | ∩                   |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
| E                 |                | E <sub>1</sub>     | ∩                   | E <sub>2</sub>     | ∩                   |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
|                   |                | E <sub>1</sub> '   | ∩                   |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
| G                 |                | F <sub>1</sub>     | ∩                   |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
|                   |                | G <sub>1</sub>     | ○                   | G <sub>2</sub>     | ○○                  | G <sub>3</sub>     | ○○○                 | G <sub>4</sub>     | ○○○○                | G <sub>5</sub>     | ○○○○○               | G <sub>6</sub>     | ○○○○○○            |       |
|                   |                |                    |                     | G <sub>2</sub> '   | ○                   | G <sub>3</sub> '   | ○                   | G <sub>4</sub> '   | ○                   | G <sub>5</sub> '   | ○                   | G <sub>6</sub> '   | ○                 |       |
|                   |                |                    |                     | G <sub>2</sub> ''  | ○                   | G <sub>3</sub> ''  | ○                   | G <sub>4</sub> ''  | ○                   | G <sub>5</sub> ''  | ○                   | G <sub>6</sub> ''  | ○                 |       |
|                   |                |                    |                     | G <sub>2</sub> ''' | ○                   | G <sub>3</sub> ''' | ○                   | G <sub>4</sub> ''' | ○                   | G <sub>5</sub> ''' | ○                   | G <sub>6</sub> ''' | ○                 |       |
|                   |                |                    | G <sub>2</sub> '''' | ○                  | G <sub>3</sub> '''' | ○                  | G <sub>4</sub> '''' | ○                  | G <sub>5</sub> '''' | ○                  | G <sub>6</sub> '''' | ○                  |                   |       |
| H                 | H <sub>1</sub> | ∩                  | H <sub>2</sub>      | ∩                  |                     |                    |                     |                    |                     | H <sub>N</sub>     | ∩                   |                    |                   |       |
|                   |                |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
| III               | I              |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                     |                    |                   |       |
|                   | J              | J <sub>3</sub>     | ...                 | J <sub>4</sub>     | ....                | J <sub>5</sub>     | .....               | J <sub>6</sub>     | .....               |                    |                     | J <sub>N</sub>     | .....             |       |

図3 記号の分類〔藤田 1982〕

Fig.3

社会の変化のみならず、それが通用した範囲を限定し、さらにはその社会の精神世界にかかわる部分をも解明していくうえで重要な手がかりとなる展望を示しはじめている。

しかし、諸記号のなかで各種の記号が占める量的な関係については明らかにされていない。資料の初期的な整備がまだなされていないのである。さらに、個々の記号のもつ意味にいたっては、ほとんど未解明のままである。それは、奈良県新沢一町遺跡や大阪府池上遺跡から出土した土器の、弧線の下に4本の直線を引いた記号を鹿の絵画に由来していると解釈し、「図像そのものが抽象的表現をとって記号化したもの」があること、また、「伊勢山」・上箕田、広島県新迫南遺跡出土の土器に描かれた鹿と三叉形記号について、「具象と抽象との共存」を「具象的表現から抽象的表現への過程のひとつこまとして注目」しながらも、全体としては記号が絵画から直接由来したとは考えず、「最初からまったく抽象的記号として生まれた」〔佐原 1980: 115〕、と先見的にとらえたことに起因する。弥生土器の記号の詳細な分類をおこなった藤田や橋本にしても、個々の記号の意味についての追究にはあまり関心を示していない。

けれども、弥生土器の記号の意義を明らかにするには、まず絵画と記号との比較をおこない、個々の記号が何に由来しているのかを解明することが必要である。そして、記号群は全体として何を意味しているのかについての考察にまで踏みこまなければ、弥生時代の記号の「原文字的な性格」に対する認識はけっして深まっていけないのである。

小論では、先に試みた銅鐸と弥生土器に描かれた絵画の分析の方法と結果〔春成 1989, 1990, 1991 a・b・c〕を援用し、上記の課題に迫ってみたい。

## 2 絵画と記号の出現頻度

### 土器と銅鐸の絵画

弥生土器の絵画は、I期末にまず北部九州に鹿が現れ、II期に近畿地方にも人物が登場する。しかし、III期にいたっても、土器に絵画を描くのは稀有のことであって、いわば散発的に描かれた段階に属する。ところが、IV期になると、俄然、土器絵画が近畿地方を中心に発達する。しかし、V期になると、近畿地方と北陸地方では、絵画が激減し、代わって記号が発達する。ただし、中国地方や東海地方では、この時期にも少数ながら絵画がのこっており、別のあり方を示している。VI期になると、日本全域で絵画も記号もほとんど消滅する。

その一方、銅鐸の絵画は、菱環鈕2式に出現し(1個)、外縁鈕式で発達する(1式は同範銅鐸も1個ずつ数えると17個、同範銅鐸1組を1個と数えると10個。2式は前者の数え方で鑄型のみが発見も含めると25個、後者の数え方だと17個、うち6個は福田型またはその鑄型)。そして、扁平鈕式になると減少し(6個、うち1個は九州産鑄型)、次の突線鈕式の途中で消滅する(8個、1式2個、3式1個、三遠式に5個)。すなわち、銅鐸絵画はIII期に盛行するのに対して、土器絵画は遅れて

IV期に盛行期を迎える。

弥生土器と銅鐸の絵画を、画題によって分類し、統計をとると、以下のようになる（〔春成1991a：表1・3・4〕を改変。スタンプ紋を含む）。なお、資料の取扱いを厳密にするために、弥生土器のばあいは、九州から関東地方まで含む日本全域の全時期の統計と、近畿地方のIV期だけに限った統計とを掲げ、銅鐸のばあいは、九州および東海地方産を含むすべての絵画銅鐸の統計と、近畿地方産に限った統計とを掲げることとする。

表1 土器絵画の各画題の出現頻度

Tab.1

|      | 日本全域 I～VI期 (186個体) |       |    | 近畿地方IV期 (97個体) |       |    |
|------|--------------------|-------|----|----------------|-------|----|
|      | 個数                 | 百分率   | 順位 | 個数             | 百分率   | 順位 |
| 鹿    | 88                 | 47.3% | 1  | 48             | 49.5% | 1  |
| 建物   | 41                 | 22.0  | 2  | 31             | 32.0  | 2  |
| 鳥    | 22                 | 11.8  | 3  | 9              | 9.3   | 3  |
| 人物   | 19                 | 10.2  | 4  | 9              | 9.3   | 3  |
| 竜    | 14                 | 7.5   | 5  | 0              | 0     |    |
| 船    | 9                  | 4.8   | 6  | 5              | 5.2   | 6  |
| 魚    | 7                  | 3.8   | 7  | 7              | 7.2   | 5  |
| 猪    | 1                  | 0.5   | 8  | 0              | 0     |    |
| 不明動物 | 4                  | 2.2   |    | 0              | 0     |    |

表2 銅鐸の各画題の出現頻度

Tab.2

|      | 九州・近畿・東海産 (51個体) |       |    | 近畿産 (29個体) |       |    |
|------|------------------|-------|----|------------|-------|----|
|      | 個数               | 百分率   | 順位 | 個数         | 百分率   | 順位 |
| 鹿    | 24               | 47.1% | 1  | 23         | 79.3% | 1  |
| 建物   | 3                | 5.9   | 10 | 3          | 10.3  | 10 |
| 鳥    | 18               | 35.3  | 2  | 8          | 27.6  | 4  |
| 人物   | 14               | 27.5  | 3  | 12         | 41.4  | 2  |
| 船    | 1                | 2.0   | 4  | 1          | 3.4   | 14 |
| 魚    | 9                | 17.6  | 5  | 7          | 24.1  | 5  |
| 猪    | 4                | 7.8   | 9  | 4          | 13.8  | 9  |
| トンボ  | 10               | 19.6  | 4  | 10         | 34.5  | 3  |
| カマキリ | 7                | 13.7  | 6  | 7          | 24.1  | 5  |
| トカゲ  | 6                | 11.8  | 7  | 6          | 20.7  | 7  |
| 蛙    | 6                | 11.8  | 7  | 6          | 20.7  | 7  |
| クモ   | 3                | 5.9   | 10 | 3          | 10.3  | 10 |
| 犬    | 2                | 3.9   | 12 | 2          | 6.9   | 12 |
| 蛇    | 2                | 3.9   | 12 | 2          | 6.9   | 12 |
| カニ   | 1                | 2.0   | 14 | 1          | 3.4   | 14 |
| 不明動物 | 2                | 3.9   |    | 1          | 3.4   |    |

以上のように日本全域と近畿地方IV期の土器との間には決定的な差異は見出しがたい。土器では画題のおおよその割合が、鹿5、建物3、人物1、鳥1、船0.5、魚0.5である。鹿の描かれる頻度はきわめて高く、鹿に次いで多いのは建物であるが、その多くは高床倉庫を表現し、また、鹿と組み合わせて描いた例が7個知られている。土器絵画の画題は少なく、IV期では僅

か6種類にすぎない。

それに対して銅鐸では、近畿産とそれに九州・東海産を加えたすべてとは、鳥の出現頻度に大きな差が生じるが、他はほとんど変わらない。近畿産では、画題のおおよその割合は、鹿8，人物5，トンボ3.5，鳥3，魚2.5，カマキリ2.5……である。画題は15種類で、土器の2倍以上ある。鹿の頻度が高いのは土器と同様であるが、以下の順位は土器とは異なる。特に目につくのは、土器で2番目を占めていた建物が銅鐸では下位に位置し、船にいたっては最下位を占め、それに代わってトンボ，鳥，カマキリなどの割合が高くなるという点である。土器と銅鐸では、画題の優先順位がちがうわけである。

### 土器と青銅器の記号

弥生土器の記号は、奈良県唐古遺跡では、I期に三叉形，十字形，縦または横線，重弧形，二重円形がすでに見られる(図4)。しかし，そのうち後の時期まで継続するのは三叉形だけである。

土器と青銅器の記号を分類し，V期の統計をとってみよう。

土器の記号は多い順に並べると，篋描きの沈線，竹管の先の刺突，粘土小塊をはりつけた浮紋，ハケメの原体の角または篋先の刺突ないし移動による短い沈線，櫛描きの沈線，丹塗りの

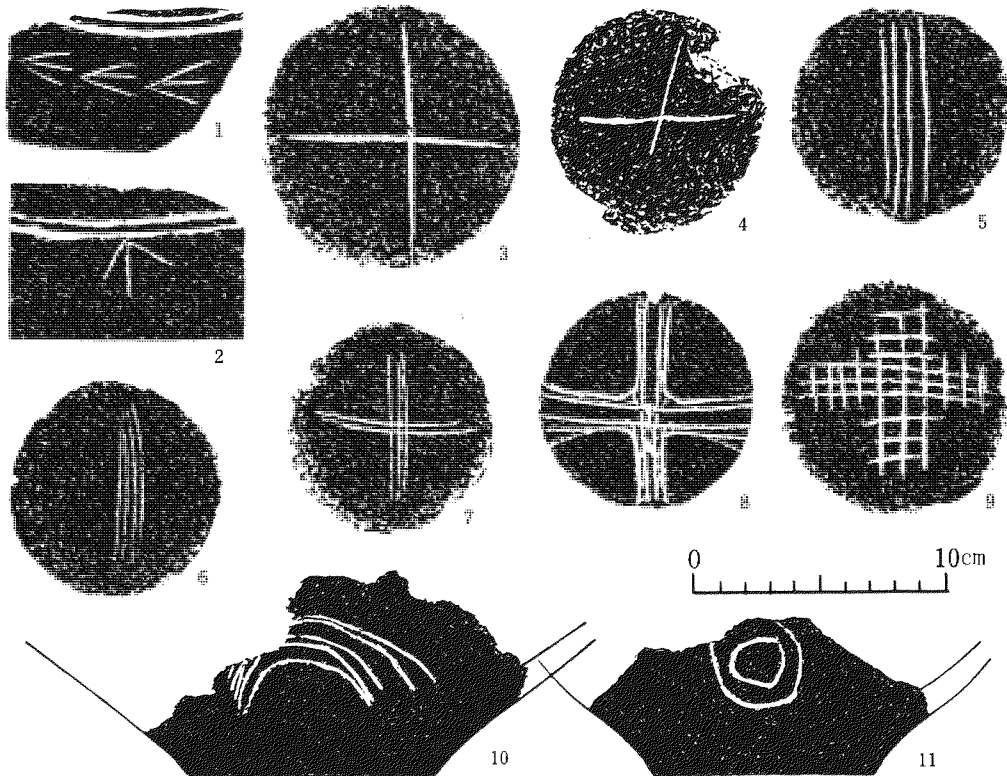


図4 唐古遺跡出土第I様式土器の記号〔小林 1943〕

Fig. 4



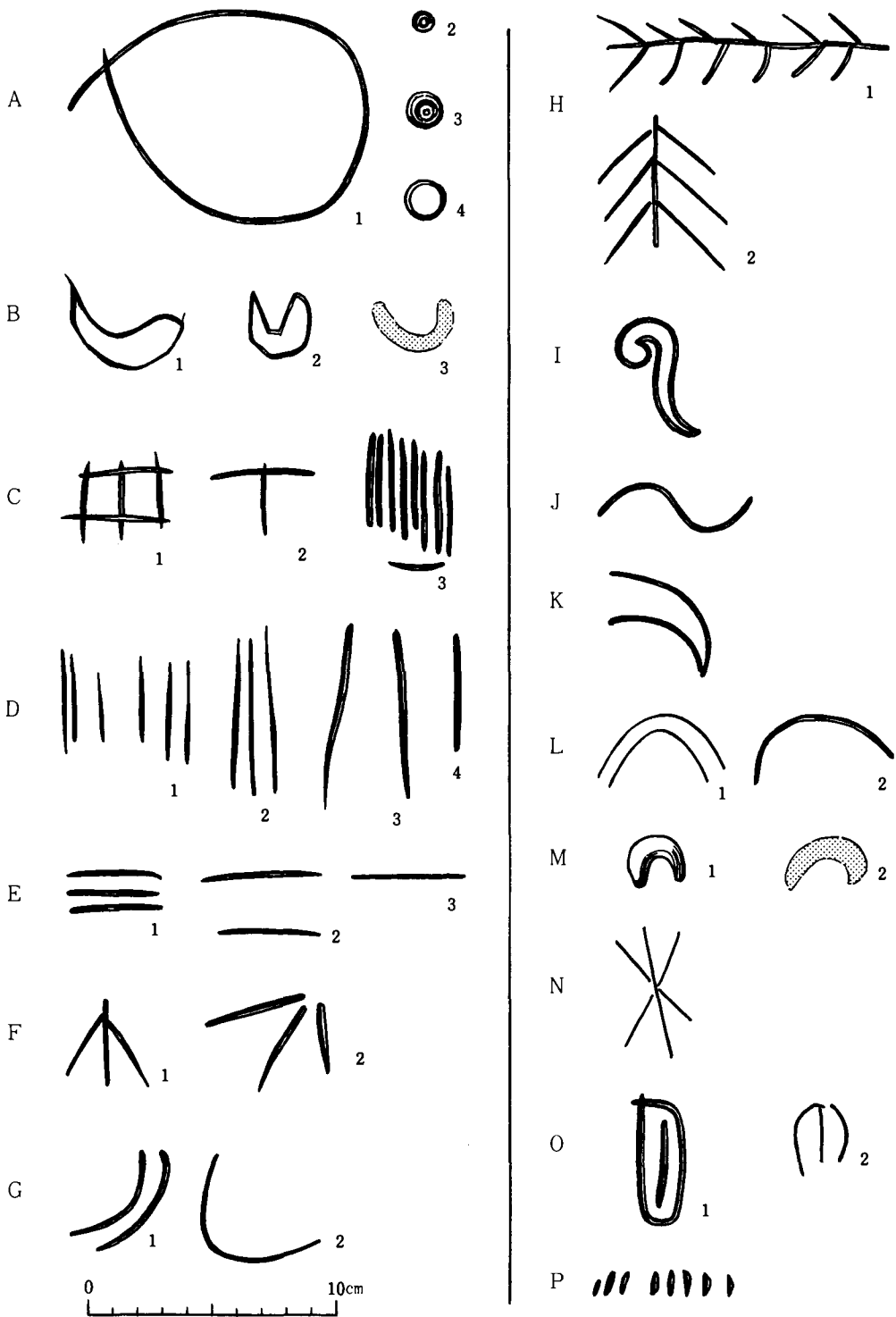


図5 記号の分類(A3・A4・B2・M1は浮紋, B3・M2は彩紋)

Fig. 5

表3 V期の土器に描かれた記号

Tab.3

|         | 円  | なすび | 縦横 | 縦線 | 横線 | 三叉 | 下弧 | 綾杉 | 竜 | 巴 | 鱗 | 上弧 | 木葉 | 列点 | その他      | 文献  |
|---------|----|-----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|----|----|----|----------|---|
| 奈良県     |    |     |    |    |    |    |    |    |   |   |   |    |    |    |          |   |
| 奈良市六条山  | 1  | —   | 1  | —  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [寺沢1977]                                      |
| 天理市和爾森本 | 1  | —   | 1  | —  | —  | —  | 1  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [中井1983]                                      |
| 天理市岩室   | 3  | —   | —  | 3  | —  | 1  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [楠元ほか1985]                                    |
| 田原本町唐古  | 13 | 2   | 2  | 4  | 2  | 7  | 4  | 2  | 1 | — | — | 4  | 1  | —  | (上弧3は浮紋) | [小林1943]・[藤田1989]                             |
| 桜井市芝    | 1  | —   | —  | —  | 1  | —  | —  | —  | — | — | — | 1  | 1  | —  | (上弧は浮紋)  | [松本1986]                                      |
| 桜井市大福   | 3  | —   | 2  | —  | —  | —  | —  | —  | — | 1 | — | —  | —  | —  | —        | [亀田1973]                                      |
| 桜井市吉備   | 1  | —   | —  | —  | 1  | —  | 2  | —  | 1 | — | — | —  | —  | —  | —        | [清水1986]                                      |
| 橿原市坪井   | 3  | —   | —  | 1  | —  | 1  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [佐々木1983]・[斎藤1988]                            |
| 橿原市中曾司  | 4  | 1   | 1  | —  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | 1  | 1  | —  | (なすびは浮紋) | [斎藤1988]                                      |
| 橿原市四分   | 15 | —   | 1  | 6  | 1  | 1  | 1  | 1  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [西村ほか1980]                                    |
| 橿原市橿原   | 1  | —   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | — | 1 | — | —  | —  | —  | —        | [末永1961]                                      |
| 橿原市忌部山  | —  | —   | 2  | —  | —  | 1  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | 波形1   |
| 橿原市上ノ山  | 7  | —   | —  | 3  | —  | —  | 6  | —  | 1 | — | — | 1  | —  | —  | —        | [斎藤1988]                                      |
| 橿原市新沢一町 | 6  | 1   | —  | —  | 1  | 2  | 3  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | (なすびは浮紋) | [吉田1928]                                      |
| 御所市鴨都波  | —  | —   | —  | 1  | —  | 2  | 1  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [網干1965]                                      |
| 大阪府     |    |     |    |    |    |    |    |    |   |   |   |    |    |    |          |   |
| 東大阪市西ノ辻 | 4  | —   | 1  | 1  | —  | —  | 1  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | (円3は浮紋)  | [小林1958]                                      |
| 東大阪市西岩田 | —  | —   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | 梯子形1  |
| 東大阪市巨摩  | 1  | —   | —  | —  | 1  | —  | 2  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | 二叉形1  |
| 東大阪市友井東 | 1  | —   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [井藤ほか1982]                                    |
| 八尾市萱振   | —  | —   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [井藤ほか編1984]                                   |
| 八尾市亀井   | 10 | —   | 1  | 14 | 1  | —  | —  | —  | — | — | — | 1  | —  | 3  | (上弧は浮紋)  | [大阪府教委1984]                                   |
|         |    |     |    |    |    |    |    |    |   |   |   |    |    |    |          | [寺川ほか編1980]・[中西ほか編1982]・[高島ほか編1983]・[宮崎編1984] |
| 八尾市城山   | 2  | —   | —  | —  | —  | —  | 1  | —  | — | — | — | 1  | —  | —  | —        | [赤木編1986]・[藤永ほか1986]                          |
| 八尾市高安   | —  | —   | 1  | —  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [原田ほか1976]                                    |
| 八尾市恩智   | 10 | —   | 1  | —  | 2  | 1  | 1  | —  | 1 | — | — | —  | —  | —  | —        | [瓜生堂調査会1980]                                  |
| 大阪市瓜破   | —  | —   | —  | —  | 1  | —  | —  | —  | — | 1 | — | 2  | —  | —  | (上弧1は浮紋) | [佐原1968]                                      |
| 藤井寺市船橋  | 5  | —   | —  | 3  | —  | 3  | 2  | —  | 2 | — | — | 5  | —  | —  | (上弧3は浮紋) | [佐原1968・1971]                                 |
| 和泉市池上   | 2  | —   | —  | —  | —  | 1  | —  | 1  | 1 | 1 | 1 | —  | 1  | 1  | *形1      | [大阪文セ1979]                                    |
| 高槻市安満   | —  | —   | 1  | 1  | —  | —  | —  | —  | — | — | 1 | —  | —  | —  | —        | [森田編1977]                                     |
| 兵庫県     |    |     |    |    |    |    |    |    |   |   |   |    |    |    |          |   |
| 伊丹市大阪空港 | —  | —   | —  | 1  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [佐原1971]                                      |
| 尼崎市田能   | 2  | —   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | — | — | — | —  | —  | —  | —        | [福井編1982]                                     |

|         |     |      |     |     |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |                     |
|---------|-----|------|-----|-----|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---------------------|
| 芦屋市会下山  | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [村川ほか1964]          |
| 神戸市大蔵山  | 1   | —    | —   | 1   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [勝部・橋本編1986]        |
| 加古川市東神吉 | —   | —    | —   | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [今里1969]            |
| 姫路市深田   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | 1   | —   | —   | —   | [今里1969]            |
| 京都府     |     |      |     |     |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |                     |
| 宇治市羽戸山  | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | 1   | [石井1989d]           |
| 木津町燈籠寺  | 1   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [京都埋文セ1991]         |
| 京都市中久世  | 1   | —    | —   | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | 2   | —   | —   | —   | [伊藤1983]・[上村1987]   |
| 向日市東土川西 | 1   | —    | —   | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [國下1989]            |
| 亀岡市北金岐  | 1   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [田代1986]・[石井1989a]  |
| 亀岡市南金岐  | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [石井1989b]           |
| 亀岡市千代川  | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | 1   | —   | —   | —   | [石井1989c]           |
| 綾部市青野   | 1   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [釋1976]             |
| 舞鶴市水無月山 | 1   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [釋ほか1980]           |
| 滋賀県     |     |      |     |     |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |                     |
| 安曇川町南市東 | 2   | —    | —   | 2   | 1    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | 1   | —   | —   | —   | (上弧は浮紋)             |
| 大津市滋賀里  | —   | —    | —   | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [中江1978]・[林1981]    |
| 大津市北大津  | 1   | 1    | —   | —   | —    | —   | 2   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [田辺ほか編1973]         |
| 野洲町久野部  | —   | —    | —   | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [中西1979]            |
| 能登川町宮ノ前 | —   | —    | —   | —   | —    | —   | 1   | —    | —   | —   | —   | —   | 1   | —   | —   | —   | (上弧は浮紋)             |
| 湖北町丁野   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | 1   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [大橋ほか1977]          |
| 三重県     |     |      |     |     |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |                     |
| 鈴鹿市上箕田  | —   | —    | —   | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [佐原1968]・[林1981]    |
| 宮崎県     |     |      |     |     |      |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |                     |
| 佐土原町下那珂 | —   | —    | —   | 1   | —    | —   | —   | —    | 1   | —   | 1   | —   | —   | —   | —   | —   | [田中1975]・[谷口ほか1988] |
| 宮崎市中岡   | 2   | —    | —   | 1   | 1    | —   | 4   | —    | —   | —   | —   | —   | 1   | —   | —   | —   | [荒武編1987]           |
| 宮崎市熊野原  | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | 5   | —   | —   | —   | [菅付1988]            |
| 宮崎市陣ノ内  | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [永友1988]            |
| 清武町加納   | 1   | —    | 1   | —   | —    | —   | 2   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [森本・小林1938]・[森1968] |
| 都城市丸谷第1 | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | 2   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [面高1979]            |
| 都城市祝吉   | 1   | —    | —   | —   | —    | —   | 1   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | [北郷1981]            |
| 串間市大田井  | —   | —    | 1   | —   | —    | —   | —   | —    | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | —   | 複波形1<br>[田中1975]    |
| 合計      | 319 | 110  | 5   | 22  | 43   | 13  | 26  | 38   | 4   | 9   | 4   | 3   | 28  | 4   | 5   | 5   |                     |
| 百分率     | %   | 34.5 | 1.6 | 6.9 | 13.5 | 4.1 | 8.2 | 11.9 | 1.3 | 2.8 | 1.3 | 0.9 | 8.8 | 1.3 | 1.6 | 1.6 |                     |

彩紋が知られている。それらを、表現された形状によって、おおよそ次のように分類する(図5)。

- |                      |                |
|----------------------|----------------|
| A 円形(篋描き, 竹管刺突紋, 浮紋) | I 巴形(篋描き)      |
| B なすび形(篋描き, 浮紋, 彩紋)  | J 横逆S字形(篋描き)   |
| C 縦横交差線(篋描き)         | K 鱗形(篋描き)      |
| D 縦線1~6本(篋描き)        | L 上弧線(篋描き1~2本) |
| E 横線1~4本(篋描き)        | M 上弧形(浮紋, 浮紋)  |
| F 三叉形(篋描き)           | N *形(篋描き)      |
| G 下弧線1~3本(篋描き)       | O 木葉形(篋描き)     |
| H 綾杉形(篋描き)           | P 列点(篋描き, 刺突)  |

なお、記号のなかには竹管紋や刺突紋のように、構成要素が紋様とまったく同じであるために、描き方によっては記号と紋様を区別することが難しいばあいがある。もともと紋様も一種の記号であるから、両者の区別が困難なことは当然ともいえる。

ここでは、便宜的に、V期の記号と紋様との区別を次のようにおこなっておきたい。記号とは、土器のばあい、沈線紋、竹管紋、刺突紋などを、主として頸部と胴部上半、一部胴部下半や底部に、部分的に施したものを指す。そして、口縁部や頸部、胴部を連続的あるいは規則的に一周するものは紋様として、記号からは除く。ただし、長頸壺の頸部を一周する1本線だけは、紋様とはいいがたいので、記号として扱う。そうすると、なかには長頸壺の頸・胴部界に刺突紋を一周させた例など、逆に記号が紋様化したものではないかと疑わせるが、判断が難しいので、ここでは紋様のうちにいれておきたい。

なお、小林行雄が指摘し〔小林 1943: 116~118〕、藤田三郎が注目している〔藤田 1982: 130〕ように、記号のなかには、円形と三叉形、あるいは三叉形と下弧線の二つの記号を重複または上下に配列して一つの記号に合成したものが存在する。ここでは、分離して統計をとり、のちに合わせて解釈を試みたい。

これらをまとめると(表3)、円形がとびぬけて多く、ついで縦線、縦横交差線または横線、そして下弧線、上弧線、三叉形が普通にあり、なすび形、綾杉形、巴形、鱗形、\*形、木葉形の表現になると稀である。記号もまた、けっして種類が多いとはいえないのである。

IV期からV期にかけて絵画から記号への変化は、きわめて突然で、しかも大きい。これまで多くの研究者が絵画の個々の画題と記号とを直結させて考察しなかった理由は、ここにある。しかし、絵画から生まれた記号が存在するとすれば、土器に表現された象徴体系がまったく別のものになってしまうとは考えにくい。象徴体系の表現方法の変化、すなわち、類型化する記号のそれぞれは、絵画の個々の画題の記号的表現であると予想し、絵画と記号とを直接比較してその間の関連を追究する試みが必要である。

表4 青銅器に描かれた記号

Tab.4

|        |          | 部位   | 形状 | 備考  | 文献        |           |
|--------|----------|------|----|-----|-----------|-----------|
| 大阪府    |          |      |    |     |           |           |
| 茨木市東奈良 | 大阪湾型銅戈鋳型 | 茎    | ×  |     | [藤沢1976]  |           |
| 兵庫県    |          |      |    |     |           |           |
| 神戸市桜ヶ丘 | 大阪湾型銅戈2号 | 茎    | 三叉 |     | [三木1969]  |           |
|        |          | 4号   | 茎  | 三叉  | [三木1969]  |           |
|        |          | 6号   | 身  | 矢印  | 铸造後       | [三木1969]  |
| 島根県    |          |      |    |     |           |           |
| 斐川町荒神谷 | 中細形銅劍B7号 | 茎    | ×  | 铸造後 | [足立編1985] |           |
|        |          | C2号  | 茎  | ×   | 铸造後       | [足立編1985] |
|        |          | C52号 | 茎  | ×   | 铸造後       | [足立編1985] |

### 3 絵画から記号への移行過程

#### 鹿から円形記号へ(図6)

円形の記号については、どの遺跡でも記号のなかでとびぬけて頻度が高い。1個の土器にくつも施す例が多いのも、他の記号にはみない著しい特徴である。これは、IV期の鹿と共通する大きな特徴であるから、鹿と記号との関連を明らかにしなければならない。

弥生土器では鹿を線描きするときは、奈良県天理市清水風a例や唐古a例のように、まず頸から腹部の線を描き、次に頸から背中の中線(背稜線)を描くのが普通であって、頭部や角、4本の脚はその後に描き加えている。そして、体部が透明でないことを示すために、輪郭線の内部を斜格子文で充填することが多い。

しかし、清水風遺跡や唐古遺跡ではそれらに混じって、体部を埋めないで空白にしている清水風c例や唐古c例が出土している。斜格子文を描きこまなくても、体部がつまっていると理解できたのであるから、この省略は消極的な、一種の抽象化である。

部分の省略という点では、IV期の土器のなかに清水風d例のように、頭部表現を完全に省略した鹿の絵画[井上・木下1987:92]が存在することが特に注意をひく。このばあいは、もはや頭部や角の有無は問題にされなかったのである。鹿の存在を表現すればそれでよかったのであろう。その意味では、この例は鹿の抽象化へ、さらに一步踏みこんでいると評価することができよう。

鹿を表す記号としてすでに認められているのは、し字形の弧線の下に4本の直線を垂下した奈良県一町a例と大阪府池上例で、報告者は鹿を簡略化した表現と考えている[網干1962]・[大阪文セ1979:126]。このばあいの絵画から記号への過程は、かなり容易にとらえることができる。清水風c例の、体部を斜格子文で埋めていない鹿から背中の中線と頭部を省略してみよう。

前記2例とほとんど同じ構図に変化する。原型をのこした、抽象度の比較的低い記号といえよう。

鹿の絵画で頭部や体内充填あるいは背中線の省略が可能とすれば、V期前葉に属する唐古d例の「一見逆三ヶ月状のもの」〔久野1980:93〕が注目される。これは、二筆で輪郭だけを描いたもので、上下の線は左側では徐々に細くすぼまり1点に合するのに対して、右側では一旦広がり図形にふくらみをもたせたのち急にすぼまり1点に合する。古く森本六爾が紹介した「単に動物の輪郭のみが篋書されている」唐古e例〔森本1924:20~22〕も、同じ類である。体部を填めていない鹿から、頭部と4本の足の表現を省略すると、なすび形の輪郭になるから、これらの例は鹿の体部のみの表現の可能性が大きい。奈良県中曽司例や一町b例のなすび形の浮紋〔斎藤1988:8〕も、同類であろう。下弧形の彩紋の唐古f例〔小林1943:第38図529〕も、この類かもしれない。

さらに、唐古遺跡からは一筆描きの不整円形に三叉形を重ねた記号〔小林1943:117〕(図1-9・10)が2例出土している。三叉形はそれだけが独立して描かれることが多いから、これを除くと、片方の側端が少し尖った不整円形がのこる(唐古h例、三叉形は省略)。これは先のなすび形の抽象化をさらに進めた形とみることができる。その点で、大阪府西ノ辻例〔小林1955:110~111〕(図14-4)に、弓をもち矢を放とうとしている狩人の前に、完全な円形ではないがC字形の図形を配した例が認められることは、示唆的である。

こうなると、唐古j・k・l例〔小林1943:第38図527・532・第39図548〕や四分例〔西村ほか1980:PL.62〕のような、記号のなかでもっとも例の多い、竹管の先を押捺した円形も、篋描きの円形から発想したと考えたくなる。竹管紋のなかで注意をひくのは、縦1列に3個の竹管紋、その下に三角形に3個の円形浮紋を配置して逆Y字形の図形にした唐古j例や、横3列に3個、4個、2個の竹管紋を連ねて2脚をもつ台形に配置した唐古k例のように、複数の竹管紋全体で一つの図形を表現しているように見えるものが存在することである。そこであらためて鹿の図像とを比較すると、唐古j例は、縦の3個が細い頸、浮紋の3個が立体的な胴部を表現しているとみることができる。また、唐古k例は、台形が体部、その下左右の竹管紋が脚を意味しているように見える。この2例は、ともに唐古遺跡の18号堅穴からの出土であることも、共通の発想にもとづく表現法であることを示唆している。

こうして、V期の記号のなかで首位を占める竹管紋による円形記号は、鹿の全身像→なすび形→一筆描きの円形の過程で、鹿形に連ねて鹿を表現することから始まり、やがて鹿の姿を究極まで単純化した表現になった、と推論できる。藤田三郎によると、V期の前葉には浮紋・彩紋が多く、竹管文はV期中葉から後葉に盛行するとい<sup>(3)</sup>う〔藤田1982:127〕。篋描きの円形に触発されて、竹管紋による鹿の円形記号が出現したことを示す傍証となるかもしれない。

なお、記号の分類で上弧形(浮紋)としたものは、下に開く弧形の立体的なものであるが、

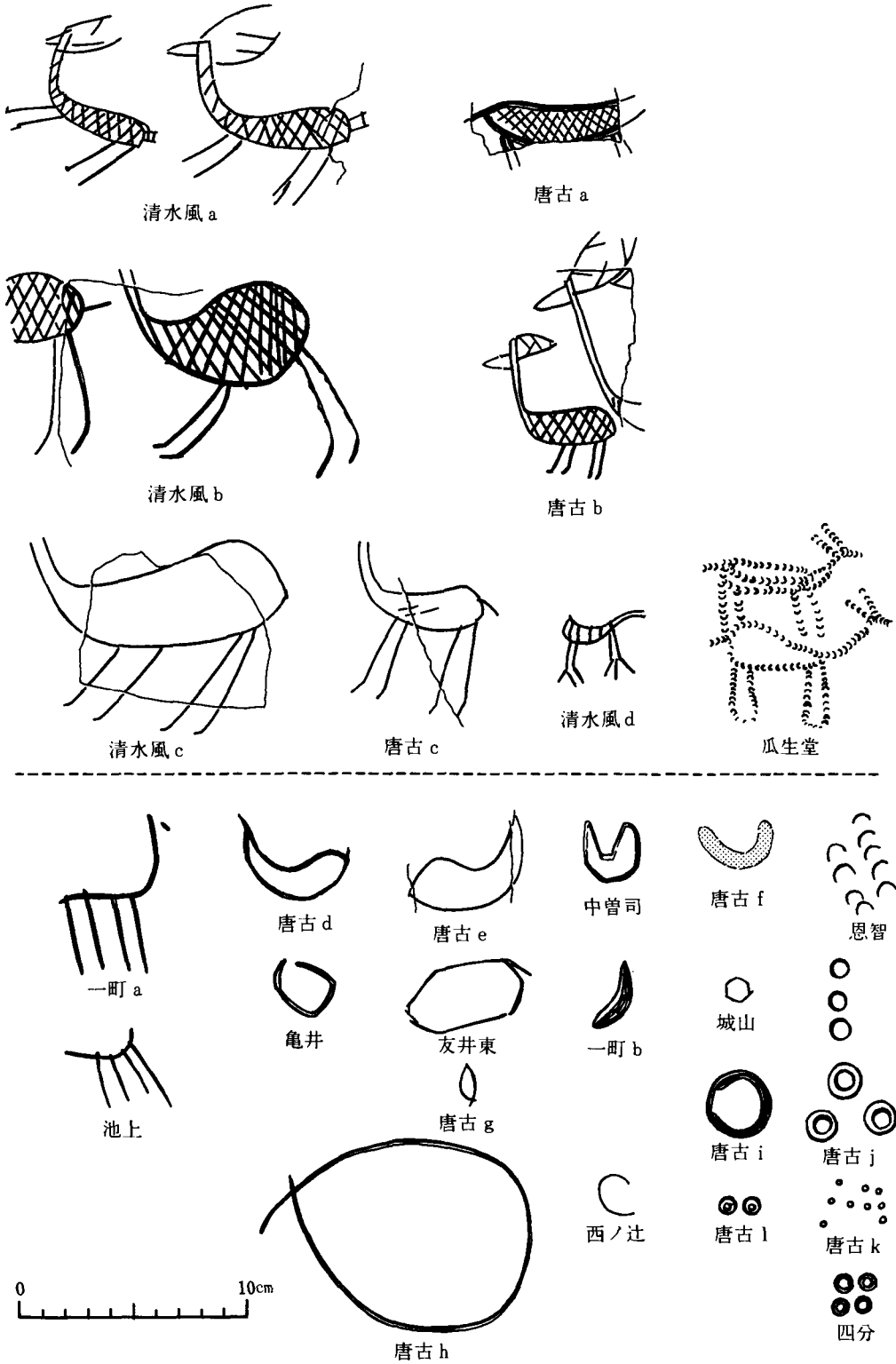


図6 鹿の絵画と記号(中曾司・一町bは浮紋, 唐古fは彩紋)

Fig. 6

これは、上弧線との関連は薄いようにみえる。その一方、この形を90度回転した浮紋の例が、一町b例〔斎藤 1988 : 8〕にあるから、これはなすび形の変形と推定しておきたい。なかには、唐古例(図17-12)のように、浮紋上に6字形の渦紋4個を魚子状に配しているものがある。浮紋による記号は、V期の前葉に発達していることと合わせ考えると、これらの立体的な記号についても鹿の可能性を予想することもできる。

さらに、半載竹管紋を並行する2列に配置した恩智例〔瓜生堂遺跡調査会 1980 : 95〕も、全体で一つの記号を作っているようにみえる。その一方、瓜生堂例〔瓜生堂遺跡調査会 1981 : 142〕のように、半載竹管紋を連ねて鹿を表現した一種の絵画がIV期に存在する。鹿の記号の変異幅の大きさを考慮すると、恩智例も角または頭部だけを表現して鹿に代えている可能性があるだろう。

上に例示したように、鹿を表すと推定される記号はきわめて豊富である。唐古遺跡においても、IV期の鹿の絵画とV期の円形記号との間を填める候補として、篋描き・浮紋・彩紋によるなすび形の記号、竹管紋・浮紋を逆Y字形に連ねた記号、竹管紋をコ字形に連ねた記号など鹿の絵画の具象性をどこかにとどめている記号が存在する。そして、篋描き・竹管紋による具象性をほぼ完全に失った円形記号が、そのあとにつづく。これは、鹿の絵画に多くの変異があるように、それが記号に推移する過程にも、多くの変異があると理解すべきなのであろう。ただ、なすび形の記号のうち篋描きのそれは、絵画の鹿の胴部の形状を正確にとどめており、鹿の絵画と円形記号とをつなぐ「失われた環」に相当するもっとも重要な位置を占めるものと評価して誤りあるまい。

#### 高床倉庫から直線形記号へ(図7)

建物はIV期の土器では、鹿について多い画題である〔春成 1991b〕。建物はつねに側面形を描き、逆台形または台形の屋根形で倉庫と住居の区別をおこない、ほとんどの例が、屋根の輪郭の内部を斜格子紋で充填している。このような屋根の葺き方はないから、そこが空間でないことを示す一種の記号的な表現である。

床は、軒先の線より下に描いて軒と明瞭に区別している唐古a例のようなばあいと、軒の線と一致する大阪府高槻市大塚例のようなばあいがある。後者については、床の線(壁)の省略とみるか、床の位置が高い屋根倉とみる〔宮本 1986 : 22〕か、意見の分かれるところである。

建物の柱は、屋根と床を支える3~4本の支柱を描き、時としては棟を支える2本の棟持柱を描いていることもある。

したがって、IV期の建物の絵画は、屋根の棟と軒および床の横線2~3本と支柱や棟持柱の縦線3~6本の組み合わせを基礎にして描いていることになる。

V期に属する兵庫県神戸市頭高山例のように写実から離れつつある絵画では、多数の線を交錯させて屋根のみならず建物全体を表現している。このように見てくると、建物の骨組みとな



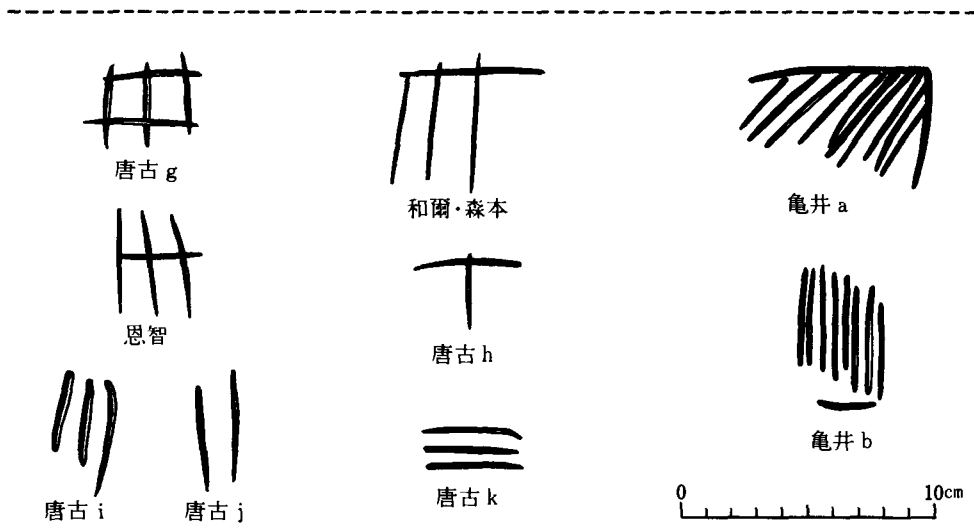
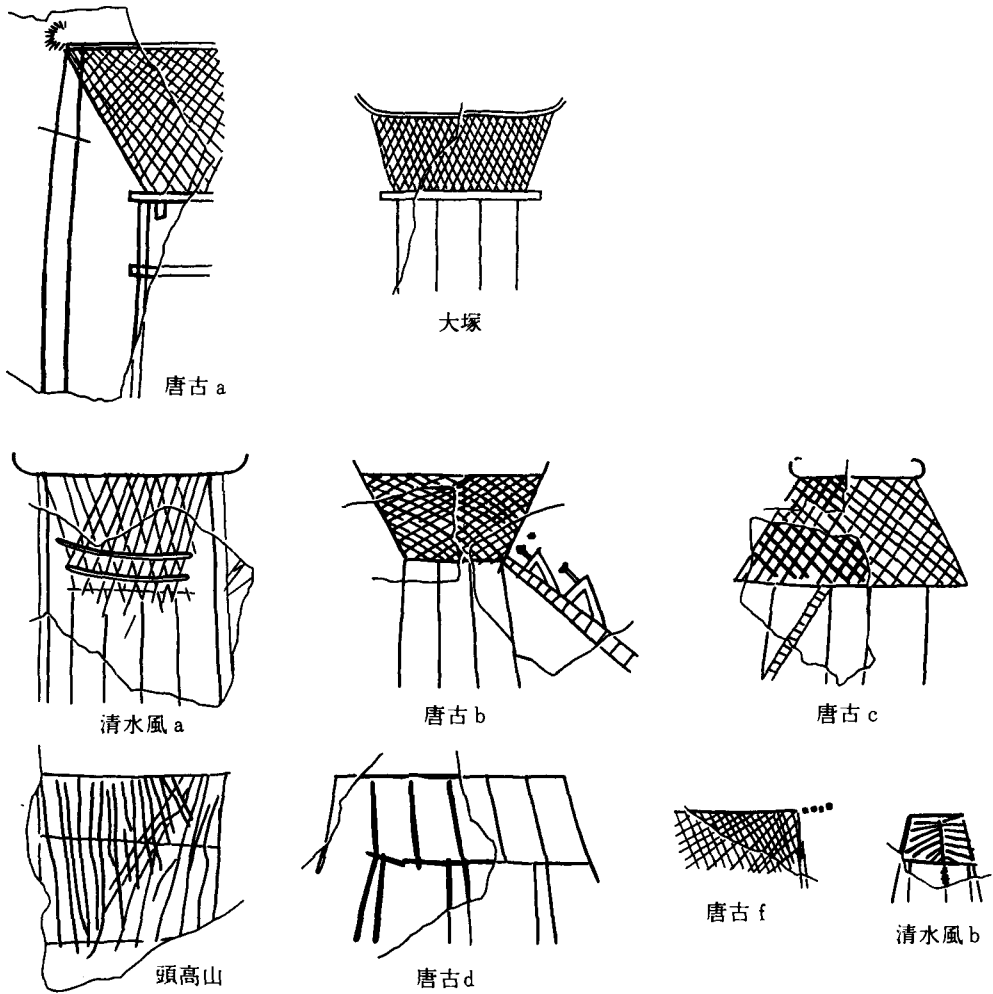


図7 家の絵画と記号

Fig. 7

る縦横の線の交錯によって建物の抽象的表現つまり記号化は可能となる。縦3線・横2線を交差させた唐古g例、L字形の輪郭内を斜線で填めた亀井a例などは、建物のイメージをかろうじてとどめている「失われた環」的な位置を占める記号といえよう。それからさらに省略が進んだのが、縦3線・横1線の恩智例や和爾森本例、縦1線・横1線のT字形をした唐古h例である。

そこからさらに解釈すれば、唐古遺跡などに多い縦または横に2～3本の平行線を描いた記号も、建物の表現である可能性があろう。上記の記号をいっそう省略すれば生じる図像である一方、他の絵画からは導きだせない図像であるからである。ただし、唐古32・33次SK-125から一括出土の記号土器10点〔藤田 1989：47～50〕のなかでは、縦横交差線の唐古g例に縦線2～3本の記号4例と横線3本の記号2例が共存している。したがって、建物の記号もまた、一種類だけではなく抽象化の程度によって分類できる数段階、数種類が同時に存在するといえよう。

#### 鳥と三叉形記号 (図8)

弥生土器の記号のなかで飛びぬけて早く登場するのは、三叉形であって、唐古遺跡出土のⅠ期の壺4個にみられる。その後、Ⅱ期に大阪府恩智遺跡2例、Ⅲ期に奈良県唐古、大福遺跡、大阪府亀井遺跡の計4例、Ⅳ期に大阪府瓜生堂、亀井遺跡例など15例以上が知られている〔橋本 1989：108～111〕。なお、Ⅳ期には、桜ヶ丘2号と4号銅戈の茎部にも三叉形を描いた例〔三木 1969：160～164, 図78〕が存在する。そこで、Ⅴ期の三叉形もそれらの延長上にあるのか、それともⅣ期の絵画のうちのどれかを記号化したものなのか、議論が必要になってくる。<sup>(4)</sup>前者とすれば、その意味はⅠ期以来変化していないのか、それともⅤ期に各種の記号が出揃った時点で新たな意味づけがおこなわれたのかの問題が生じる。

まず、Ⅳ期の絵画と三叉形記号との関連を探ってみよう。土器と銅鐸に描いてある絵画のなかで、三叉形の部分をもつのは銅鐸の鳥だけである。Ⅱ～Ⅲ期に製作した奈良市秋篠4号銅鐸、Ⅳ期の兵庫県神戸市桜ヶ丘5号・同4号・谷文晁旧蔵・伝香川県銅鐸、およびⅤ期の滋賀県野洲町大岩山2号銅鐸の鳥は、逆V字形に開いた2本の脚の先を三叉に表現している。鳥は3本の指をもつことが大きな特徴として印象にのこっていたのであろう。Ⅳ期に同一工人が連続的に製作したと推定される兵庫県桜ヶ丘5号～伝香川県の4個の銅鐸で、似た姿形の鳥とカマキリを区別するにあたって、脚先の表現を前者は三叉にし、後者は1線のままにして違わせていることも、三叉形の脚先を鳥と他の動物とを区別する重要な特徴とみなしていた証拠となろう。

それに対して、土器の鳥はそのような表現箇所をもっていない。Ⅳ期の鳥の絵画で脚の表現がわかるのは、唐古b・c例と瓜生堂例の計4例だけである。いずれも脚先は脚の延長で1本の線にすぎず、いかにしてもこれから三叉形記号が派生したと説くことはできない。また、土器の三叉形記号は、Ⅰ期以来存在するのであるから、銅鐸の鳥の表現から脚先だけを取り出し

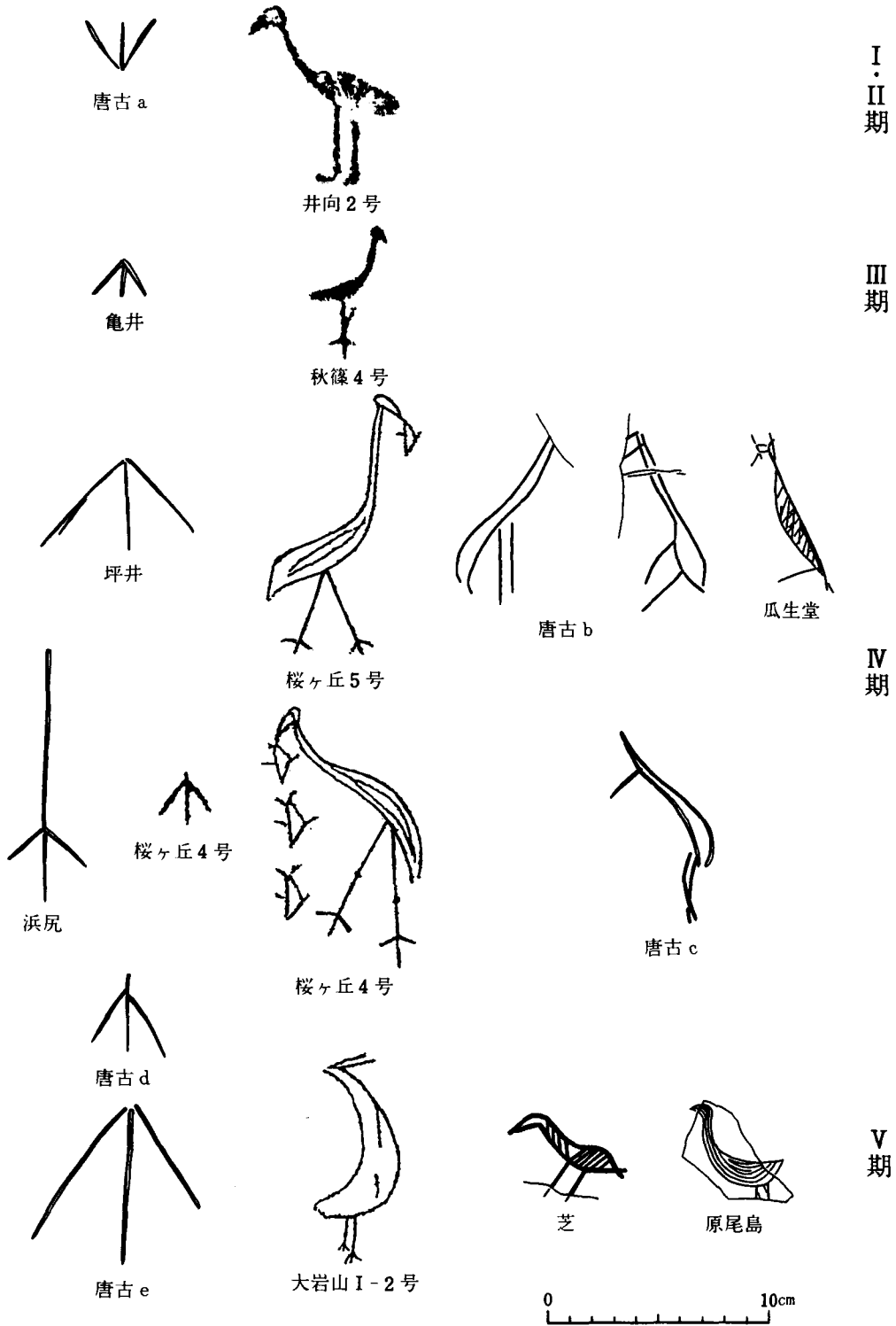


図 8 鳥の絵画と三叉形記号 (桜ヶ丘 4号の三叉形は網戈, 井向 2号~大岩山 I-2号の鳥は網織)

Fig. 8

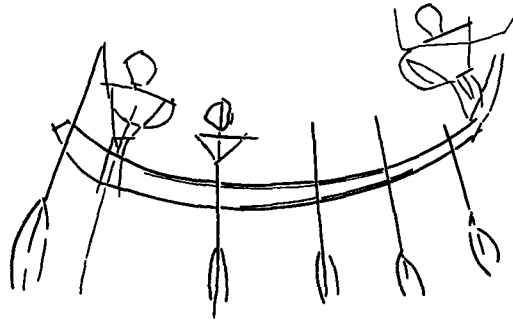
て独立させたと考えるのも無理がある。しかし、IV期の東海・関東地方に、垂下した長い1線の先に2本の短線を添えて三叉形にした例〔橋本 1988 : 130~141〕が存在する。静岡県清水町矢崎、群馬県城南村前原、高崎市浜尻、川場村の諸遺跡から出土した土器のこれらの図像は、脚だけを描くことによって鳥を表現しているようにみえる。これは鳥を三叉形に記号化したあとあとまで鳥の脚形に由来することを認識していた証拠のように思われる。弥生人の頭のなかに描いた鳥のイメージとして、脚先の三叉が重要な要素であったことはまちがいないから、三叉形記号が、写実的な絵画の段階を経ずに最初から鳥の脚先を表現して記号として出発している可能性は否定できないのである。

三叉形については、三重県上箕田・神奈川県稲荷土器で鹿一狩人の絵画との組み合わせ、広島県新迫南土器で鹿の絵画との組み合わせが知られていることから、鹿や狩人でないことははっきりしている。また、記号土器を多出している唐古遺跡では、三叉形が円形に次ぐ高い頻度で現れること、そして、静岡県細江町悪ヶ谷銅鐸で鹿一鳥の組み合わせが存在することからも、三叉形が鳥の表現である可能性は高いと考えたい。

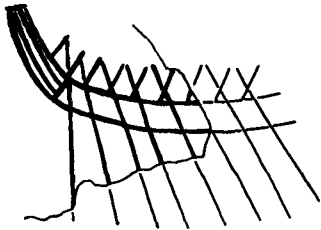
#### 船から下弧線・綾杉形記号へ (図9)

IV期の船は、2本の線で船首と船尾が反り上がったゴンドラ形に描いている。これには、奈良県唐古a例〔小林 1943 : 104~106〕、鳥取県淀江町稲吉例〔春成 1987 : 7~15〕(図14-1)のように、船体を側面から描き、船の上部に数人の漕ぎ手、下部に数本の櫂を描く型式と、奈良県坪井例〔勝部・橋本編 1986 : 51〕、清水風例〔井上・木下 1987 : 92〕のように、船体は側面から描き、多数の櫂は斜め上からみたとように船体の上部に短く、下部に長く表現し、漕ぎ手は描かない型式がある。

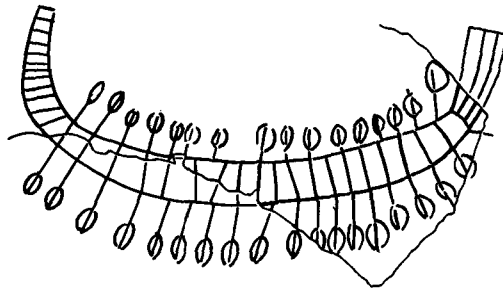
唐古a例では、左端の船首と右端の船尾の人物だけは丁寧に全身像を表現している。船首の人物は、逆台形の胴部に円形の頭部を付し、垂下した両足は船の下の輪郭を超えている。胸付近から身体の軸線を通して船体の下方まで伸びている線は、2人の人物のように、当初は櫂をここに描くつもりであったことを示している。左手は曲げて胸部を通して上に伸ばした右手と合わさり、櫂の上端に接する。ところが、前から2人目になると、櫂を描いたあと、それに円形の頭部と逆三角形の胴部を描き加えただけで、漕ぎ手の体軸と櫂は一体のものとなり、手の表現はなくなる。3, 4, 5人目になると櫂だけを描き、漕ぎ手の表現を省略するにいたる。そして、船尾の人物はまた、逆台形の胴部に足を付け、さらに股間に男根を思わせる2本線による表現がある。右手は曲げて腹部付近に当てる。頭部と左手付近は破損しており、不明である。この人物の右手の下には5本目の櫂が描いてあるが、この人物の動作とは合わないから、それだけで1人の人物の存在を意味しているのであろう。以上のように、この土器では1個の絵画のなかで、写実と省略が共存している。省略は抽象化ひいては記号化に通じるから、この絵画自体に記号化への胎動を読みとることができるのである。



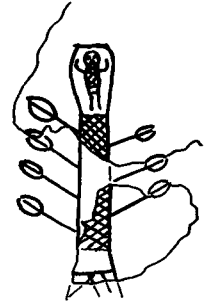
唐古 a



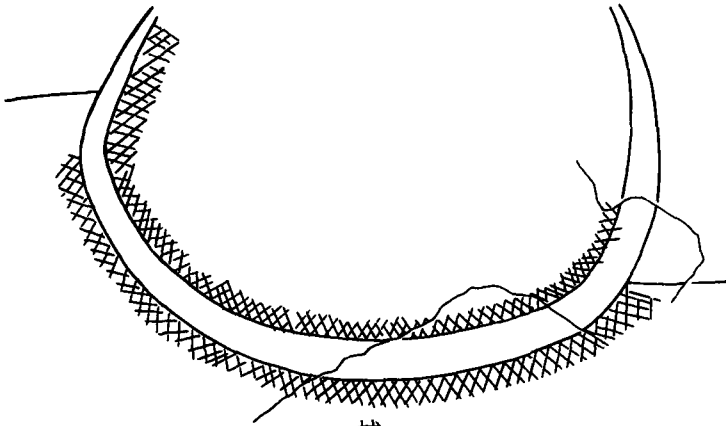
坪井



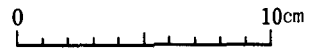
清水風



唐古 b



城



唐古 c



唐古 d



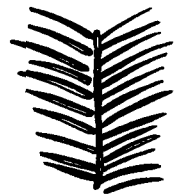
唐古 e



丁野



亀井



唐古 f

図 9 船の絵画と記号

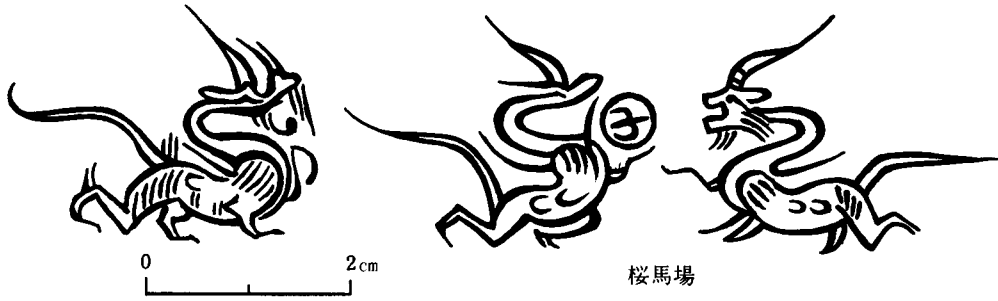
Fig. 9

それに対して、清水風例は、船体の上部の漕ぎ手を描くべき位置にまで先端を木の葉形にした櫂を描きこんで、船体の両側に櫂を下ろしている状態に表現している。佐原眞は、このような側面形と平面形を合成する表現法を「多視点画」と名づけ、弥生時代の絵画の一特徴としてとらえている〔佐原 1990 : 34~35〕。しかし、この清水風例に関しては、唐古 a 例のような側面形のみ「一視点画」<sup>(5)</sup>を転写する過程で生じた「多視点画」であろう。その観点からすると、唐古 a 例の 2 人目の人物の頭部表現が、櫂の先端に類似し、これから胴部を除けば上下に櫂を描いたような図形になることは示唆的である。推定すれば、船の絵画のばあいには、本来は、一視点画が古く、多視点画はそれが変形した新しい表現型式なのであろう。

船の絵画と認められているなかで興味深い一つは、岡山県児島市城例〔伊藤ほか 1977 : 25~26〕である。これは、船体の表現は唐古 a 例などとさして変わらないが、櫂の表現は他と異なり、両端に 1 本だけ独立した長い櫂とおぼしき線を垂下するほかは斜格子紋になっている。これは、坪井例にみられるような、船体の手前と向う側の水中に下ろした多数の櫂が一見、交錯したような表現形態を紋様化したものであろう。したがって、このばあいには、絵画と紋様の組み合わせによって船を表現しているのであって、記号化への道を確実に歩んでいるということができよう。その際、抽象化が付属品である櫂から始まり、船の形をもっともよく示す船体は依然として 2 本線による表現形態をのこしていることが、特に注目される。したがって、これに抽象化と簡略化をさらに加えると、船体のみを 2 本または 1 本の弧線で表現するということになる。すなわち、唐古 d・e 例など上開きの 2 本の弧線や、その上を 1 本の直線で蓋したような滋賀県丁野例〔田中ほか 1976 : 45〕は、船の記号と推定したい。そして、亀井例などの 1 本の下弧線も、より記号化の進んだ船と解釈しておきたい。なお、付け加えておくと、城例は岡山県の資料であるから、畿内では清水風例のような絵画から 2 本の弧線へと飛躍的に記号化が進んだと考えるべきかもしれない。

その一方、坪井・清水風例のように、多数の櫂が存在することを強調した船の表現に抽象化と簡略化を加えるならば、唐古 c 例の横方向の綾杉紋状の図像になるのではないだろうか。

なお、唐古 b 例は「船にのる人をあらわす」〔森本 1927 : 121~123〕、すなわち船首を上に向けた状態の船を真上から描いたとも、「枝葉を着けた樹幹と、その上によじ登っている人または猿の類を描いた」〔小林 1943 : 107〕とも推定されている絵画である。判断に苦しむ図像であるが、仮に前者の見方に立てば、これも先端を木の葉形に表現した櫂が両側に出ている。船首には、はなはだ奇妙な表現ではあるが人物が描きこんである。舵手であろうか。この図像も、先のような抽象化と簡略化をおこなうならば、唐古 f 例や奈良県四分例、大阪府池上例のような、縦方向の綾杉紋状の記号になる。そう考えてよければ、船の記号にも 2~3 種類存在することになろう。



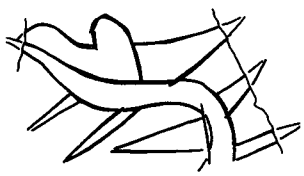
池上 a



船橋 a



上ノ山



天瀬 a



坪井



天瀬 b



恩智



池上 b



西ノ辻



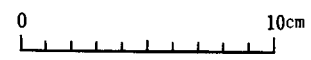
天瀬 c



下那珂



船橋 b



上東



池上 c



船橋 c



唐古

図10 竜の絵画と記号

Fig. 10

竜から鱗形・巴形・上弧形記号へ (図10)

竜はV期が初出であって、記号の時期に絵画が共存するほとんど唯一の図像である。大阪府池上 a 例 [大阪文セ 1979: PL. 92] や船橋 a 例 [森 1966] は、S 字形にくねらせた体に背鱗状と腹鱗状の突起をもち、頭部にも 2~3 の鱗状のものをもつ。これに類する竜の図像は、佐賀県桜馬場遺跡などから出土した方格規矩四神鏡にある。S 字形の体に 4 本の脚、長い尾、頭部には一角をつけて流麗な線で描く。しかし、桜馬場鏡では 2 体のうち右側の 1 体は、脚の一部が鱗状に変わっている。池上例は、おそらくこのような中国鏡の絵画から転写した初期のものであろう。しかし、まもなく竜は本来の姿から極端に崩れていく。

恩智例は、S 字形の図形の右側に 2 個、左側に 1 個の鱗形を付けた巴形銅器ふうの図像になっている。これは、池上 a 例を 90 度右に振ったものにほかならない。船橋 b 例は、恩智例の鱗形を 1 線におきかえたものである。宮崎県佐土原町下那珂例も、通説化している「空を飛ぶ鳥」[面高 1980: 49~51] というのは誤解であって、恩智例の変形であろう。岡山県倉敷市上東例 [坪井 1958: 6, pl. 7] も、「頸の無い動物か、あるいは頸より下のない鳥の絵だろうか」といわれている [鎌木 1964: 163]。しかし、岡山市天瀬 a 例、それを 90 度回転して図像が崩れた b 例 [出宮 1979: 35]、そしてさらに崩れた c 例と比較すれば、天瀬 c 例を逆にして大幅に省略したもので、これまた竜の一種の記号であることがわかる。

下弧線にむかで状に 7 本の脚をつけた坪井例 [佐々木 1983: 96] も、おそらく上ノ山例 [斎藤 1988: 9] のような図像を線に変えたものであろう。

その一方、同じ V 期に鱗形の記号が池上 b 例 [大阪文セ 1979: PL. 92] にみられる。これは、間に恩智例を介在させるならば、船橋 a 例の竜の図像から鱗状の部分だけをとりだして記号化した可能性が大きい。池上遺跡では、竜の絵画をもつ a 例よりも新しい形態の土器にそれが描いてあるのも、このようなことを想定させる。5 本の弧線を並べた唐古 b 例も、間の 2 線の一端が合して鱗状になっているから、やはり竜の記号であろう。池上 c 例、唐古例はどちらも弦が下になる弧形となっている。船橋 c 例など、1 本の上弧線も竜の最後の記号と考えたい。

池上遺跡ではそのほかに、1 本線で巴形の輪郭をかたどった記号を描いた b 例も知られている。これも、竜の鱗や足を省略して体部だけをとりだし、上下を逆転した可能性が大きい。そうであれば、逆 S 字形を横に描いた大福例や榎原例は、それをさらに 1 本線に置き換えたものとみることができよう。竜の記号も、原作の絵画から各種の特徴を抜き出した結果、多様なものとなっているのである。

狩人とその記号 (図11左列)

狩人の絵画は、銅鐸では、外縁付鈕 1 式に 4 個 (同範のものを合計すれば 7 個)、外縁付鈕 2 式に 2 個、扁平鈕式に 4 個知られている。しかし、以上のうち製作工人がはっきり弓をもつ狩人の図像を意識して描いているのは、外縁付鈕 1 式の桜ヶ丘 1 号~泊の同範 5 銅鐸と扁平鈕式の



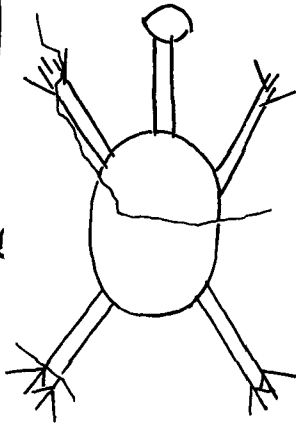
II  
III期



新庄



桜ヶ丘5号

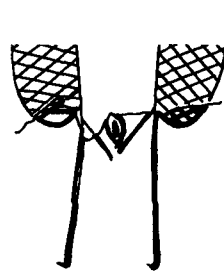


唐古 a

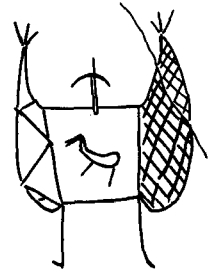


伝香川

IV期



唐古 a



清水風



西ノ辻



上箕田



唐古 b



中曾司



唐古 b



唐古 c



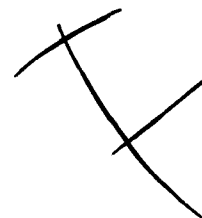
池上



上ノ山



池上



大福

V期

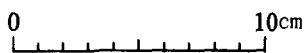


図11 狩人と巫女の絵画と記号

Fig. 11

桜ヶ丘5号～伝香川の同一工人による連作4銅鐸だけである。ところが、IV期の土器では狩人を描いた確実な例は、神奈川県稲荷例だけである。ただ、唐古a例〔藤田 1986: 37〕は、楕円形の胴部にX字形に手足をつけた一見スッポンを想わせるような図像であるが、左手を鹿の頸においたその表現(図14-9)は、桜ヶ丘1号銅鐸や同5号銅鐸の狩人が鹿の頭または角をおさえている図像と共通する。唐古例の製作者がこの人物を狩人と意識して描いたかどうかの判断は難しいが、この図像の原作が銅鐸絵画のなかの狩人であった可能性はつよいと思う。また、唐古b例はV期の可能性ももっているが、胴と脚がX字形に交わり、手足は1本の線だけで表し、記号化の進行を窺わせる。左側が欠損しているので推定になるが、右手が一見曲げたようにみえるのを、手に弓をもっている状態と解釈すれば狩人になる。IV期の畿内では、狩人の図像としてはかろうじてこの2例を挙げうるだけである。

畿内ではV期になっても狩人の図像は土器に散発的に描かれている。しかし、すでに絵画の記号化が進んでいるために、狩人の図像も記号化の傾向を示している。西ノ辻例の左手と弓は写実からはほど遠いものになっており、小林行雄は右手に槍をもって獲物に投げようとしている姿で、左手の図形は「獲物におしかぶせる網とか、楯のつもりかもしれない」としながらも、「これを弓と見れば、先のは投槍ではなくて矢で、弓に矢をつがえようとしていることになるが、これは一段と苦しい解釈である」と述べている〔小林 1955: 110~111〕。上箕田例は、頭から胴、左右の手足とも1本の線で表現している。弓は狩人の大きさと比べると著しく小さいが、狩人の図像と認めることは容易である。上ノ山例は、唐古a例を簡略化した表現である。スッポンとされている〔勝部・橋本 1986: 46〕が、鹿(これも水鳥とされているが、長い耳の表現があるのは鹿の特徴である)と組み合わせられていることからしても、狩人とみるべきであろう。

V期の土器に描いてある狩人像に記号への接近を看取するならば、蛸壺に、斜め交差線の後に縦線1本を描いた池上例も、狩人の記号の可能性は高いと考えたい。

#### 巫女から木の葉形記号へ(図11右列)

土器絵画では人物の表現は19例知られているが、そのなかで特に注意をひくのは、清水風例を典型とする頭部に鳥の仮面または被りものをつけ、身に羽状の装具をつけた鳥装の人物＝「司祭者」である。これらの「司祭者」像のうち、唐古a例〔藤田 1986: 37〕は珍しくも、木の葉形の性器を露わにした巫女の姿に描いてある。これは実際には、下端が三角形になった意須比(褌衣)によって性器は隠されていたはずであるが、透視法とでもいうべき表現法をとったために、一見露出しているようにみえるのであろう。こうしてみると、鳥をまつる司祭者に女性がいたことは確実と思われるが、他の鳥装の人物像は性別を明示していない。女性のばあいは性器まで示し、男性のばあいは性器を示さなかったというのであれば、清水風例や坪井例の鳥装の人物は男性であったことになる。しかし、古墳時代の巫女埴輪のばあいも、大阪府豊中市野畑例〔藤沢 1960: 図版25~27〕のように性器を表現したものと、奈良県勢野茶臼山古

墳例〔伊達 1966 : 27~28〕のように表現していないものがある。唐古 a 例はごく一部分しかのこっていないが、脚と袖の表現は清水風例と著しく類似しており、清水風例も性器の表現はなくとも女性である可能性を考えたい。

唐古 a 例の巫女像に対比しうるものを、V 期の記号のなかに求めるとすれば、縦長の円形に縦線 1 本をいれた唐古 b 例〔藤田 1989 : 図版 32〕である。唐古 a 例を参考にすれば、これは女性器の表現によって、女性というよりも巫女を表した記号と推定することができよう。木の葉形をした記号の中曾司例〔斎藤 1988 : 8〕や池上例〔第 2 阪和調査会 1970 : 20〕も、そうである可能性があろう。

また、唐古 c 例〔藤田 1989 : 42〕の記号は、下方へ向かってすぼんでいく 2 線が途中でさらにその内側に継ぎたされるその形状を、胴と脚とみれば、その上に傘状にかぶさる左右 2 本の弧線は羽状の装具を下ろした状態の表現と想像することもできる。父字形の大福例〔亀田 1973 : 23〕は、それをいっそう簡略化したものかもしれない。

### 記号の合成 (図 12)

弥生土器の記号は、1 個の土器に一種類の記号だけを描くばあいと、二種類以上の記号を組み合わせて描くばあいがある。そして、前者のばあい、記号だけを描く例と、絵画と組み合わせて描く例があり、後者のばあい、二つ以上の記号を上下または左右に並列した例と、二重に重複した例がある。その組み合わせを例示すると、次のとおりである。

|             |   |
|-------------|---|
| 円形———三叉形    | 大阪・馬場川 (V 期), 大阪・船橋 (V 期), 奈良・唐古 3 例 (V 期), 神奈川・持田 (IV 期) |
| 円形——三叉形——*形 | 大阪・池上 (V 期)   |
| 円形———下弧形    | 奈良・大福 (V 期), 大阪・船橋 (V 期)                                  |
| 三叉形——下弧形    | 奈良・唐古 2 例 (V 期), 奈良・一町 (V 期)                              |
| 鹿——狩人——三叉形  | 三重・上箕田 (V 期), 神奈川・稲荷〔伊勢山〕, IV 期)                          |
| 鹿———三叉形     | 広島・新迫南 (V 期)  |
| なすび形——二叉形   | 福岡・上大隈 (V 期)  |
| 円形——狩人      | 大阪・西ノ辻 (V 期)  |
| 竜———綾杉形     | 大阪・池上 (V 期)   |
| 巴形———人      | 岡山・下市瀬 (VI 期)   |

図像の並列や重複は、IV・V 期の絵画にも以下のような例が知られている。

### 土器

|                        |                |
|------------------------|----------------|
| 鹿——?——銅鐸?——高倉——祠——鳥人・船 | 鳥取・稲吉 (IV 期)   |
| 鹿——狩人?———建物———鳥人(女)    | 奈良・唐古 a (IV 期) |

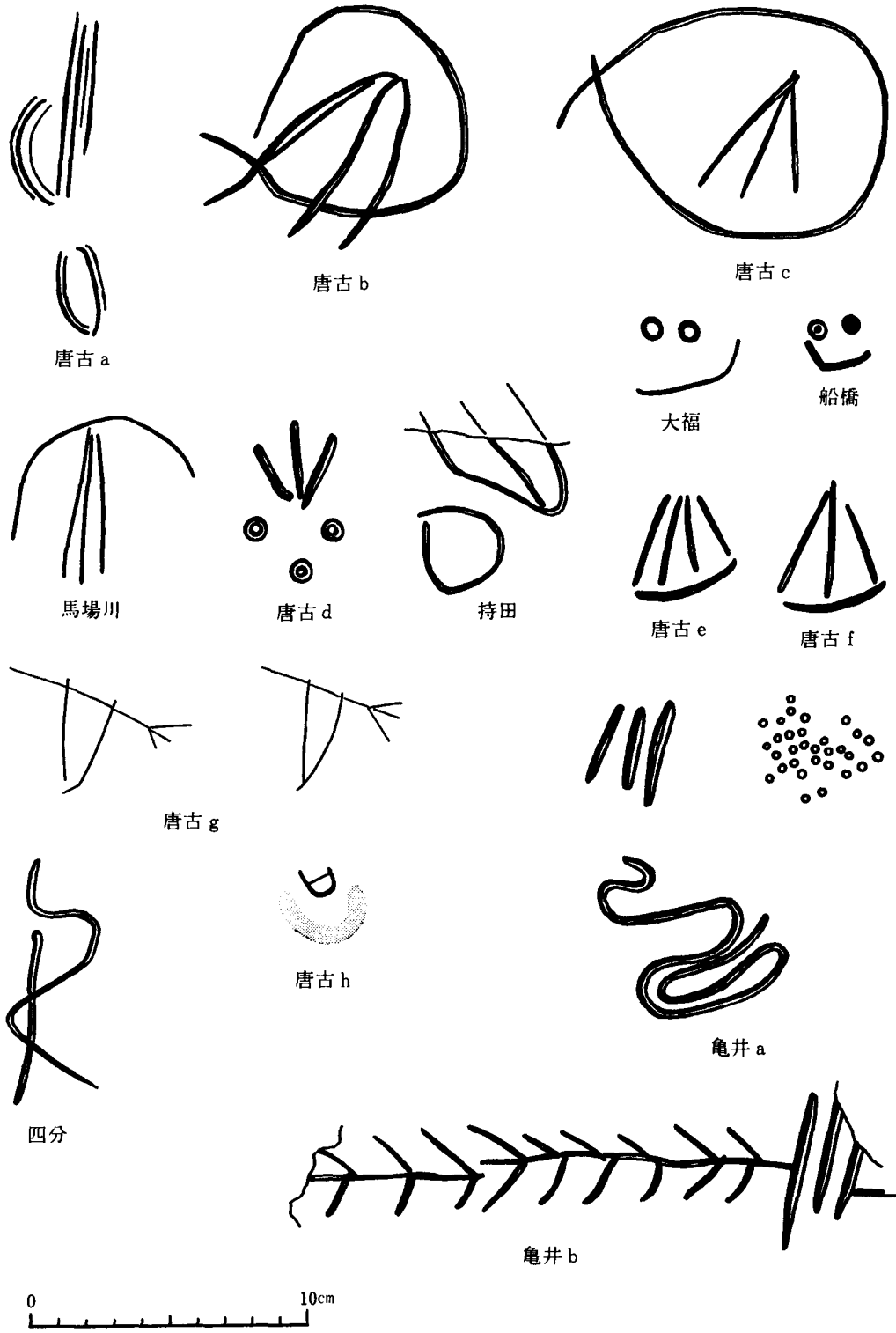


図12 記号の上下・重複・並列合成

Fig. 12

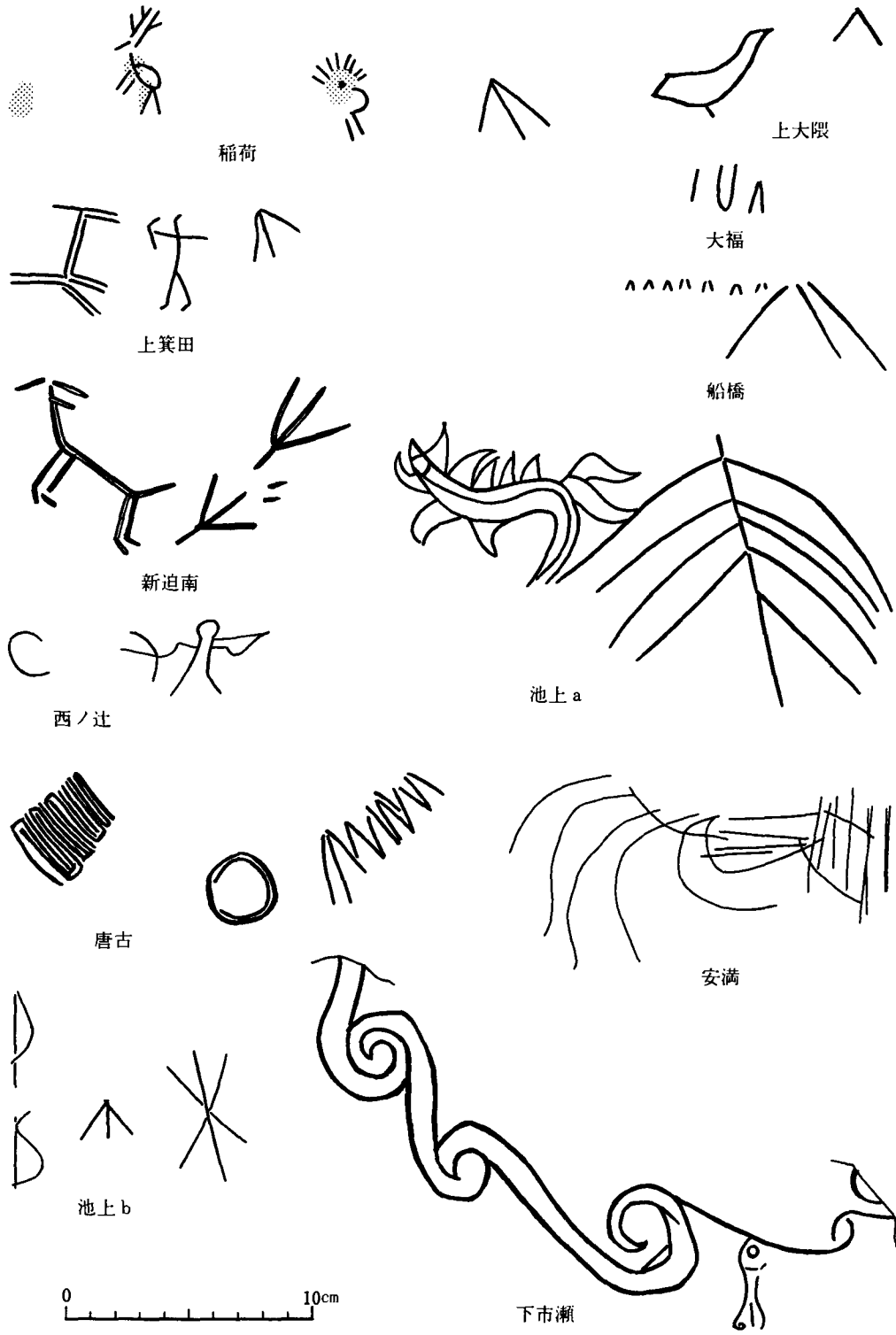


図13 絵画・記号の並列合成

Fig. 13

|         |                                       |
|---------|---------------------------------------|
| 建物———鳥人 | 岡山・新庄尾上(Ⅳ期)                           |
| 鳥——人・船  | 奈良・唐古(Ⅳ期)                             |
| 鹿———建物  | 奈良・清水風3列(Ⅳ期), 大阪・東奈良(Ⅳ期), 兵庫・川島川床(Ⅲ期) |
| 鹿——狩人   | 奈良・上ノ山(Ⅴ期)                            |
| 鹿———鳥   | 岡山・津寺中屋(Ⅳ期)                           |
| 鹿——竜人   | 岡山・加茂(Ⅴ期)                             |
| 銅鐸      |                                       |
| 鹿——狩人   | 兵庫・桜ヶ丘1号ほか(Ⅰ~Ⅲ期)                      |
| 鹿——狩人 鳥 | 兵庫・桜ヶ丘5号ほか(Ⅳ期)                        |
| 猪——狩人   | 伝香川(Ⅳ期)                               |
| 鹿———鳥   | 静岡・悪ヶ谷(Ⅴ期)                            |
| 人面———鳥  | 推島根(Ⅲ期)                               |

以上のうち、左に2羽の鳥、右に漕ぎ手をのせた船を描いた唐古a例(図14-2)、鹿、建物、漕ぎ手をのせた船を描いた鳥取県稲吉例(図14-1)は、図像を並列して描いた代表的な資料である。唐古例のうちの一つ(図9)は、船に舵手がのっている状態にせよ、木に猿が登っている状態にせよ、図像の重複がみられる。司祭者を描いた清水風例(図14-3)では、左に一般の人々2人を並列させる一方、司祭者の胸に鳥の絵画を描いており、並列・重複のどちらの手法も用いている。

このような弥生時代のⅣ期の絵画とⅤ期の記号、あるいはⅤ期に属する1個の土器に絵画と記号を描いたⅤ期の例と記号だけの例との対照関係から、記号の合成例に関しては、円形—三叉形は鹿—鳥、円形—\*形—三叉形は鹿—狩人—鳥、三叉形—下弧線は鳥—鳥人—船を記号化して並列したものと推論することができる。

## 4 弥生時代の象徴体系とその盛衰

### 農耕儀礼の象徴と性

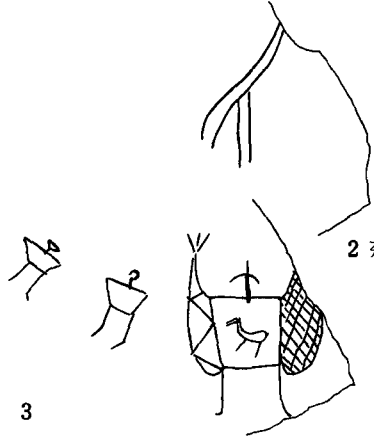
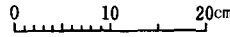
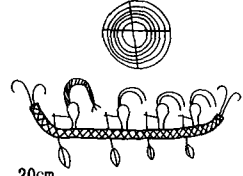
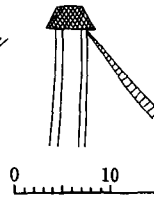
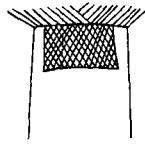
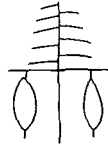
絵画そして記号は、弥生時代の何を象徴しているのであろうか。

先に掲げた、弥生土器・銅鐸に描かれた絵画・記号に表現された象徴体系は、整理すると、次のようにまとめることができる。

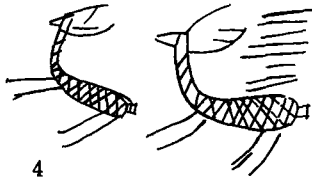
鹿——狩人——鳥——鳥人・船  
 竜——人・船  
 鹿———建物

絵画から記号へ

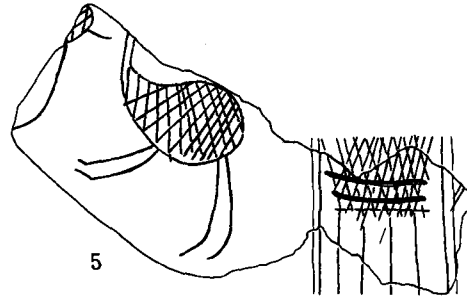
1 鳥取・稲吉



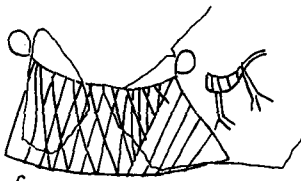
2 奈良・唐古



3



5

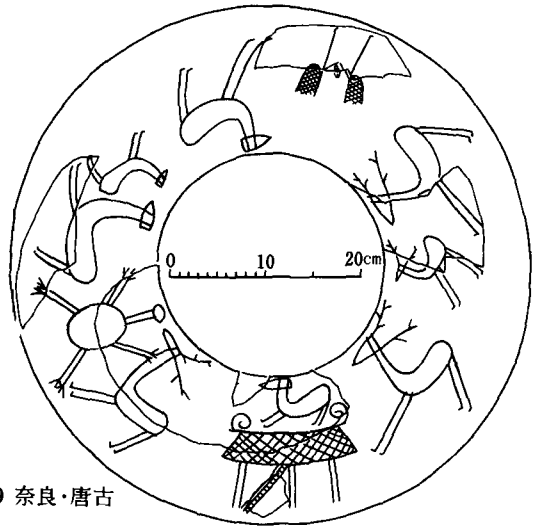
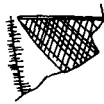


6

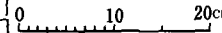
7 大阪・東奈良



3~6 奈良・清水風



9 奈良・唐古



8 兵庫・川島川床



10 奈良・上ノ山

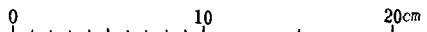


図14 弥生土器の絵画構成

Fig. 14

銅鐸では、建物を描いた例は3個だけである。それに対して、鶴<sup>(8)</sup>または鷺を描いた例は18個ある。その一方、土器では、高床倉庫または建物を描いた例は41個に達するにもかかわらず、鳥を描いた例はスタンプ紋を含めても22個にとどまる。

弥生時代においては、鳥は稲を人間界にもたらした聖なる動物であり、高床倉庫は収穫した稲を収める倉であると同時に、聖なる稲霊をまつる祠であった。したがって、鳥と高床倉庫はともに稲の象徴というべきものであるが、それを銅鐸では鳥で表現するのに対して、土器では高倉で表現するというように明瞭に区別しており、両者は互換性をもつ象徴として扱われている〔春成 1991b : 66~67〕。そして、図像を記号化してからは、稲は鳥の脚先に由来する三叉形で、高床倉庫は柱と桁材に由来する縦横線または縦線あるいは横線で表しているとするれば、その割合はほぼ1 : 3で、やはり建物のほうが圧倒的に多い。

船も鳥人も土器にはしばしば描いているが、銅鐸では、福井県井向1号銅鐸に船があるだけである。すなわち、これらの画題も土器と銅鐸で描き分けているのである。

鳥は、春ないし夏の稲の象徴であった。そして、大海を航行できる船も、鳥を迎えにいく司祭者=鳥人の乗物として絵画の世界では稲の象徴の役割をはたした。おそらく春には、鳥を招く儀礼が存在し、そのために、司祭者=巫女は鳥の姿をとったのであろう〔春成 1987 : 21~24〕。また、鹿狩りを描いているのは弥生Ⅲ期までは銅鐸だけであって、それは男性の狩人が角を欠く春(初夏)の牡を捕える情景であり、春の農耕儀礼の一環であった〔春成 1991a : 469~472〕。銅鐸にそれを描いたのは、春に用いる祭器であったからであろう。

それに対して、稔りの秋には、おそらく収穫した稲の靈魂をまつり、それを稲とともに高倉に納める儀礼があったのであろう。唐古遺跡出土の2人の人物が高倉の梯子を昇っている構図(図7-唐古b)は、秋の収穫儀礼の一部を描いたものとみることもできよう。土器に高倉とともに描いた鹿は立派な角を生やしており、明らかに秋の牡鹿を表している。したがって、それを描いた土器は秋に用いる祭器であったのであろう。

鹿は、土地の象徴として、鳥=高倉=船は、いずれも稲の象徴として位置づけられており、結局、弥生時代の象徴体系の根幹は、土地と稲の対立があり、その間に人間が介在して土地の悪の側面を鎮め、稲との調和をはかるといふ構図であった〔春成 1991b : 67〕。したがって、この象徴体系が存在するかぎり、鹿を1頭、あるいは船を1隻描いていただけても、その効果を発揮するものと信じられていたのである。

弥生Ⅴ期に初めて現れる唯一の図像は竜である。竜はおそらく方格規矩鏡を通してもたらされた中国古代の思想の一部であって、水あるいは雨の象徴と考えるべきなのであろう。したがって、雨乞いと関連を認めるならば、竜の来訪を必要とするのは、水田に水が必要な夏ということになろう。

そして、それぞれが象徴効果を発揮する季節は、角のない鹿-狩人-鳥-鳥人・船が春の播



種時期、竜一人・船が初夏から夏の水の必要な時期、角をもつ鹿一建物が秋の収穫時期と推定することができる。

それに対して、記号土器は1箇所の井戸や土坑からしばしば完形品が複数個出土する。1個の土器の記号は1, 2種類であっても、複数個集めると、次のような組み合わせができるのである。

|                   |  |
|-------------------|--|
| 円形+(円形+三叉形)       | 奈良・唐古1次2号竪穴(図17-1・5)                       |
| 縦横線+綾杉形           | 唐古1次7号竪穴(図1-19, 図17-17)                    |
| 円形+上弧形+横線+下弧線     | 唐古1次8号竪穴(図1-5・17, 図17-11・14)               |
| 円形+下弧線            | 唐古1次18号竪穴(図17-3, 図18-33)                   |
| 円形+縦線+下弧線         | 唐古1次45号竪穴(図1-14, 図17-2, 図18-24・32)         |
| 縦横線+縦線+横線         | 唐古33次SK125井戸(図17-8・13・16, 図18-19~22・26・27) |
| 鹿形+縦短線+(竜+綾杉形)+鱧形 | 大阪・池上5号井戸(図28-198・200・201・203)             |
| (人面?+三叉形)+巴形      | 池上8号土器溜り(図28-202・204)                      |
| 円形10例+N字形直線       | 奈良・四分SE760井戸(図21-78~87, 図22-97)            |
| 円形+上弧線+(S字形弧線+縦線) | 四分SE1480井戸(図21-88, 図22-101)                |
| 円形+横逆S字形弧線        | 四分SE1665井戸(図22-89・100)                     |

これらはおそらく個々の土器ごとに果たすべき役目をちがえさせ、全体として一つの図像になるように組み合わせて使用するのであろう。

絵画にせよ記号にせよそれを描いた土器の数は、微々たるものである。したがって、鹿や建物、あるいは円形や直線形などを土器に描くことはきわめて特別で異例のことであった。にもかかわらず、それらの間には、地域と時間を超えてつよい共通性が認められる。これらが分布する地方全体を貫く強固な信仰と交流が存在したのである。

以上の考察に推定を混えて図式化すれば、次のとおりである。

|                |    |
|----------------|----|
| 銅鐸製作—————?     | 男性 |
| 角のない鹿——狩人——春   | 男性 |
| 鳥———巫女———春     | 女性 |
| 田植—————春       | 女性 |
| 土器製作—————秋     | 女性 |
| 角をもつ鹿——高床倉庫——秋 | ?  |
| 収穫—————秋       | ?  |

このように、例えば鹿の絵画あるいは円形記号が表現している内容は、正確にいうと、単なる鹿ではなく、鹿に関する神話あるいは儀礼である。その意味では、円形記号を、甲骨文字あるいは漢字の「鹿」に対比できる、鹿を表す「原文字」とみなすことはできない。それは、むしろヨーロッパの旧石器時代後期の洞窟絵画のトナカイや野牛に対比すべきものであって、表現の経験の蓄積が少ないがゆえに、神話の主要な登場物以外はほとんどすべてを省略した抽象的・象徴的な表現におわっているのである。

### 絵画から記号への変換の背景

以上のように、V期の記号はIV期の絵画に省略と抽象を加えてそのまま記号化したものである。

それを、論理的に示せば、次のとおりである。唐古遺跡のIV期の船の絵画では、写実的に描いた箇所とそうでない箇所が入り交じっている。そして、写実的な箇所はあいでも同時に省略がなされている。いかに「写実的な絵画」といっても、一定の抽象化をおこなっているのである。すなわち、写実的とされる絵画そのものが記号化を胚胎するという矛盾をかかえているといえる。したがって、写実が後退し、省略が進行すれば、絵画は必然的に抽象化へと向かわざるをえない。しかも、この時期の銅鐸絵画の変遷を追いかけると、ほとんど原作だけが実際の被写体を写実的に描いているのであって、それ以後は原作を模作あるいは改作するという形をとっている〔春成 1991c〕。土器絵画のばあいは、土器の使用期間が短いだけに、銅鐸絵画とまったく同じということにはなかったであろうが、船の表現法に唐古a例→清水風例という変遷を認めるならば、原作を模作することがあり、それが結果的に改作になったことを示しているのではないだろうか。しかし、そのばあいでも本質には変わりはないのである。

V期の記号はIV期の絵画を究極まで抽象化したものである。しかし、IV期における絵画の抽象化指向がそのままV期の記号化を招来させたわけではない。鹿にせよ鳥にせよ、絵画と記号をつなぐ例が稀有である事実に示されるように、絵画から記号への移行は漸移ではなく、突然である。したがって、その変換は意図的なものであって、しかも、記号が分布する近畿地方でいっせにおこなわれたのである。絵画から記号への変換のヒントとなったのが、I期以来の三叉形の存在であったことはおそらくまちがいないであろうが、それを推進したのは、いうまでもなく社会そのものの変化である。

IV期からV期における絵画から記号への変換は、土器の無紋化・粗製化、長頸壺の出現・盛行、高杯の盛行など土器製作の省力化、器種構成の変容と併行して進んだ「生活様式の変容を反映」する現象の一つである。都出比呂志は、IV期までの紋様をもつ土器を「原始土器」と規定し、紋様も「共同体規制」の一つの表現形態とみなす。そして、「集団的な儀礼の変質」がその変化をもたらしたと予想している〔都出 1982：236～238〕。

IV期における絵画の発達を中心は大和であったのに対して、記号は奈良盆地東南部を中心に河内・和泉にまで広がっている。ところが、土器絵画を誘発したとされる銅鐸〔佐原 1980 : 114〕の分布をみると、大和は近畿地方の中心とはいえない。これまでに出土している銅鐸で、絵画をもつ例としては奈良市秋篠4号(鳥1, 外縁付鈕1式)、平群町初香山(カエル1, 外縁付鈕<sup>(9)</sup>2式)、天理市石上2号(人物2, 突線鈕1式)、伝奈良県(石上2号と同範、ただし鹿6, 鳥1を追加)を挙げうるが、これらの銅鐸に描かれたどちらかという貧相な絵画を土器に移しただけでは、唐古遺跡や清水風遺跡の見事な土器絵画は生じない。また、奈良県出土の銅鐸には、小型で粗製品が少なくない。II～IV期における銅鐸鑄造の中心地は、おそらく河内平野中央部と、東奈良遺跡付近を中枢とする摂津北部であったと推定するが、大和はそこから配布をうける立場にあったのであろう。唐古遺跡出土の銅鐸鑄型(石製)の紋様がおそらく流水紋崩れの重弧紋となっているのは、IV期の大和がまだ銅鐸鑄造の周辺地域に位置していたことを示唆する。銅鐸絵画は、河内平野中央部産と想定される菱環鈕2式～外縁付鈕1式のそれを原作として摂津北部などでも模倣したと推定される。土器絵画は、良好な絵画銅鐸を製作しているとは考えにくい、このような大和で発達している点を考慮しなければならない。しかし、今はこの点を説明することはできない。

現在知られているかぎり、記号がIV期にすでにみられるのは、近畿・北陸・関東地方である。しかも、三叉形はどの地方にも分布しており、IV期の稲荷遺跡の三叉形例が、鹿一狩人との組み合わせから、鳥の表現と推定してよければ、三叉形記号は早くから鳥を意味する記号として認識されていた可能性がある。それに対して、吉備地方ではV期においても、鹿や鳥などの絵画を描いている。これは、IV期の土器の器形・器種構成がV期までのこっていること、器台形土器がV期に異常に発達することと無関係ではない。

土器に絵画を描いたIV期はまだ、土器製作をていねいにおこなっている時期である。IV期はまた、「聞く銅鐸」の段階であり、絵画銅鐸も製作している。ところが、V期になると、「土器づくりに時間と労力をついやすことが意味を失って」くる。つまり「土器のもつ社会的役割が変化」するのである〔佐原 1990 a : 24～27〕。絵画を簡略化した記号に変えるのもその動きの一環にはかならない。記号はそれだけでは鹿や建物を意味しない。そういえば、IV期の絵画のばあいも、土器製作の途中で描いているために、線の一部が消えている例が少なくない。銅鐸のばあいもそうであるが、できあがった絵画を観察・鑑賞する意志は、製作・使用する側にはなかったのである。描いたという事実が重要であり、それによって象徴効果は十分に生じると信じられていたのである。それというのも、絵画土器や記号土器の製作そのものが儀礼の諸過程のなかに組み込まれており、絵画や記号を見るのはそれを描いて働きかける相手すなわち土地や稲の精霊であったからであろう。

さて、祭祀に使う土器を、時間と労力をかけずに製作するということは、その後の祭祀おそ

らく農耕儀礼そのものが簡略化したことを暗示する。その一方、V期には「聞く銅鐸」は「見る銅鐸」へと変化する〔佐原 1960：96～97〕・〔田中 1970：47～50〕。また、「聞く銅鐸」は伝世をやめて次第に土中に埋められていく。「見る銅鐸」で絵画を描いた例は稀で、記号を描いた例にいたっては皆無である。「見る銅鐸」が最後に埋納された場所は、畿内中樞部から遠く離れた周辺地方に集中している。この事実は、銅鐸がもはや農耕儀礼から離れ、敵対する勢力を呪詛するような政治性のつよい祭祀に用いられるようになったことを示している〔春成 1982：35～41〕。

絵画から記号への移行に際して、鹿一狩人一鳥・高床倉庫を根幹とする象徴体系に大きな変化は認められない。しかし、絵画から記号への変換は漸進的なものではなく、きわめて急激におこなわれた。この劇的な変化はいかなる社会背景のもとで生じたのか。

土器絵画が盛行するのは、高地性集落・石製武器の発達に示されるIV期すなわちほぼ1世紀の戦乱の時代である。そして、戦乱が終息し、相対的に平穏な状態を保つV期すなわち2世紀の一時期になると、今度は記号が盛行する。そして、V期の新段階にまたも戦乱の時代を迎え、それが終わる2世紀末ないし3世紀初めになると、記号が消滅する。この間、IV期まで存続していた拠点の大集落はV期になると解体し、小集落に分散するという状態に変化する。そして、記号土器も小集落ごとの祭祀に使われたようなあり方を示している。このように、絵画、記号とも一定の社会的秩序のもとで発達し、その秩序が動揺・崩壊すると、象徴体系の表現形態も変化するのである。

こうして、農耕に関する神話・祭祀と結びついていた銅鐸絵画は衰退し、絵画土器との対応関係も切れてしまう。銅鐸絵画に刺激されて発達した土器絵画は、対となっていた相手を失い、農耕儀礼のなかで、最重要なものとはみなされなくなる。しかし、それでもまだ土器の絵画は、記号化するなかでその命脈を保っている。けれども、銅鐸を用いた祭祀の政治性のいっそうの増大は、農耕儀礼の位置をさらに低下させる。政治性を帯びた祭祀を上位に、農耕儀礼を下位におく、祭祀の重層性の形成＝序列化である。そして、政治的首長の死に伴う葬送儀礼など政治的祭祀の発展、それに反比例して進んだ農耕儀礼の衰退は、ついには稲作社会の根幹にかかわる稲と土地を象徴化した記号までも廃止へと追い込んでいく。こうして、絵画も記号も集団的な農耕儀礼と密着していたために、その衰退によって、文字的な機能をもっていた記号も、それ以上の発展をみることなく消滅していったのである。

絵画から記号へ、そしてその消滅は、いい古された言葉を借りて述べるならば、近畿地方を中心に、集団的な「まつり」から、おそらく首長を主宰者とする「まつりごと」へと社会の統合原理が急激に転換する諸過程を示す証であったということができよう。

(1991. 6. 30)

## 謝 辞

国立歴史民俗博物館の初代館長・井上光貞氏は「基層信仰」の研究を、歴博のいわば永遠の研究テーマの一つとして重要視し、創設以来、共同研究の代表者として率先、研究を進め、範を垂れようと努めていた。私は、井上氏そして民俗研究部の坪井洋文・山折哲雄氏らの熱情にふれ、また、奈良国立文化財研究所の佐原眞氏から多くのことを学ぶ機会に恵まれて、祭祀信仰に対する関心を現在までもちつづけることができた。ささやかなものであるが、本稿は私にとっては、歴博での研究生活10年間のエッセンスである。今は亡き井上・坪井両氏の学問と人柄を偲び、また、事あるごとに教示をいただいた多くの方々に、この機会に心からお礼を申し述べたい。

今回、本稿をまとめるにあたっては、資料の実見・観察の機会を与えられ、あるいは教示をいただくなど次の方々のお世話になった。お名前を記して感謝の気持ちに代えることにしたい。

東大阪市教育委員会の勝田邦夫・菅原章太・酒野晶子、大阪府弥生文化博物館の広瀬和雄・吉村健、高槻市埋蔵文化財センターの森田克行、田原本町教育委員会の藤田三郎・豆谷和之、京都大学考古学研究室の菱田哲郎、桜井市立埋蔵文化財センターの清水真一、橿原市教育委員会の斎藤明彦、橿原考古学研究所の木下亘・寺沢薫・久野邦雄・豊岡卓之、天理参考館の置田雅昭、向日市教育委員会の秋山浩三、岡山県古代吉備文化財調査センターの河本清・宇垣匡雅・平井典子、岡山市教育委員会の出宮徳尚・根木修、宮崎県埋蔵文化財センターの石川悦雄、北海道大学北方文化研究施設の林謙作、玉利勲の諸氏。

## 注

- (1) [藤田 1982] の記号の分類は、唐古遺跡でⅠ期から記号が存在することを認め、図3の分類のなかにもそれらを含めている。そのために記号がもっとも盛行するⅤ期の記号の特徴が不鮮明になっている。また、記号の形態はきわめて単純であるので、[斎藤 1988] もそうであるが、模式図ないし略図ではなく、実測図または拓本で示すべきであったと思う。
- (2) [杉原 1961] 以来、「伊勢山遺跡」と呼ばれてきたが、地元藤沢市鶴沼地区には「伊勢山」なる地名は存在せず、稲荷台地上の遺跡群の一部で稲荷引地脇遺跡または石名坂遺跡のまぢがいという〔服部 1965: 24〕。杉原の「引地伊勢山」という記述からすると、稲荷引地脇遺跡とすべきかと思うが、ここでは絵画土器発見者の市川規平にしたがって稲荷遺跡〔市川 1984〕出土ということにしておく。
- (3) ただそうすると、Ⅴ期古段階の篋描きの円形記号が少なすぎるが、それは唐古遺跡でこの段階の土器の出土量が少ないことに起因しているであろう。なお、篋描きのなすび形の記号はこれまでのところ、唐古遺跡から出土している2例がその典型である。このことが将来とも動かなければ、唐古集団で鹿の記号化が始まった可能性がよくなる。
- (4) ヨーロッパ旧石器時代の洞窟絵画などでは、三叉形は女陰の記号とされている〔ルロウ＝グーラン（蔵持訳）1985: 97～100〕。しかし、弥生時代の三叉形はそれを逆転したものが普通であるから、ヨーロッパ例からの類推は、このばあいはあたらなと思う。
- (5) ただし、この例でも、船上の人物と櫂は側面形ではなく正面形を描いているから、やはり多視点画に分類される。なお、大阪府思智垣内山銅鐸や兵庫県桜ヶ丘4号銅鐸の猪の図像で説明に苦しんだ、頭の先端部分を円形に表している〔春成 1991c: 6～8〕のも、体は側面形に、特徴的な鼻面だけは正面形に表現した多視点画であるとみたほうが、容易に理解できる。
- (6) 佐原眞はこのようにみず、船体の左右に櫂を下ろした状態を描いた清水風例と同じ多視点画としている〔佐原 1990: 35〕。
- (7) 天瀬 a・b・c 例を、報告者は、同一個体の器台として扱っている〔出宮 1979〕が、表面調整、胴部を一周する沈線紋帯間の間隔は三者三様であって、別個体とみるべきである。
- (8) 根木修の教示によれば、図8の桜ヶ丘5号・4号銅鐸の鳥が嘴にくわえている魚は体高の高いフナの種類であって、それらを鳥が捕食できるのは、水面近くを泳いでいる夏の間に限られる。したがって、この鳥は冬鳥の鶴ではなく、水田に水が張ってある初夏～夏の鷺類であろう、という。筆者は、絵画の鳥の姿態と民間伝承を根拠にして鶴と推定した〔春成 1987: 15～18〕が、根木の説のほうが当たっているのかもしれない。
- (9) 初香山銅鐸を、〔春成 1991a: 444〕では、外縁付鈕1式として扱ったが、その後、難波洋三が外縁付鈕式銅鐸の詳細な型式分類に基づいて同2式とする意見を発表している〔難波 1991: 72〕。従うべきものと思う。なお、難波の教示によれば、渦文の存在に気づいたというから、筆者がトンボ・不明

動物とした不鮮明な図像がそんなのかもしれない。

- (10) 例えば、唐古遺跡出土の船の櫂の先端が、完全に閉じた状態の木の葉形になっていないのは、描いたあと胴部下半を篋で削って仕上げているからである。

## 文献

- 赤木克祝編 1986『城山(その2)』大阪府教育委員会・大阪文化財センター。  
足立克己編 1985『島根県簸川郡斐川町神庭西谷所在荒神谷遺跡銅剣発掘調査概報』島根県教育委員会。  
網干善教 1962「新沢弥生式遺跡出土の絵画土器について」『古代学研究』32:12~13。  
—— 1963「高床式建築考」『近畿古文化論攷』99~110, 吉川弘文館。  
—— 1965「考古学的遺跡」『御所市史』736~821, 御所市。  
—— 1977『忌部山遺跡発掘調査報告書』奈良県土木部・奈良県都市計画地方審議会。  
荒武麗子編 1987『中岡遺跡』宮崎市文化財調査報告書。  
石井清司 1989 a 「亀岡市北金岐遺跡」『京都府弥生土器集成(1989)』206~210, 図版39~42, 京都府埋蔵文化財調査研究センター。  
—— 1989 b 「亀岡市南金岐遺跡」『京都府弥生土器集成(1989)』210~212, 図版43・44。  
—— 1989 c 「亀岡市千代川遺跡」『京都府弥生土器集成(1989)』212~216, 図版45~49。  
—— 1989 d 「宇治市羽戸山遺跡」『京都府弥生土器集成(1989)』250~251, 図版68。  
石野博信・関川尚功 1976『纏向』桜井市教育委員会・橿原考古学研究所。  
市川規平 1984「絵が描かれた弥生式土器」『湘南考古学同好会々報』18:12~13。  
伊藤 晃・山際康平 1977『城遺跡発掘調査報告』岡山県埋蔵文化財調査報告, 19。  
—— 1980「岡山県内出土の弥生時代絵画資料」『考古学雑誌』66-1:65-75。  
伊藤 潔 1983『中久世遺跡発掘調査概報』昭和56年度, 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所。  
井藤 徹・亀島重則・阪田育功編 1984『友井東(その1)』大阪府教育委員会・大阪文化財センター。  
井上義光・木下 亘 1987「天理市庵治町清水風遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度:69~99, 奈良県立橿原考古学研究所。  
今里幾次 1969「播磨弥生式土器の動態(2)」『考古学研究』16-1:27~40。  
芋本隆裕 1989「西岩田遺跡第11次発掘調査概報」『東大阪市文化財協会概報集』1988年度:87~98。  
上村和直 1987『中久世遺跡発掘調査概報』昭和61年度, 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所。  
瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡Ⅰ』瓜生堂遺跡調査会。  
—— 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会。  
大阪府教育委員会 1984『萱振1号墳』萱振遺跡現地説明会資料, Ⅱ。  
大阪文化財センター 1979『池上遺跡』第2分冊, 土器編, 大阪文化財センター。  
大橋信弥・別所健二・谷口 徹 1977『久野部遺跡発掘調査報告書一七ノ坪地区一』滋賀県教育委員会。  
大林太良 1973『稲作の神話』弘文堂。  
岡田精司 1988「古代伝承の鹿」『古代史論集』上:125~151, 塙書房。  
面高哲郎 1979「丸谷第1遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』3:117~155, 宮崎県教育委員会。  
—— 1980「宮崎県下出土の線刻のある弥生土器」『考古学雑誌』66-1:49~54。  
勝部明生・橋本裕行編 1986『弥生人のメッセージ 絵画と記号』奈良県立橿原考古学研究所。  
加藤光臣 1980「広島県内出土の絵画土器について」『考古学雑誌』66-1:55~64。  
金関 恕 1985 a 「考古学から見た古事記の歌謡」『天理大学学报』145:1~18。  
—— 1985 b 「弥生土器絵画における家屋の表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』7:63~77。  
鎌木義昌 1964「図版解説」84(杉原荘介・大塚初重編)『日本原始美術』3, 弥生式土器:163~164, 講談社。  
亀田 博 1973『大福遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告, 36。  
カラー J. (川本茂雄訳) 1978『ソシュール』岩波現代選書12, 岩波書店。  
京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991『木津町燈籠寺遺跡』京埋セ中間報告資料, No. 91-01。  
楠元哲夫・辻本宗久・竹田政敬 1985『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡発掘調査報告書』天理市教育委員会。

- 國下多美樹 1989 「向日市東土川西遺跡」『京都府弥生式土器集成(1989)』226～229, 図版55～58, 京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 久野邦雄・寺沢 薫 1978 『昭和52年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町教育委員会。
- 1980 「唐古・鍵遺跡出土の絵画文土器について」『考古学雑誌』66-1:90～95。
- 桑原久男 1989 「畿内弥生式土器の推移と画期」『史林』72-1:1～43。
- 小林行雄 1943 a 「第四様式土器における原始絵画」『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告, 16:102～114。
- 1943 b 「第五様式土器における記号的文様」『大和唐古弥生式遺跡の研究』115～121。
- 1955 「弥生式土器に描かれた原始絵画」『美術史』4-3・4:104～112。
- 1958 「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡」地点, N地点, D・E・F・H地点の土器『弥生式土器集成』1:10～13, pl.12・13, 弥生式土器集成刊行会。
- 1959 『古墳の話』岩波新書, 342, 岩波書店。
- 斎藤明彦 1988 「大和の弥生絵画・記号文」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』13:1～22。
- 佐々木好直 1983 「坪井遺跡第2次調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1982年度:85～100, 奈良県立橿原考古学研究所。
- 佐原 眞 1960 「銅鐸の铸造」『世界考古学大系』2, 日本Ⅱ:92～104, 平凡社。
- 1964 「図版解説」169(杉原莊介・大塚初重編)『日本原始美術』3, 弥生式土器:172, 講談社。
- 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2:53～72, pl.39～49, 東京堂出版。
- 1971 「考古学からみた伊丹地方」『伊丹市史』1:73～136, 伊丹市。
- 1973 「銅鐸の絵物語」『国文学』18-3:45～53。
- 1979 『銅鐸』日本の原始美術, 7, 講談社。
- 1980 「弥生土器の絵画」『考古学雑誌』66-1:102～117。
- 1990 「稲と権力の時代」・「絵画と紋様」『人間の美術』2, 稲と権力:14～45, 学習研究社。
- 清水真一 1986 『吉備遺跡(岡崎地区)発掘調査概報』桜井市教育委員会。
- 釋 龍雄 1976 「弥生式土器」『青野遺跡A地点発掘調査報告書』綾部市文化財調査報告, 2:53～72。
- ・杉原和雄ほか 1980 『水無月山遺跡発掘調査報告書』丹後郷土資料館。
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告, 16, 桑名文星堂。
- 菅付和樹 1988 「熊野原遺跡A・B地区の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』4, 本文編:12～38, 図面編:1～47, 宮崎県教育委員会。
- 杉原莊介 1961 「神奈川県藤沢市引地伊勢山遺跡の土器」『弥生式土器集成』2:51～52, pl.47, 弥生式土器集成刊行会。
- 第2 阪和国道内遺跡調査会 1970 『池上・四ツ池遺跡』13, 第2 阪和国道内遺跡調査会。
- 高島 徹・広瀬雅信・畑 暢子編 1983 『亀井』大阪文化財センター。
- 田代 弘 1983 「北金岐遺跡」『京都府遺跡調査概報』7:32～37, 京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 1986 「南金岐遺跡出土の記号文のある土器」『京都府埋蔵文化財情報』19:38～41, 京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 辰巳和弘 1990 『高殿の古代学』白水社。
- 伊達宗泰 1966 「勢野茶臼山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』23:21～32。
- 田中勝弘ほか 1976 「湖北町丁野遺跡」『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅱ, 滋賀県教育委員会。
- 田中 茂 1975 「宮崎県下出土の弥生式土器絵画」『宮崎考古』1:2～7。
- 田中 琢 1970 「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』5, 近畿:44～59, 角川書店。
- 田辺昭三編 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会。
- 谷口武範・津隈久美子 1988 「下那珂貝塚」『埋蔵文化財調査研究報告』Ⅱ, 宮崎県総合博物館。
- 都出比呂志 1982 「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集:215～243, 平凡社。
- 坪井清足 1958 「岡山県窪郡庄村上東遺跡の土器」『弥生式土器集成』1:6～8, pl.7・8, 弥生式土器集成刊行会。

- 出宮徳尚 1979「竜を祭った遺跡」『月刊文化財』4:34~37。
- 寺川史郎・尾谷雅彦編 1980『亀井・城山』大阪文化財センター。
- 寺沢 薫 1977『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書, 34。
- 編 1981『昭和55年度唐古・鍵遺跡第10・11次発掘調査概報』田原本町教育委員会。
- 戸原和人 1989「長岡京市雲宮遺跡(第2次調査)MTD地区」『京都府弥生土器集成(1989)』244~245, 図版65, 京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 中井一夫 1983『和爾・森本遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告, 45。
- 永友良典 1988「陣ノ内遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』4, 本文編:48~70, 図面編:61~101, 宮崎県教育委員会。
- 中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編 1982『亀井遺跡』大阪文化財センター。
- 難波洋三 1991「同範銅鐸2例」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』2:57~109, pl. V-1~13。
- 西村 康・甲斐忠彦 1980「第V様式土器」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ, 藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査, 奈良国立文化財研究所学報, 37。
- 野間重孝・伊東 但 1986「宮崎の古墳文化出現前夜」『えとのす』31:75~93。
- 橋本裕行 1988「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集』8:97~161, 吉川弘文館。
- 服部清道 1965「稲荷台地遺跡調査概報」『藤沢市文化財調査報告書』2:19~25。
- 林 博通 1981「滋賀県における弥生式土器に施された絵画・記号的図形」『考古学雑誌』67-1:115~124。
- 原田 修・久貝 健・島田和子 1976「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』2-2:1~113。
- 春成秀爾 1982「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』1:1~48。
- 1987「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』12:1~38。
- 1989「九州の銅鐸」『考古学雑誌』75-2:1~50。
- 1990「男と女の闘い—銅鐸絵画の一齣—」『国立歴史民俗博物館研究報告』25:1~28。
- 1991a「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼—」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集, Ⅱ:442~481, 文献出版。
- 1991b「描かれた建物」『弥生時代の掘立柱建物』本編:55~69, 埋蔵文化財研究会。
- 1991c「銅鐸絵画の原作と改作」『国立歴史民俗博物館研究報告』31:1~28。
- 肥後弘幸 1989「舞鶴市志高遺跡」『京都府弥生土器集成(1989)』191~194, 図版34~36。
- 福井英治編 1982『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告, 15。
- 藤沢一夫 1960『豊中市史』史料編, 1, 豊中市役所。
- 藤沢真依 1976『東奈良』東奈良遺跡調査会。
- 藤田三郎 1982「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ, Ⅰ:125~134。
- 1983「弥生時代の土坑について」『田原本の歴史』1:25~40, 田原本町。
- 編 1983『昭和57年度唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 1。
- 1984『昭和58年度唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 2。
- 1986『昭和60年度唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 4。
- 1989『昭和62・63年度唐古・鍵遺跡第32・33次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 11。
- 藤永正明・阿部幸一編 1986『城山(その3)』大阪府教育委員会・大阪文化財センター。
- 北郷泰道 1981『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書, 1。
- 松本洋明 1986『桜井市芝遺跡寺ノ前地区発掘調査概報』桜井市教育委員会。
- 三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ 1961『上箕田』三重県立神戸高等学校。
- 三木文雄 1969「銅戈」『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈』兵庫県文化財調査報告書, 1:159~172, 図78。
- 宮崎泰史編 1984『亀井遺跡Ⅱ』大阪文化財センター。
- 宮本長二郎 1986「住居と倉庫」『弥生文化の研究』7, 弥生集落:9~23, 雄山閣。



- 村川行弘・石野博信 1964『会下山遺跡』芦屋市教育委員会。
- 森 浩一 1966「大阪府船橋遺跡の弥生土器絵画」『古代学研究』45：8。
- 森 貞次郎 1955「北九州」『日本考古学講座』4，弥生文化：32～40，河出書房。
- 1968「東九州地方」『弥生式土器集成』本編1：20～24，pl. 15～19，東京堂出版。
- 森田克行編 1977『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書，10。
- 森本六爾 1924「大和に於ける史前の遺跡」『考古学雑誌』14—12：13～32。
- 1927「原始絵画を有する弥生式土器」『日本上代文化の考究』115～134，四海書房。
- ・小林行雄編 1938・39『弥生式土器聚成図録』正編，東京考古学会学報，1，東京考古学会。
- 横田健一 1969『日本古代の精神』講談社現代新書。
- 吉田宇太郎 1928「高市郡新沢村大字一石器時代遺跡調査」『奈良県史蹟名勝天然紀念物調査会第拾回報告』1～54，奈良県。
- ルロワ＝グーラン A.（蔵持不三也訳）1985『先史時代の宗教と芸術』日本エディタースクール出版部。

### 付 記

付図を製版にまわしてから，記号土器の集成図に大阪府高安遺跡，京都府水無月山，中久世遺跡などの例が落ちていることに気づいた。

なお，図23—121の下弧形の彩紋は口縁内面に等間隔で4個配列していることがわかったので，記号からは一応，外しておきたい。

（国立歴史民俗博物館 考古研究部）

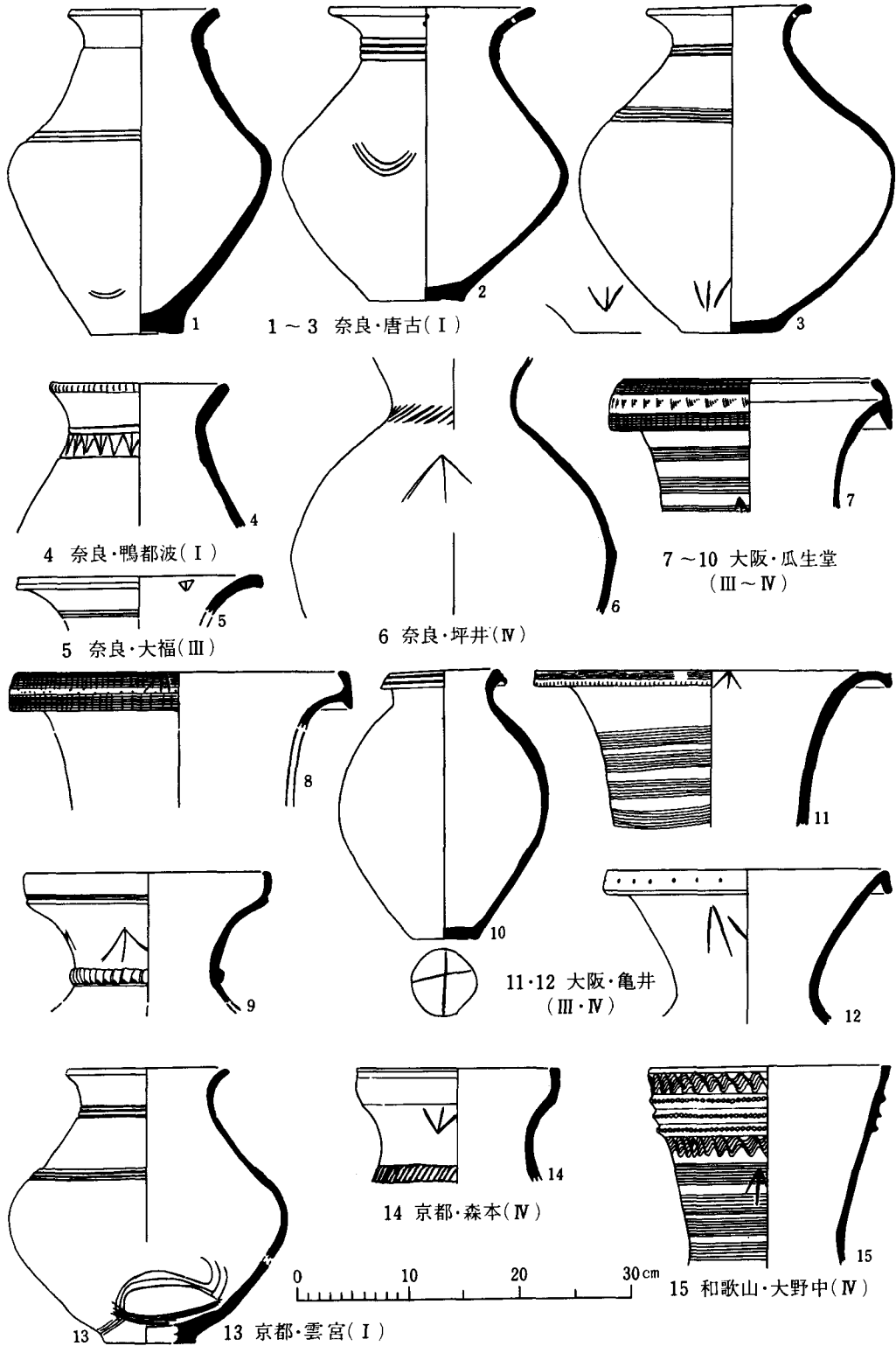


図15 近畿地方のI~IV期の記号土器 1/6

Fig. 15

絵画から記号へ

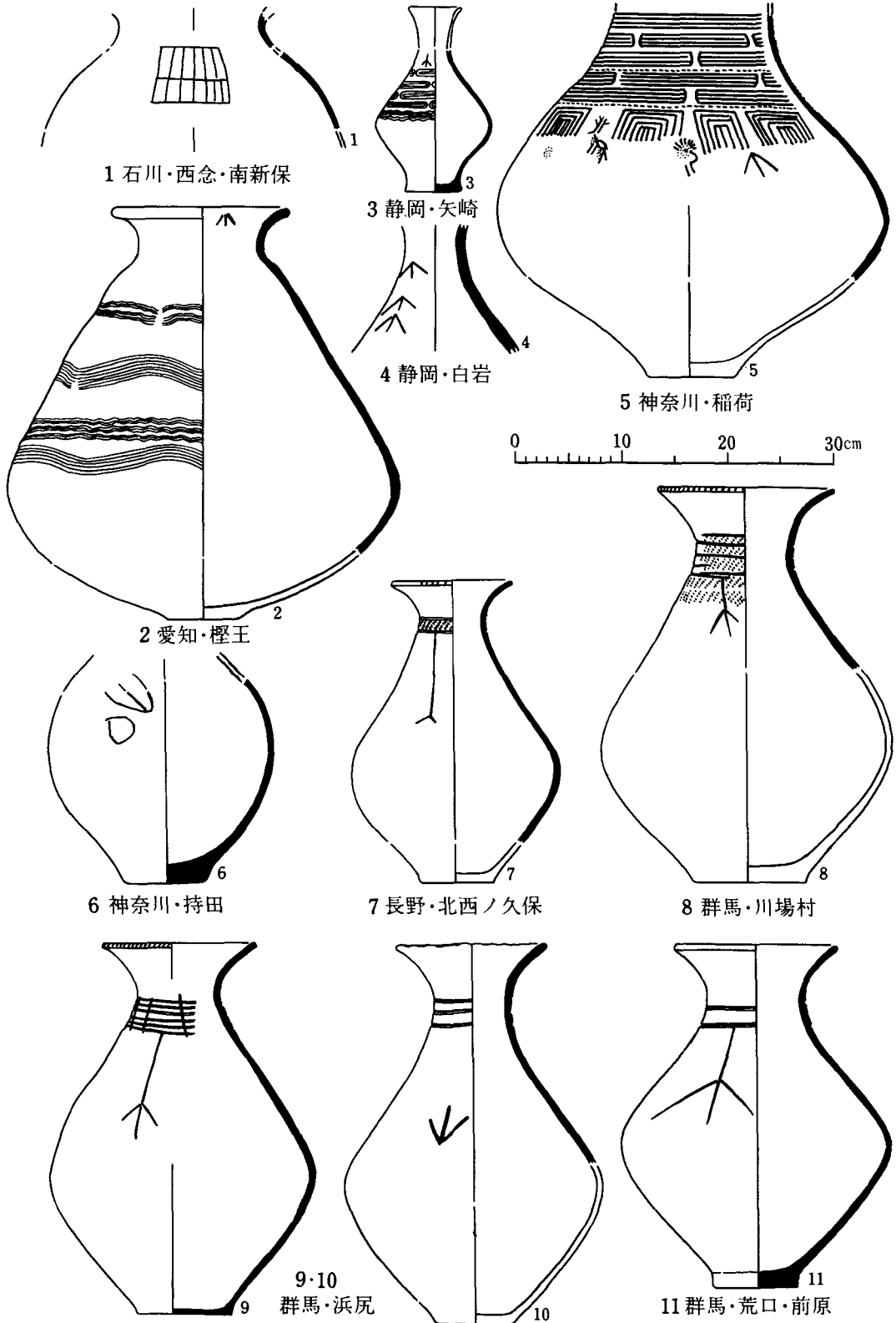
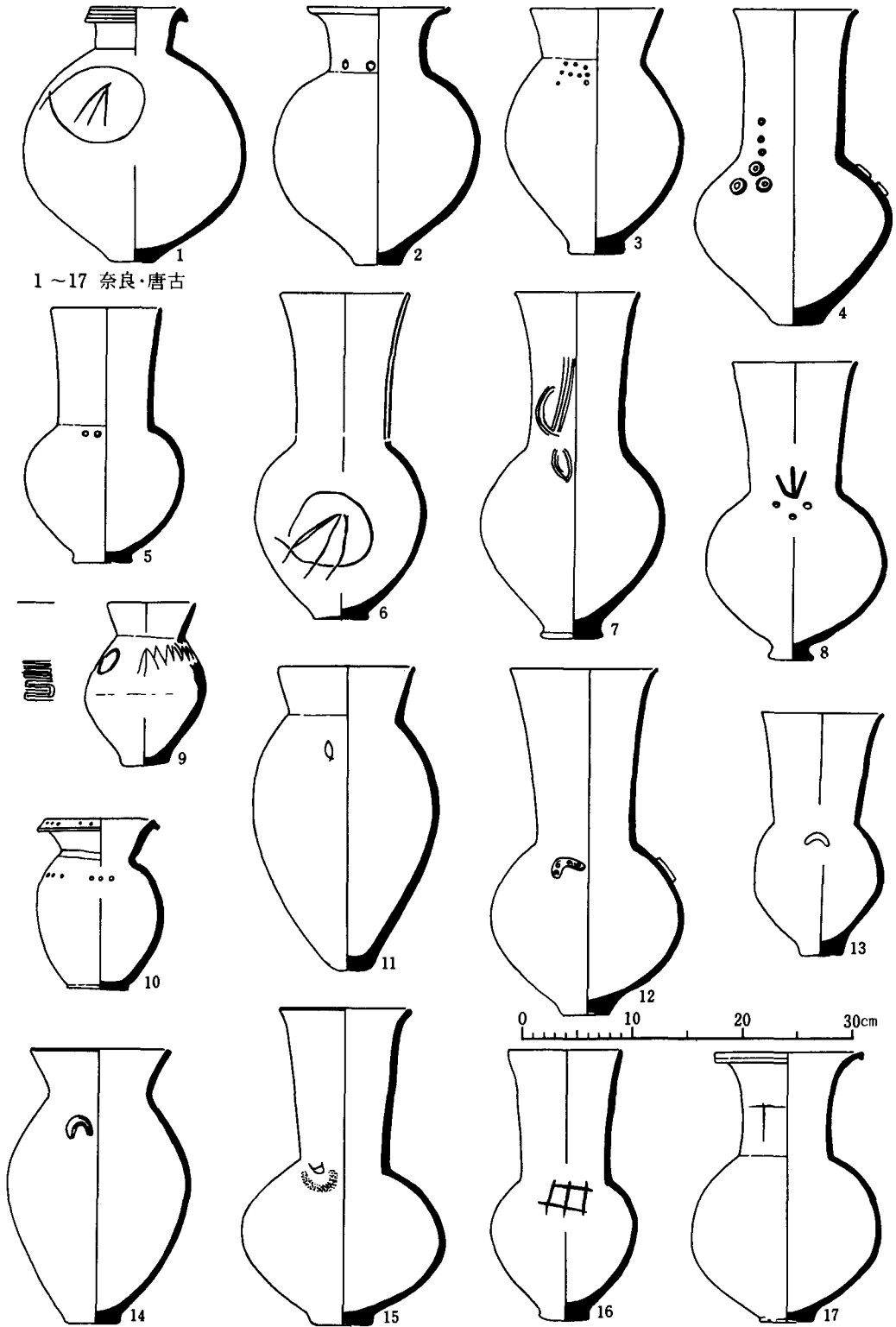


図16 石川・愛知・静岡・神奈川・長野・群馬県のⅣ期の記号土器 1/6

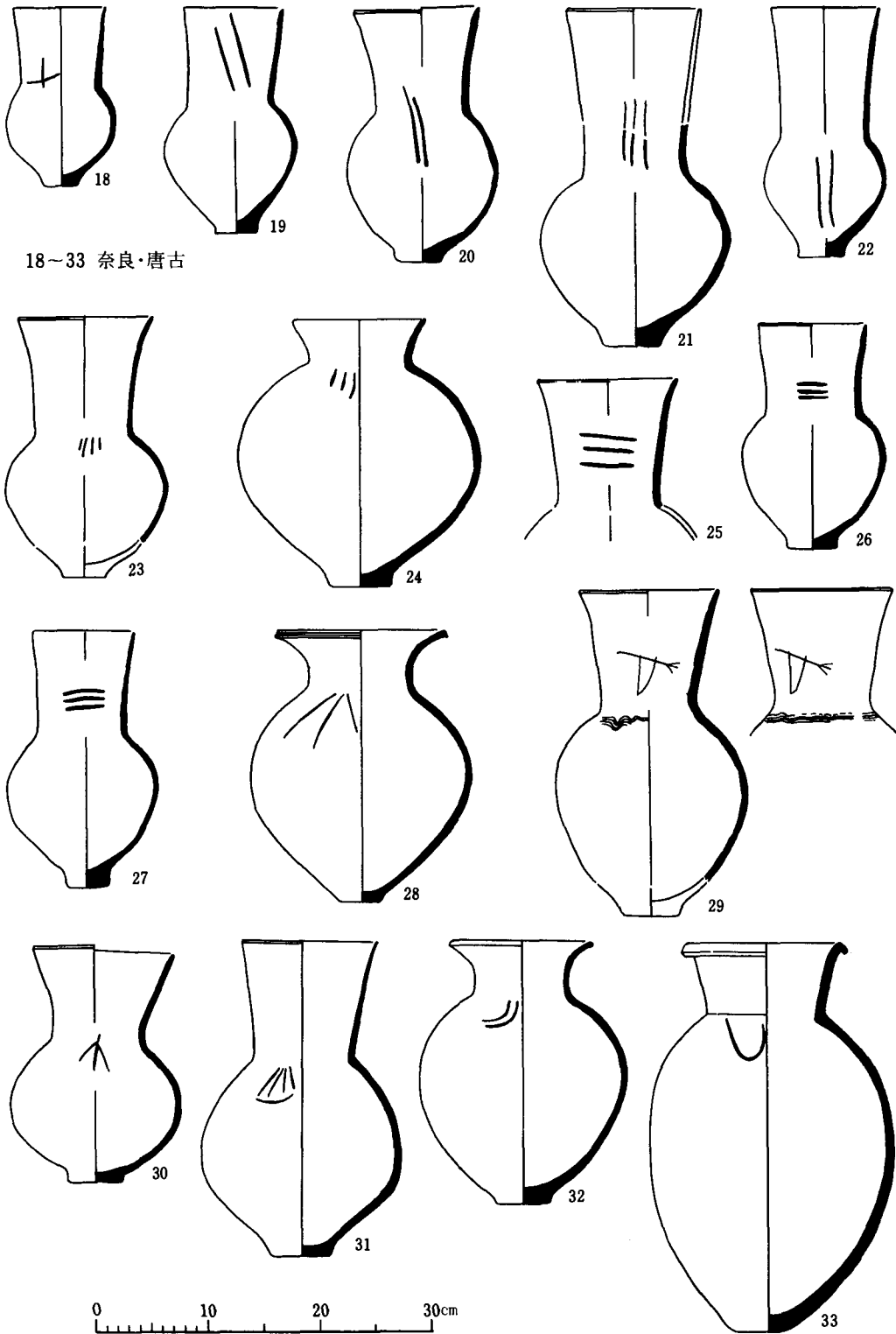
Fig. 16



1 ~ 17 奈良・唐古

図17 奈良県の記号土器 1/6

Fig. 17



18~33 奈良・唐古

図18 奈良県の記号土器 1/6

Fig. 18

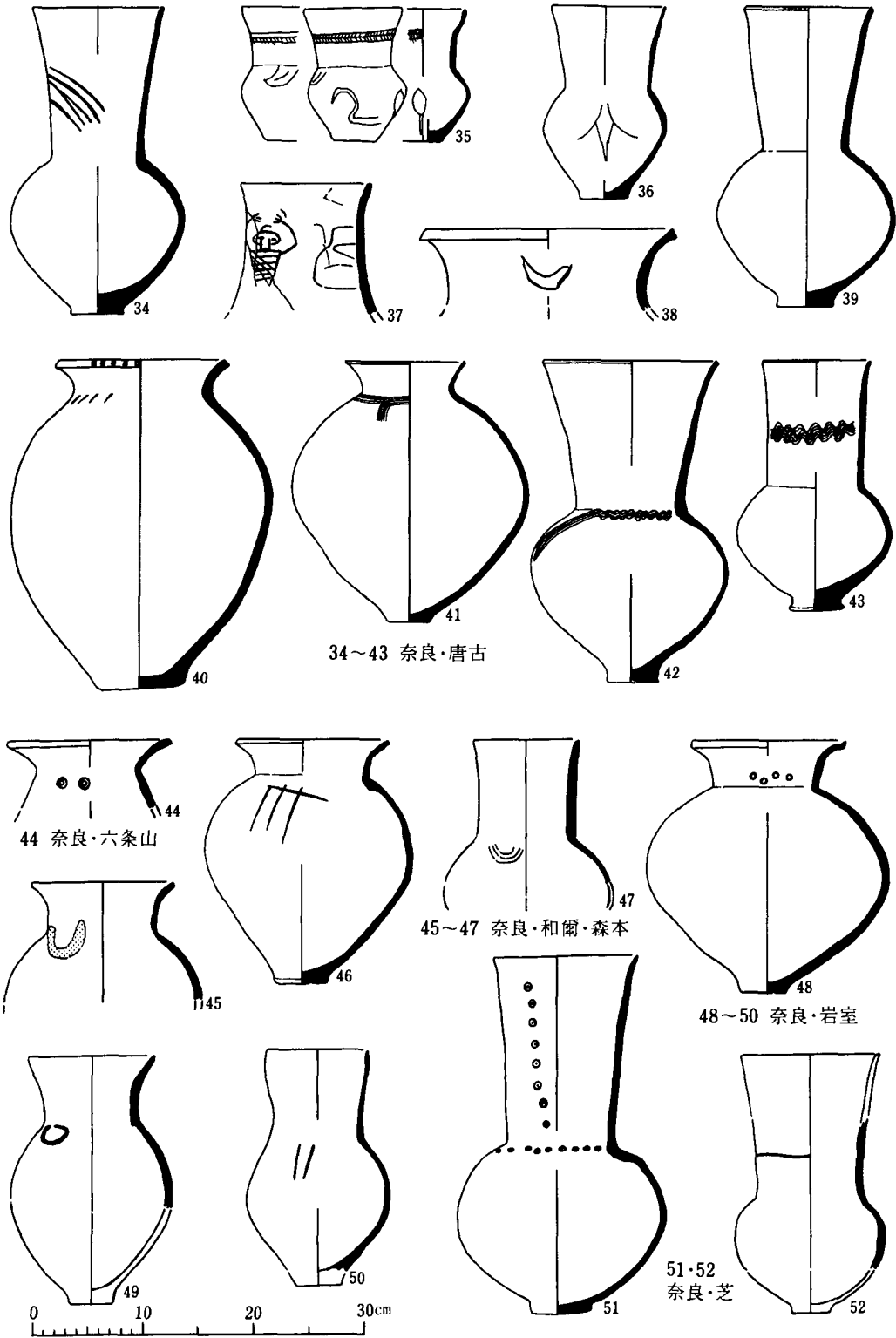


図19 奈良県の記号土器 1/6

Fig. 19

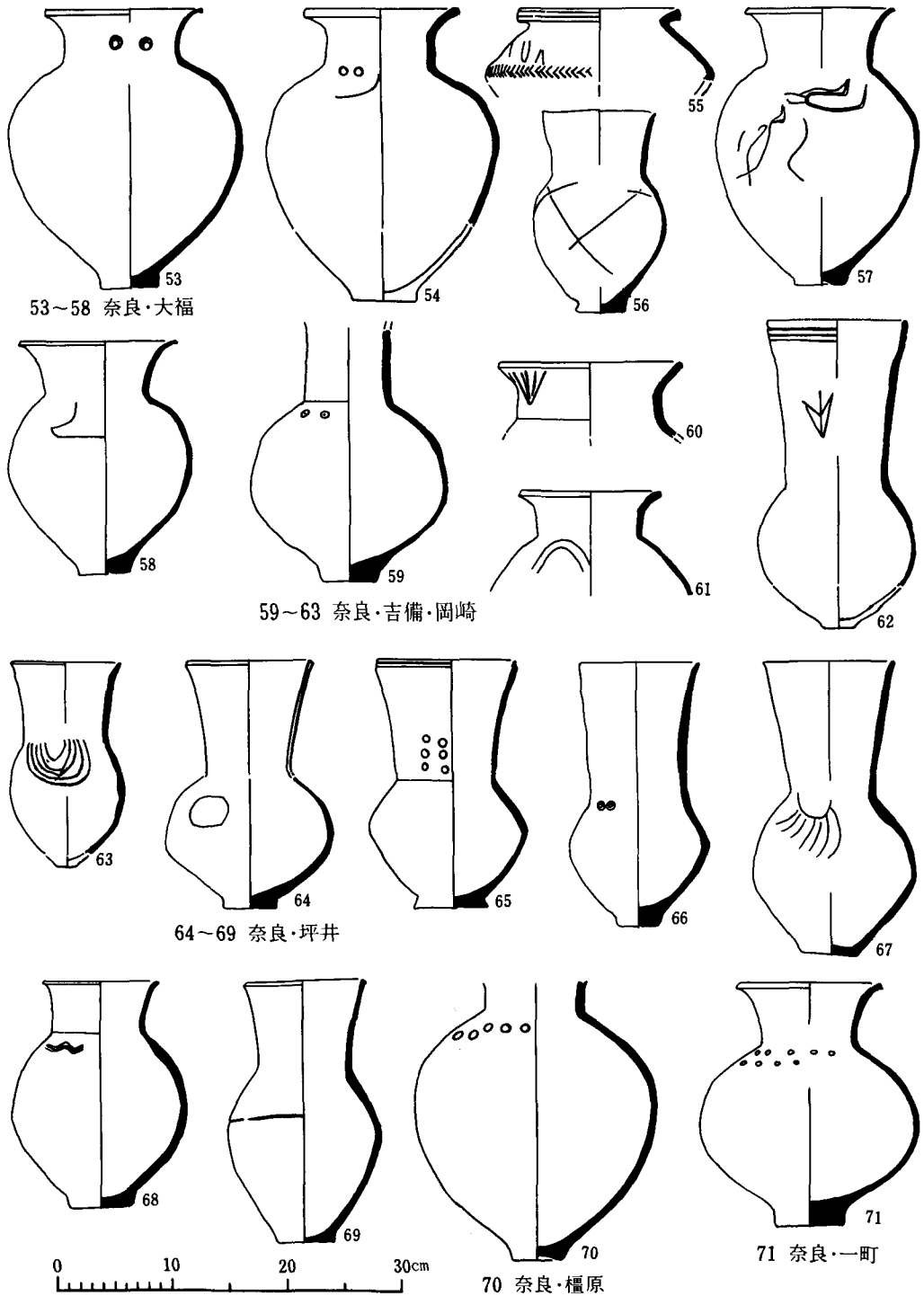
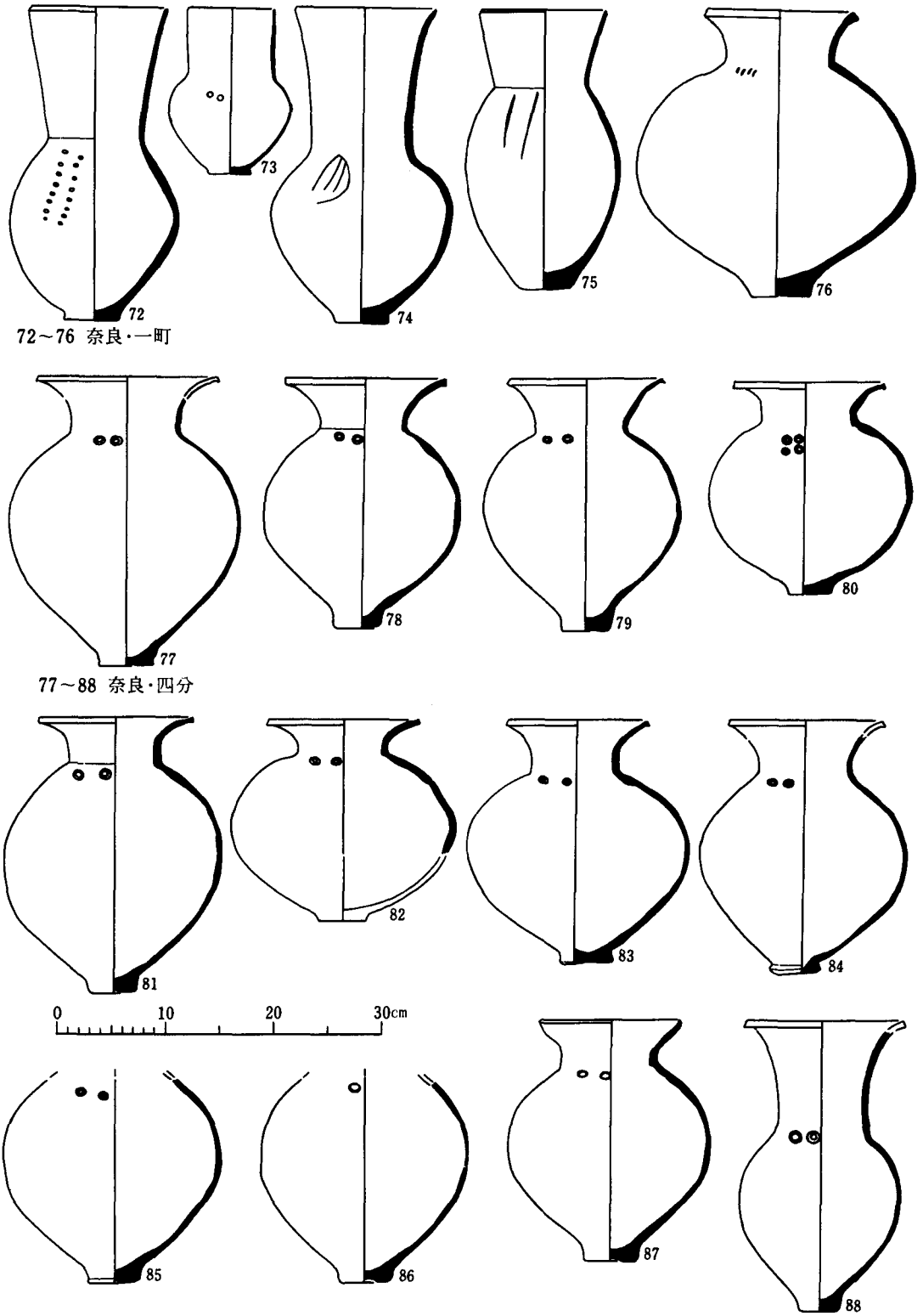


図20 奈良県の記号土器 1/6

Fig. 20



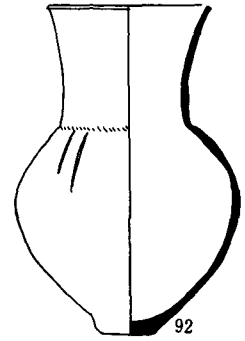
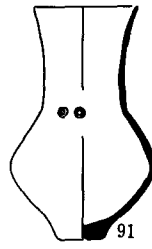
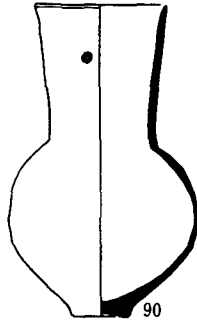
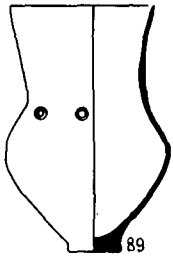
72~76 奈良・一町

77~88 奈良・四分

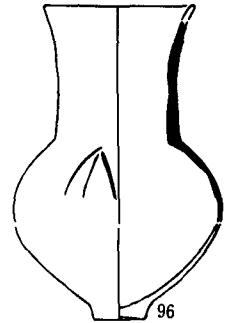
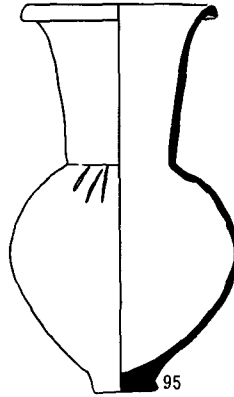
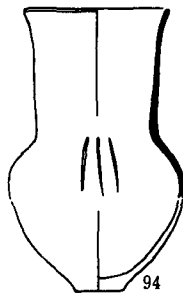
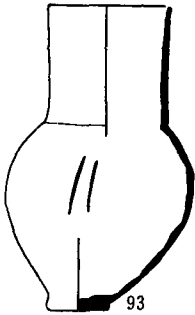
図21 奈良県の記号土器 1/6

Fig. 21





89~107 奈良・四分



0 10 20 30cm

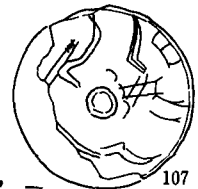
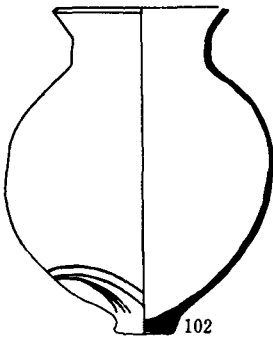
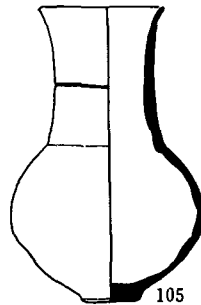
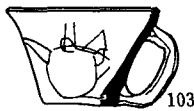
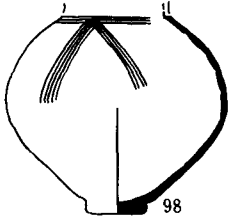
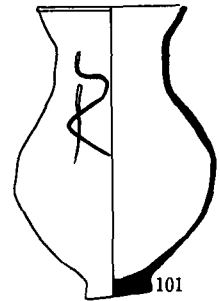
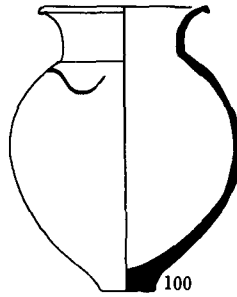
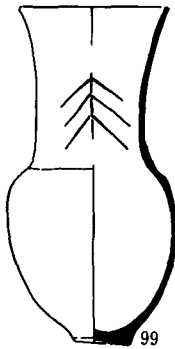
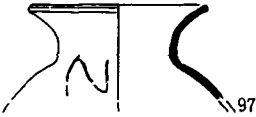


図22 奈良県の記号土器 1/6

Fig. 22

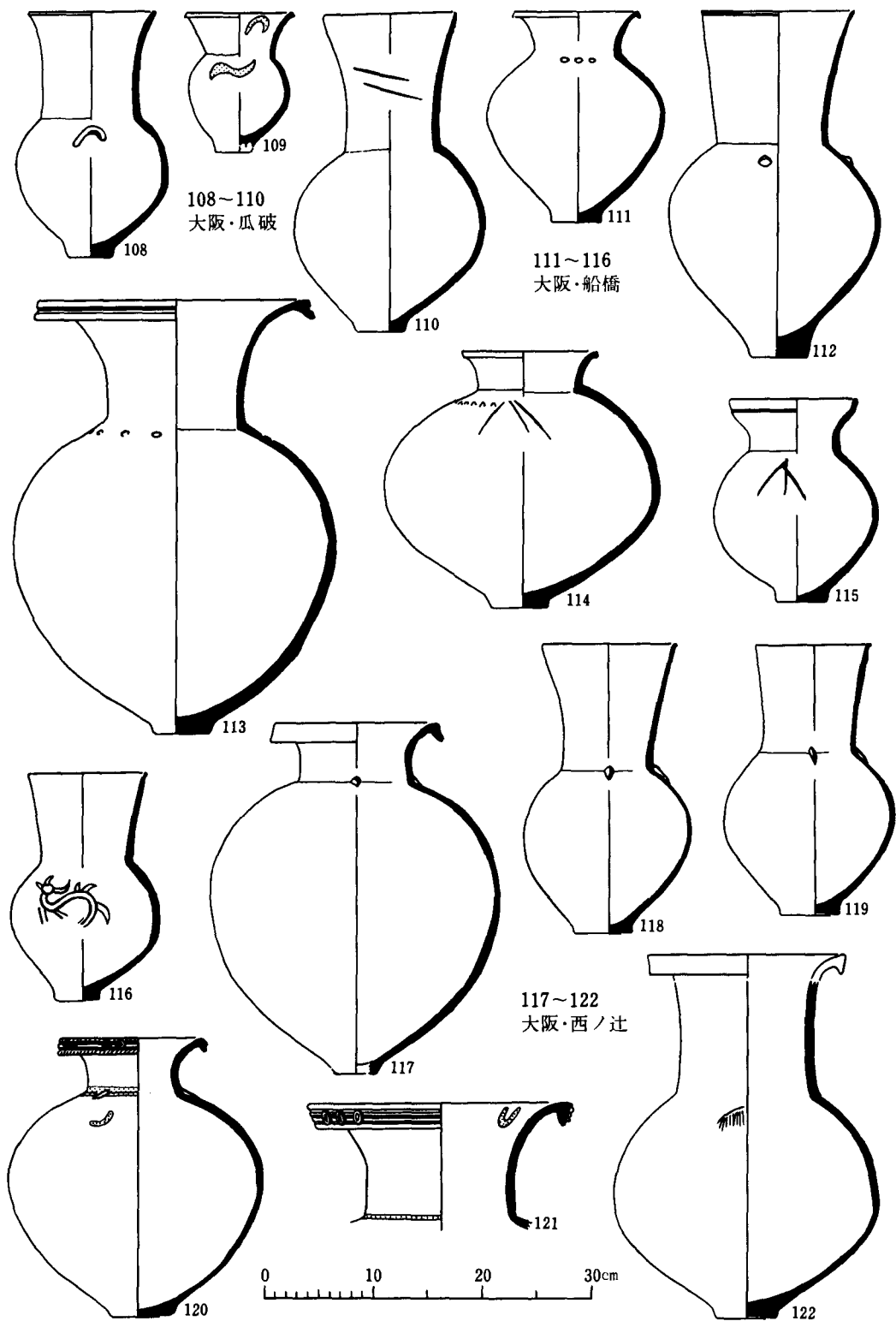


図23 大阪府の記号土器 1/6

Fig. 23

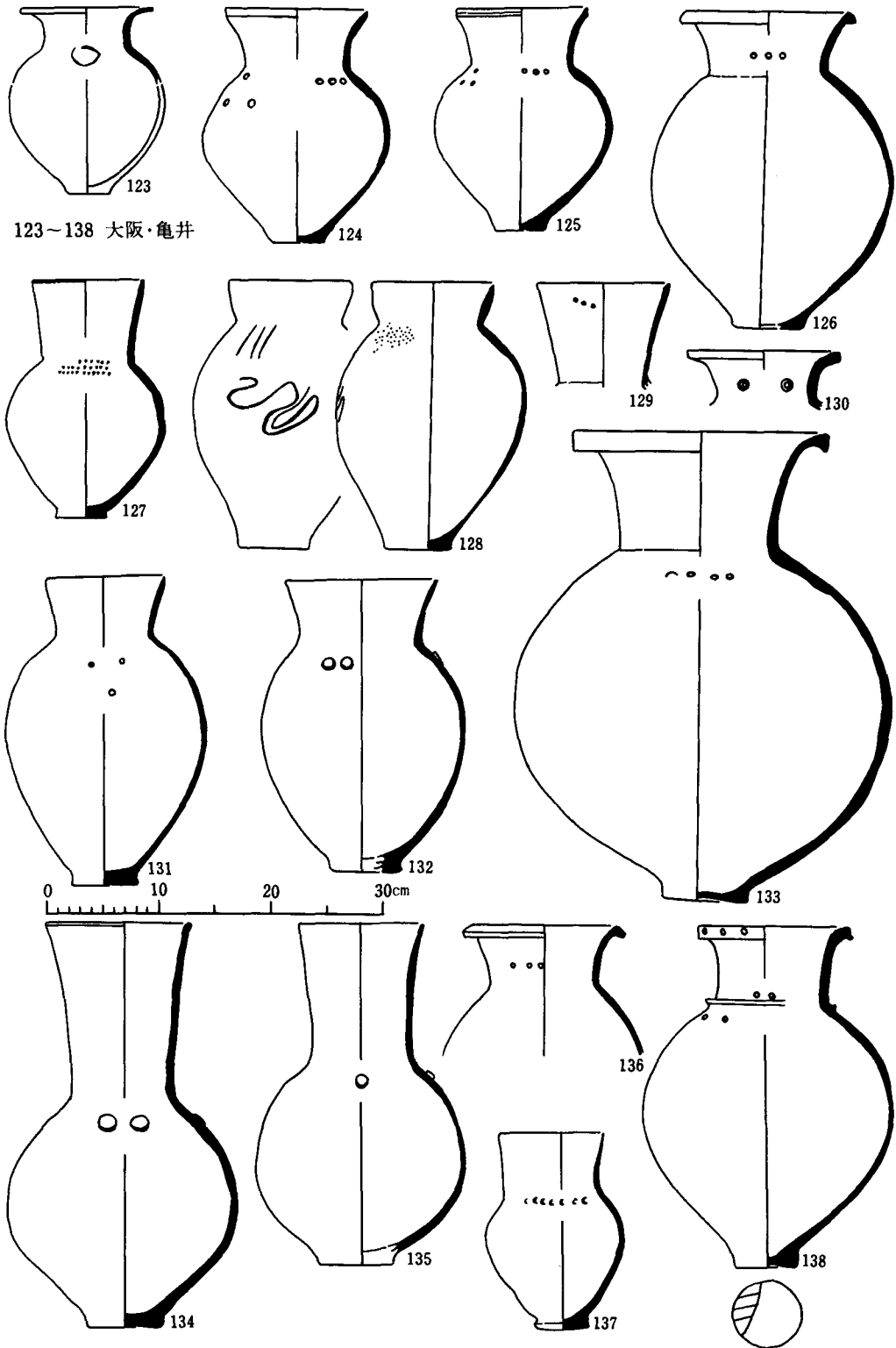


図24 大阪府の記号土器 1/6

Fig. 24

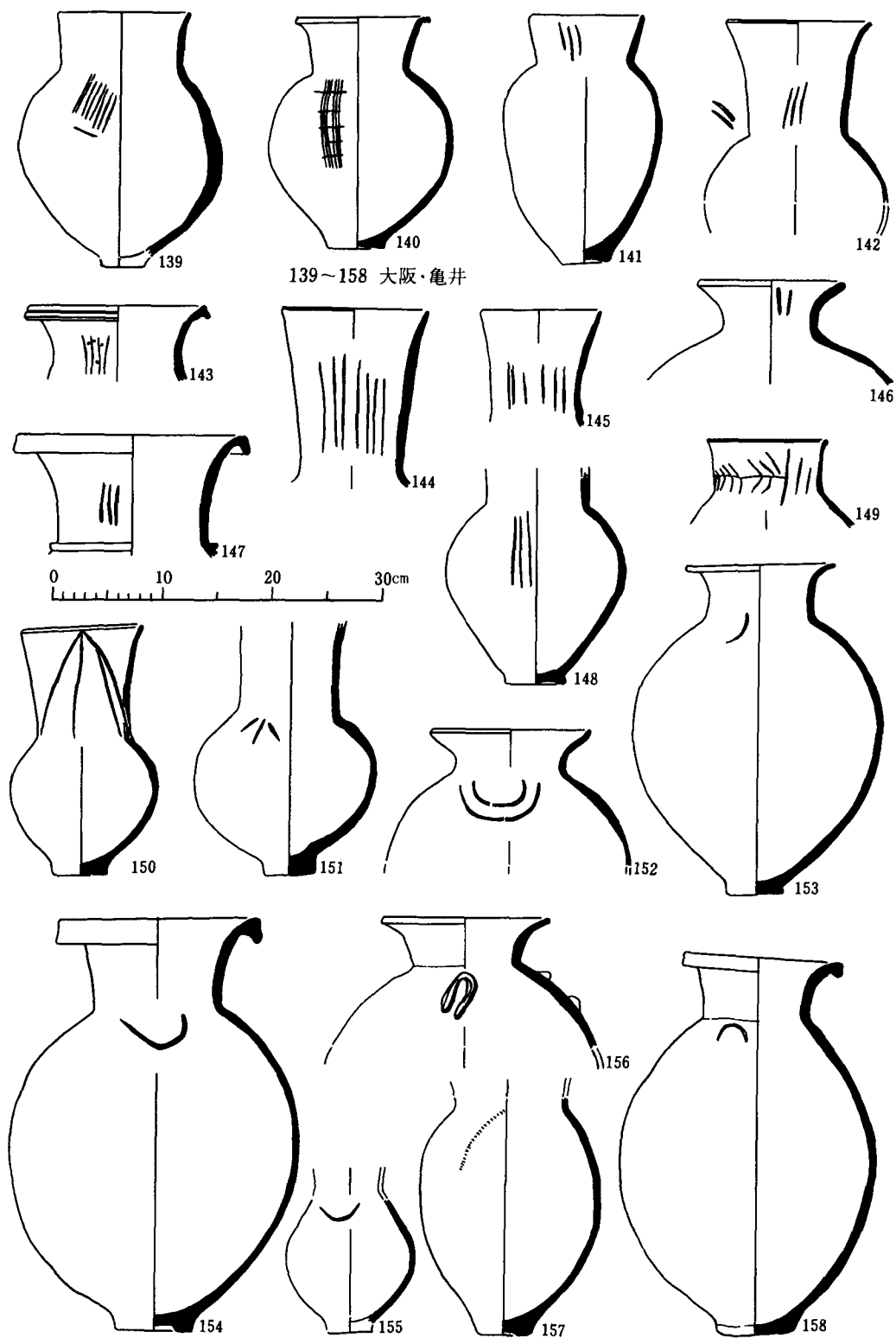


図25 大阪府の記号土器 1/6

Fig. 25

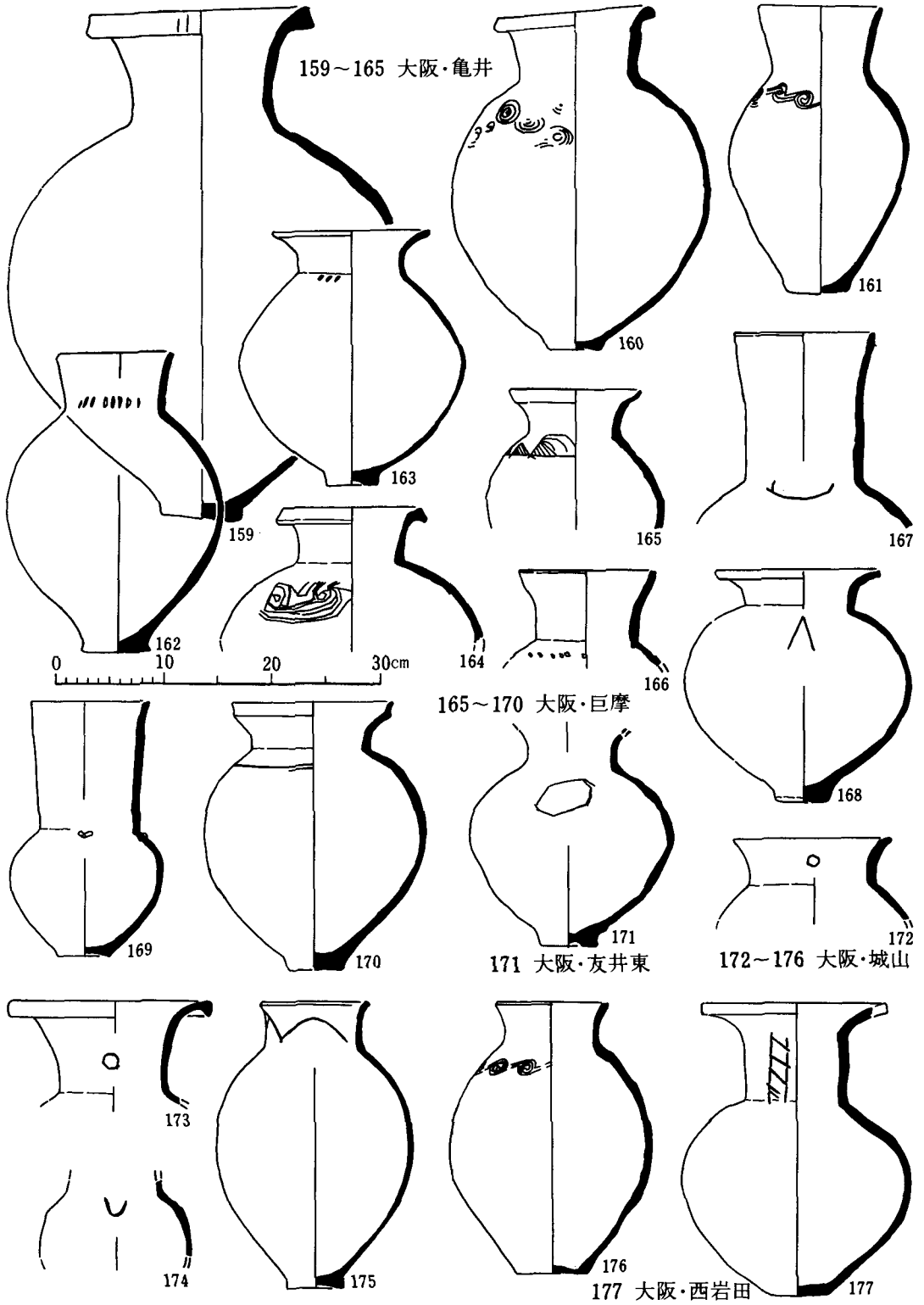


図26 大阪府の記号土器

Fig. 26

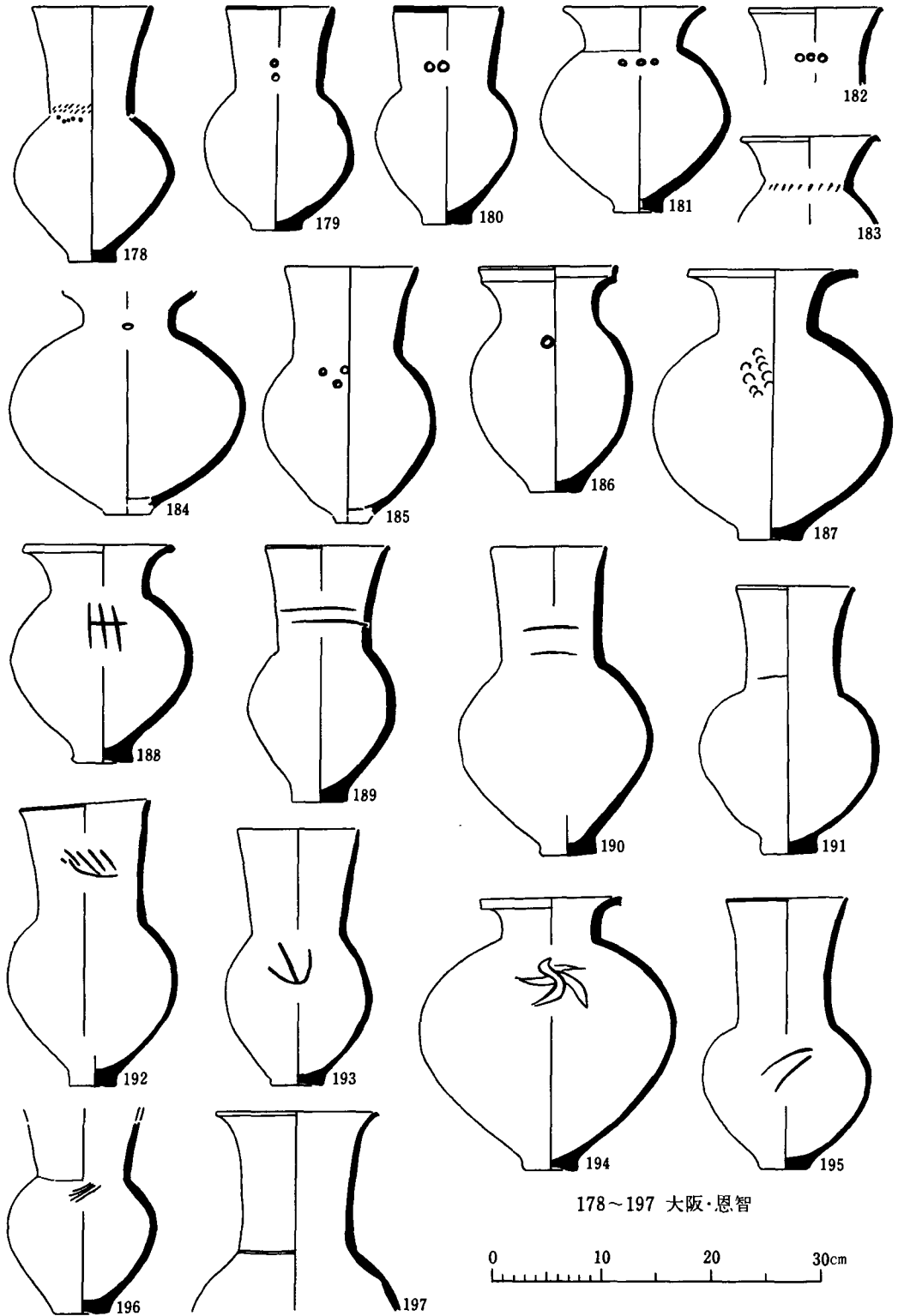


図27 大阪府の記号土器 1/6

Fig. 27

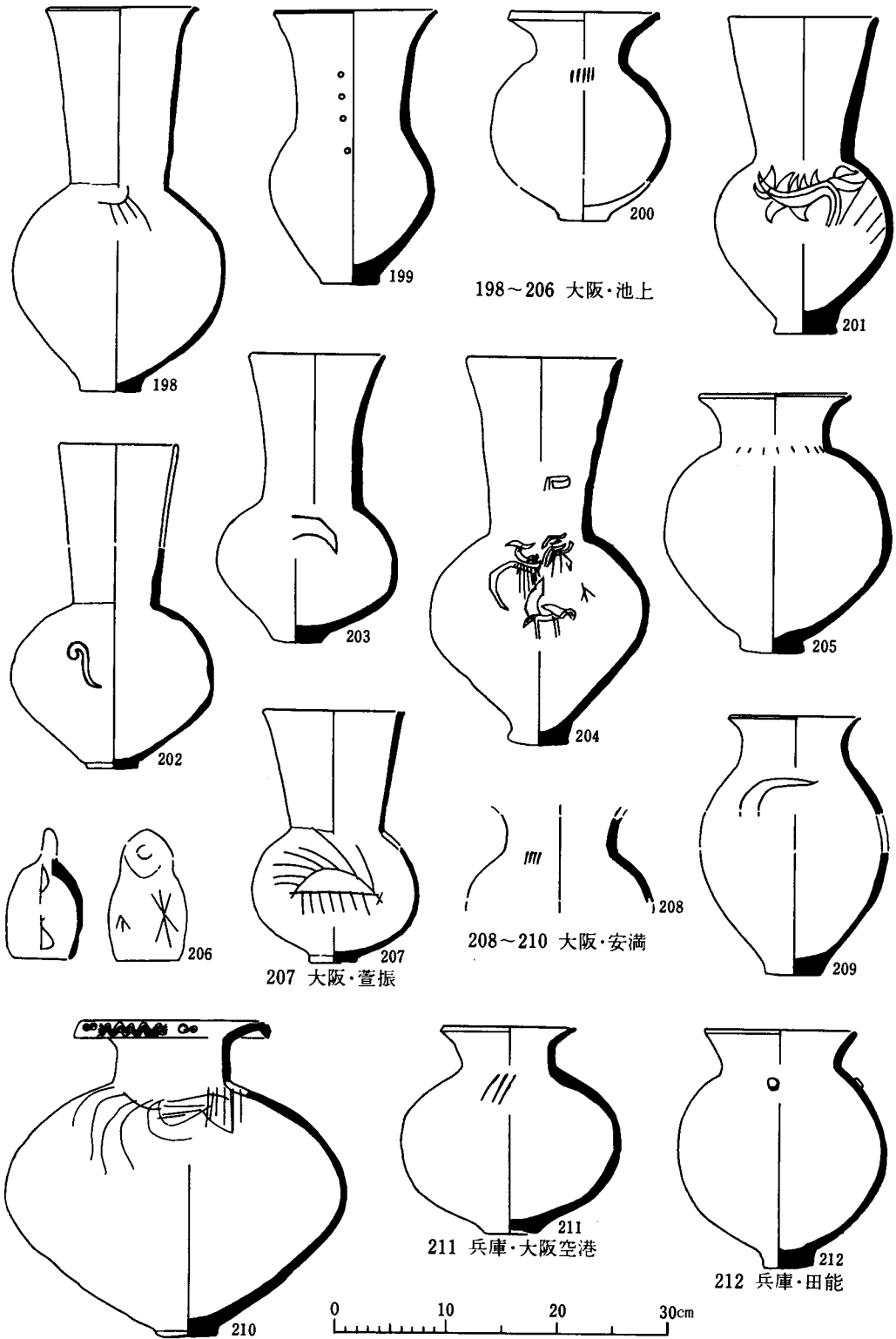


図28 大阪府・兵庫県の記号土器 1/6

Fig. 28

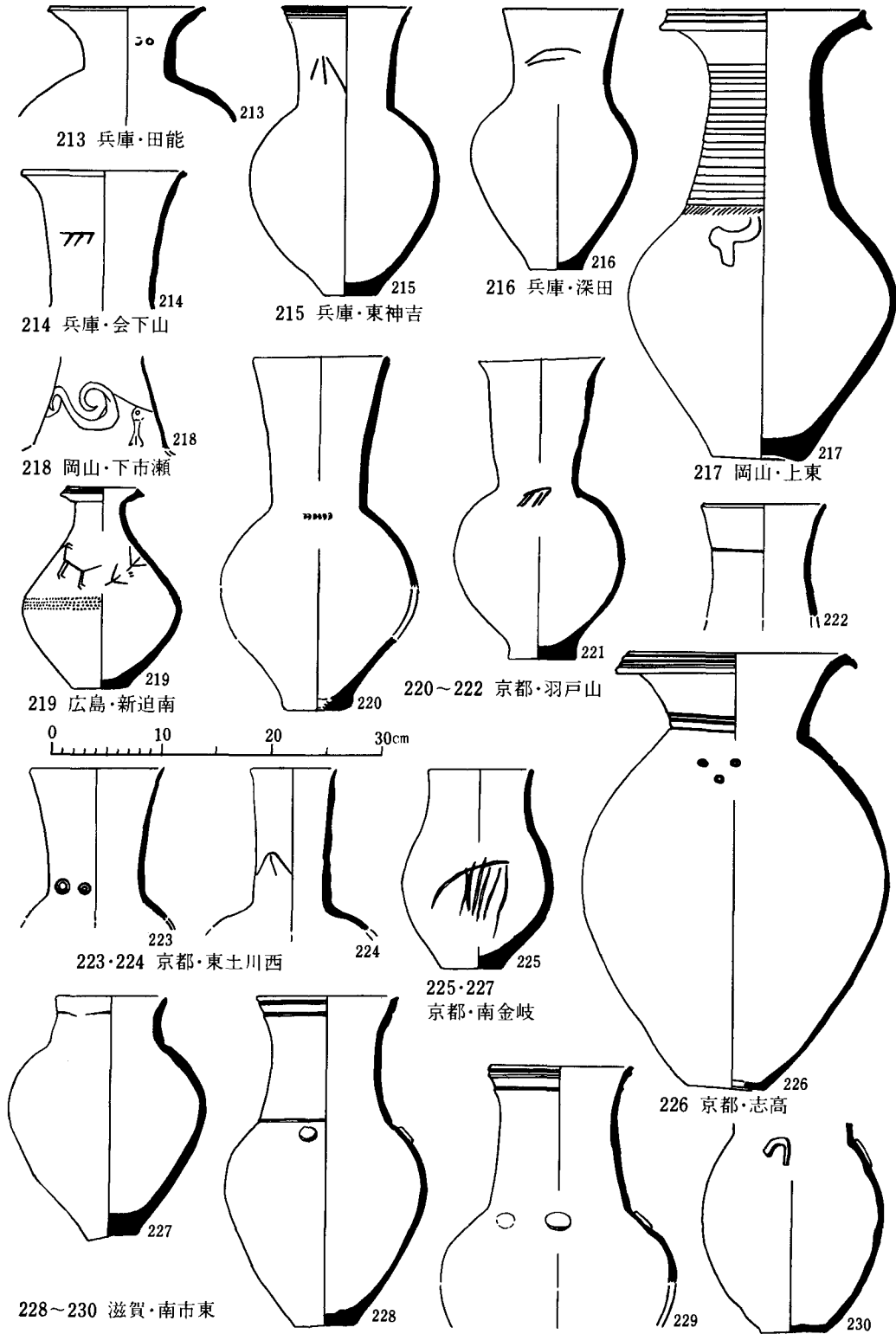
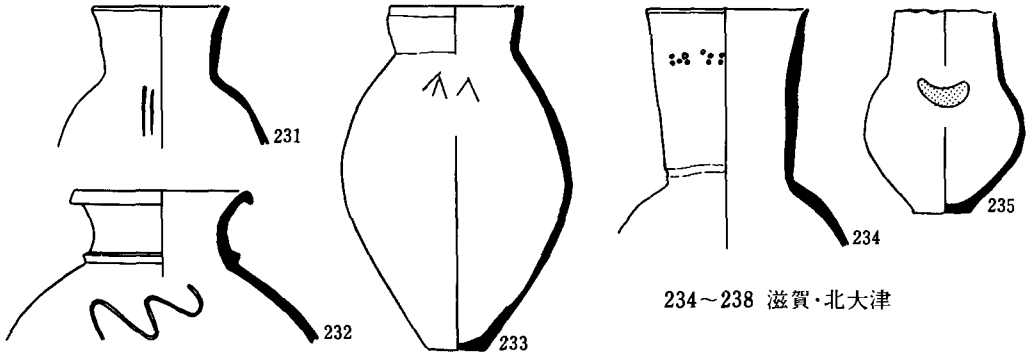


図29 兵庫・岡山・広島県，京都府，滋賀県の記号土器 1/6

Fig. 29

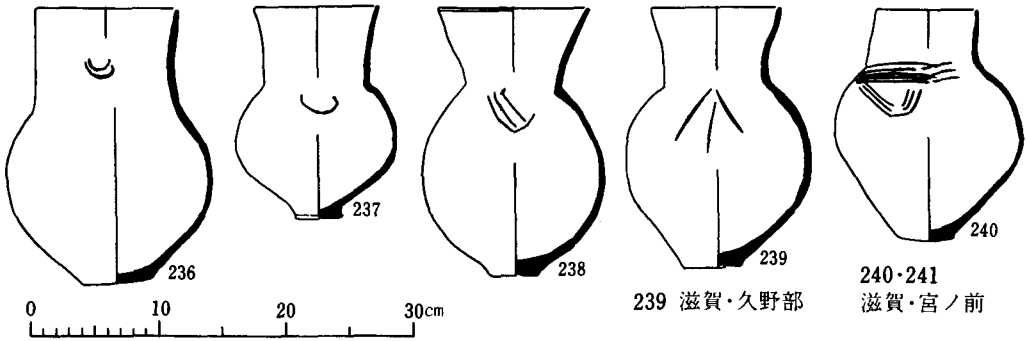




231・232 滋賀・南市東

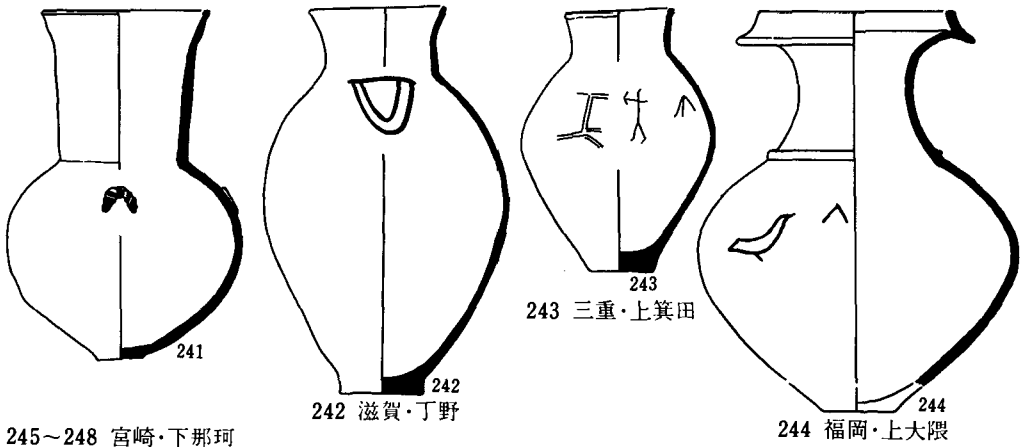
233 滋賀・滋賀里

234~238 滋賀・北大津



239 滋賀・久野部

240・241 滋賀・宮ノ前



243 三重・上箕田

242 滋賀・丁野

244 福岡・上大隈

245~248 宮崎・下那珂

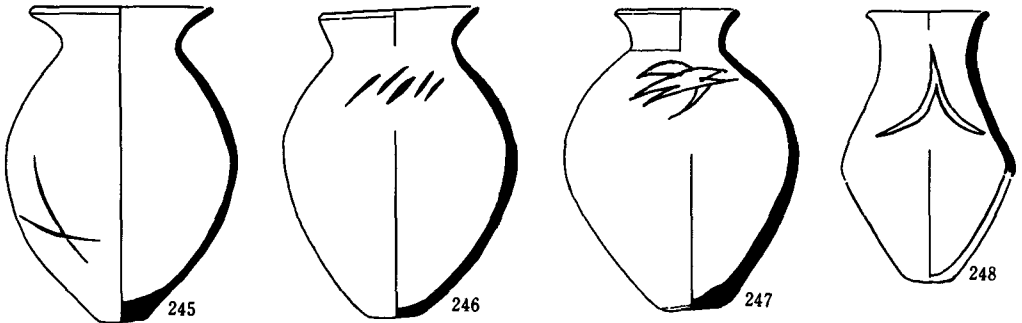


図30 滋賀・三重・福岡・宮崎県の記号土器 1/6

Fig. 30

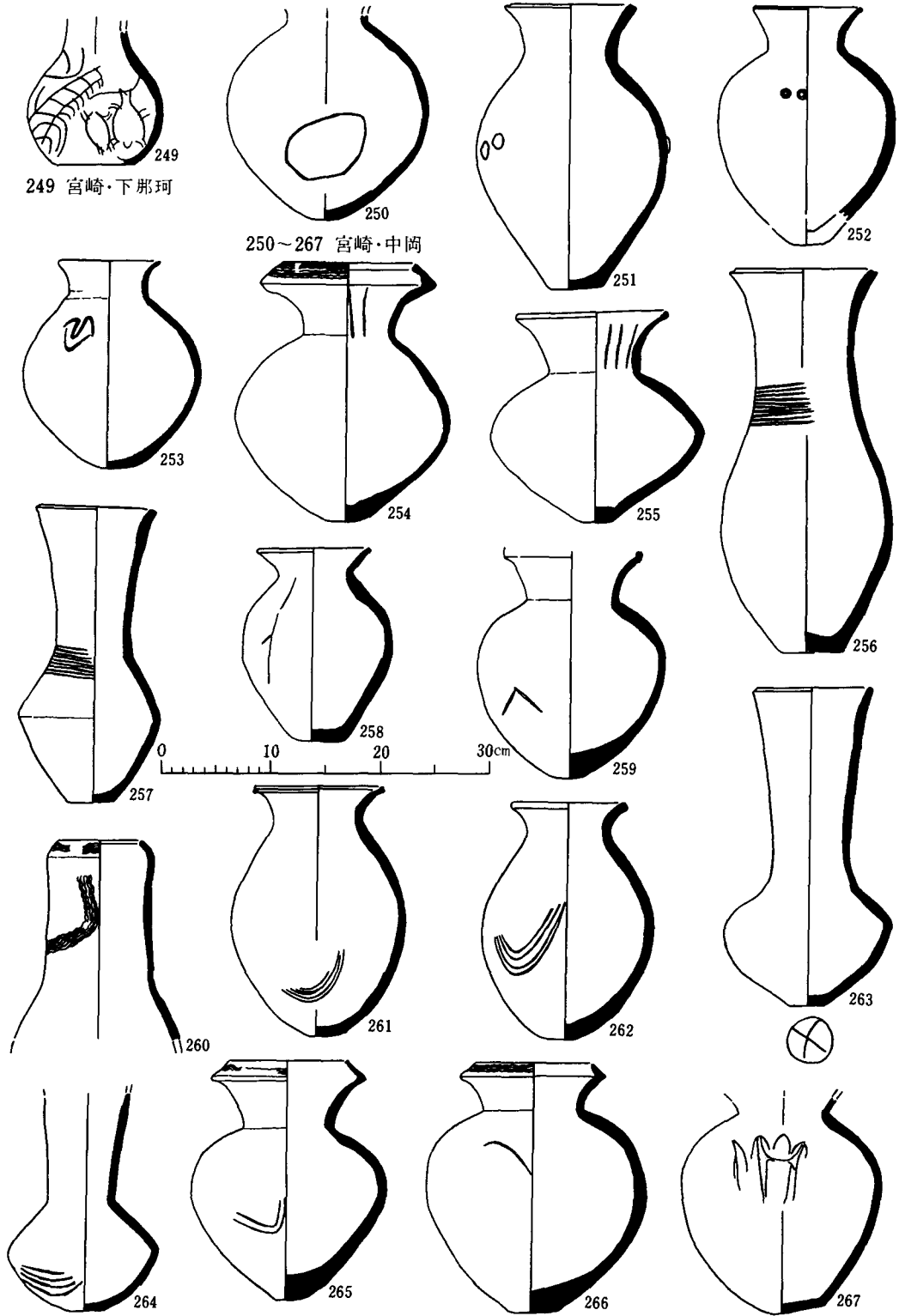
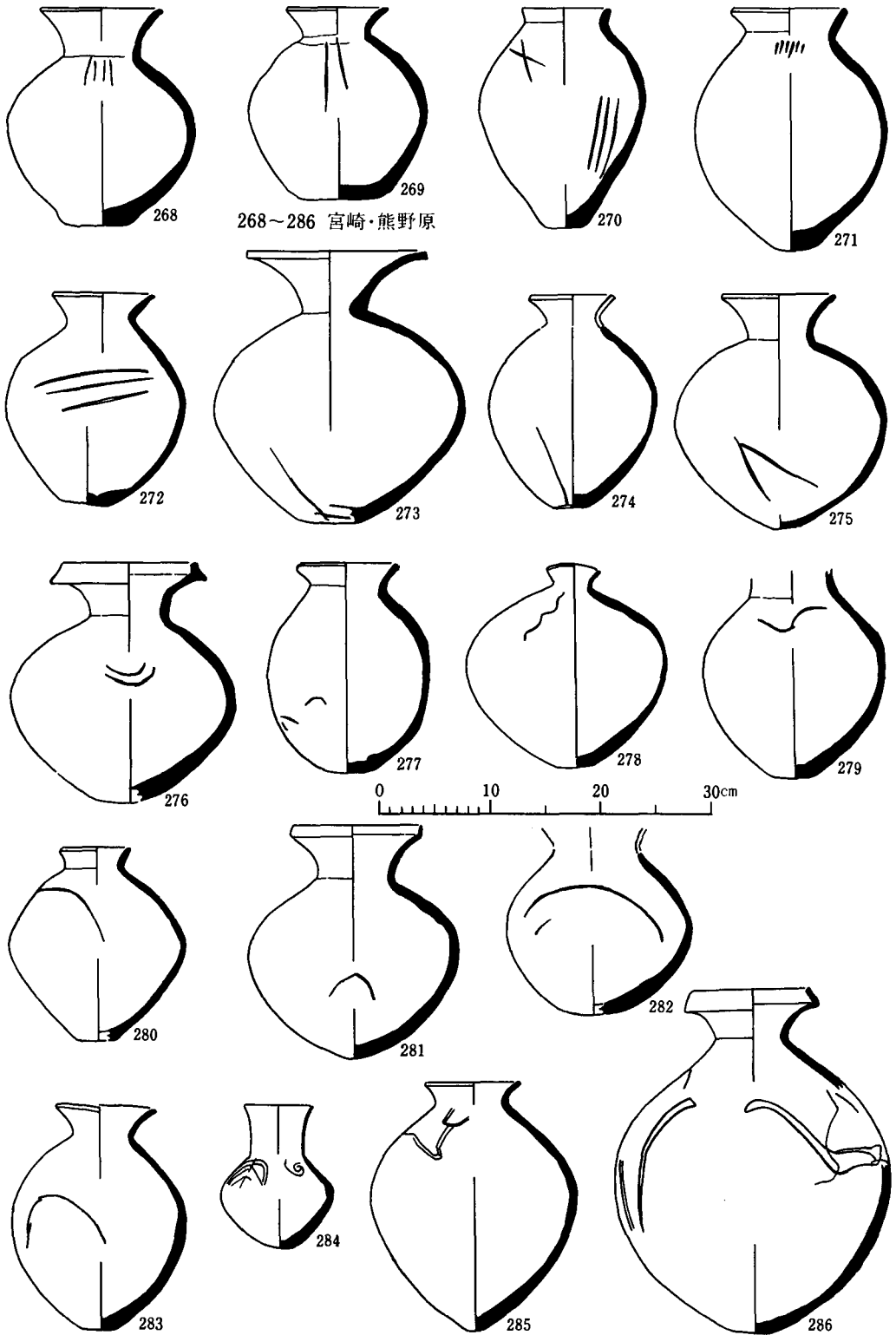


図31 宮崎県の記号土器 1/6

Fig. 31



268~286 宮崎・熊野原

図32 宮崎県の記号土器 1/6

Fig. 32

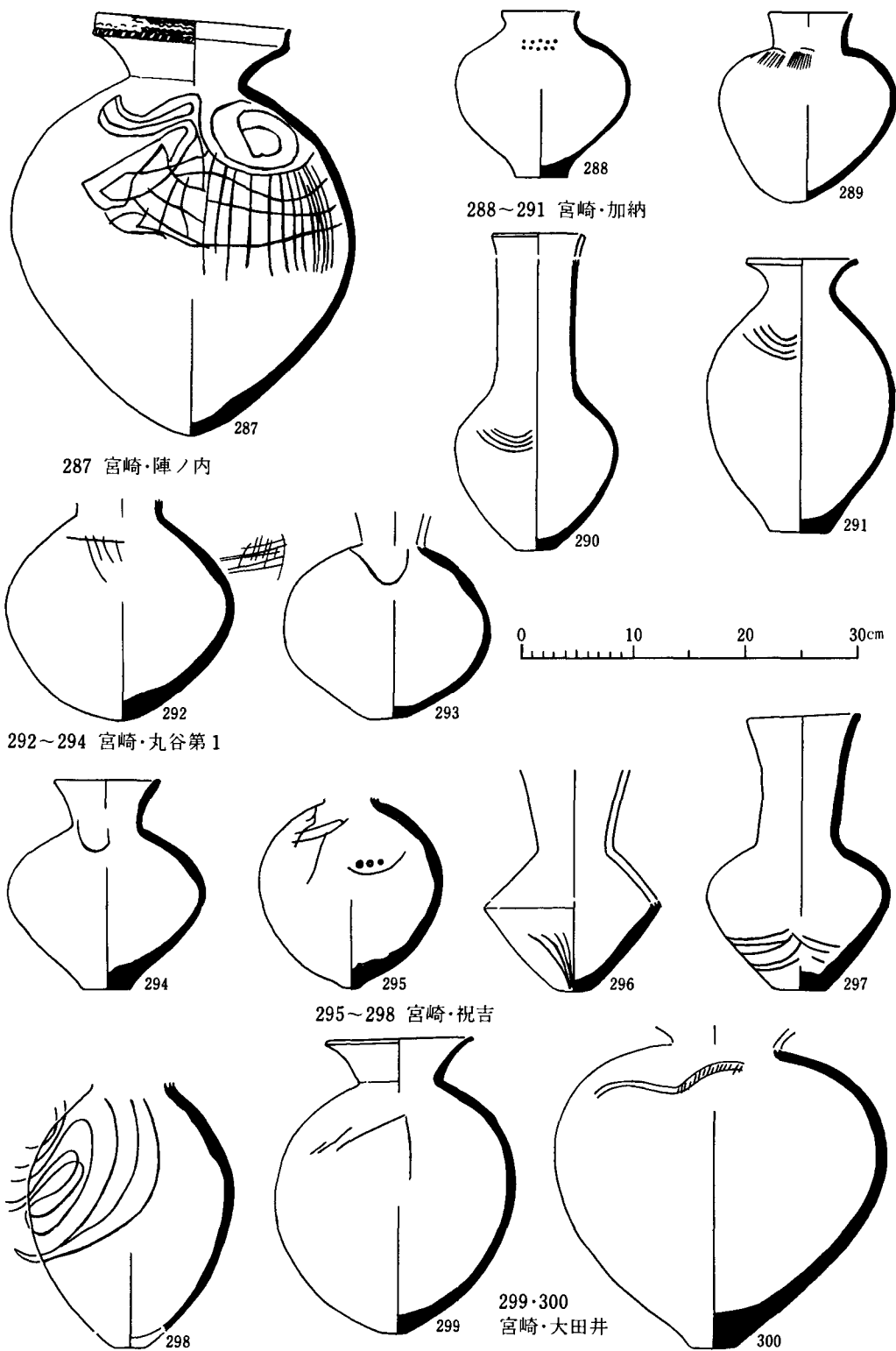


図33 宮崎県の記号土器 1/6

Fig. 33

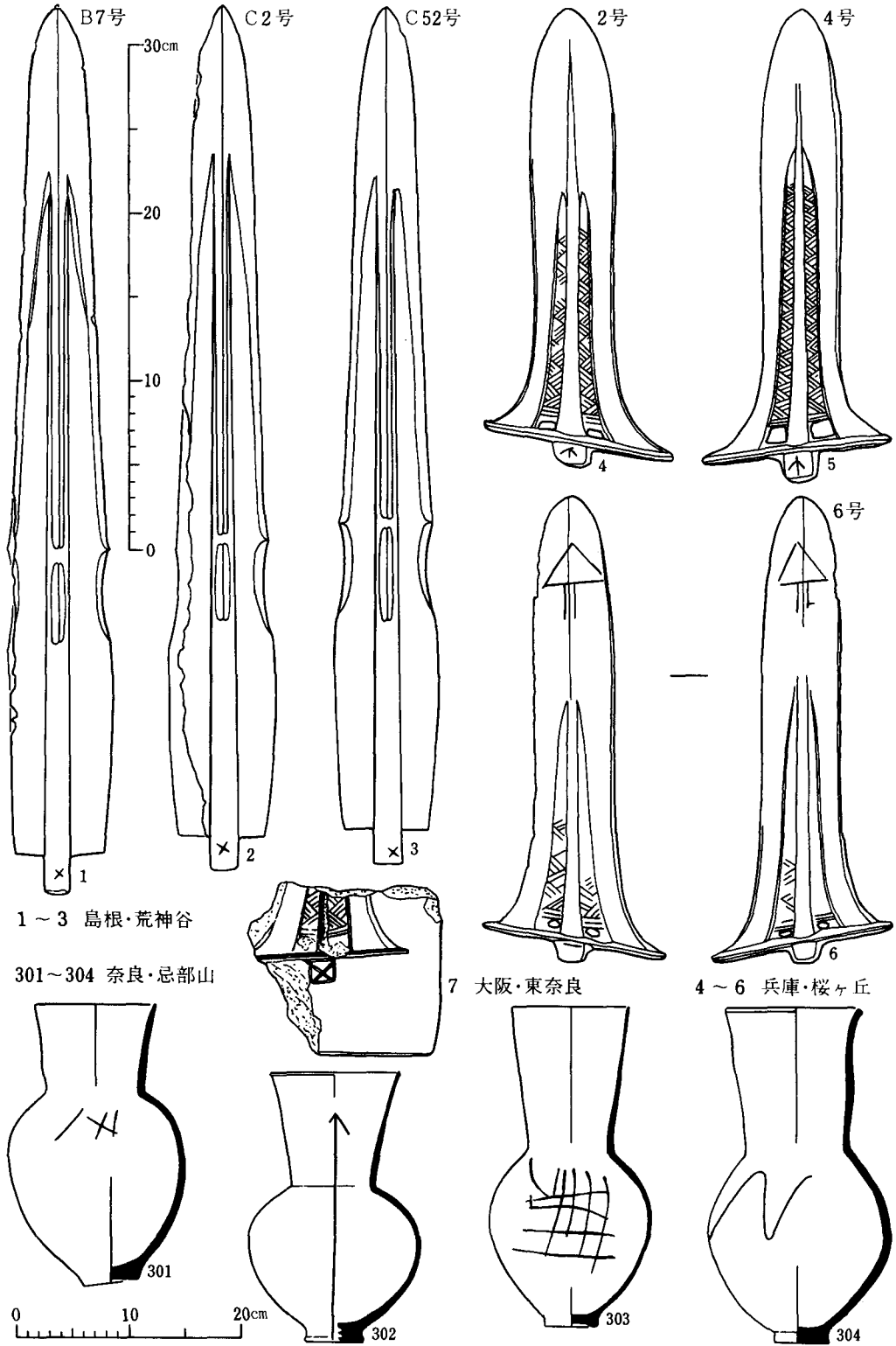


図34 記号をもつ銅剣・銅戈・銅戈鑄型 1/4, 奈良県の記号土器 (追加) 1/6 Fig. 34

## From Figure into Sign

HARUNARI Hideji

It is widely acknowledged that several numbers of pots of Yayoi V (2c. AD), Kinki district in particular bear seemingly incidental geometric design. They are, namely, circular, rectilinear, triaxial, arc in shape. An ordinary interpretation is that they have been appeared as a series of *signs* of some unknown purpose.

Prior to these *signs*, a series of more expressive figures is depicted on Dôtaku (bronze bell) as well as pottery in Yayoi IV (1c. AD). A considerable range of variation is involved in the combination of these *figures*. Two major strains can be mentioned however: deer appears to be the major figure in the one, bird in the other. Further subdivision reveals such combination as deer with silo, and with bird in the former, bird and/or feathered man with boat, and with silo, in the latter. It can be conceived that these figures are the representation of a series of myths and ritual feasts.

Notable variation is observed among the *signs* of Yayoi V: from the very intricated to the most simple ones. Similar variation is involved among the *figures* of Yayoi IV; from the most expressive ones to those close to *signs*. A seriation shift can be observed, in which a figure is simplified in sequence. Thus the author believes that it is feasible to see a link between the *figure* and the *sign*, when a close comparison is made between the least expressive *figure* and the most intricated *sign*. The comparison seems to suggest a series of shifts: deer turns into circle, silo into rectilinear lines, boat into arc. This enabled the author to infer that the myths and/or rituals of the same context have been survived through Yayoi V, only to be abolished in Yayoi VI (3c. AD).

Following interpretation can be provided for the shift mentioned above. Prosperious figurative representation in the earlier stage would reflect laborious pottery production to prepare for an agrarian feasts. Consequent rituals, of course, would have devoured much labour to be executed in great precision. Least prosperous geometric representation in the later stage would, naturally, reflect the decline of such rituals. This can be paraphrased as a decline of communal feasts. It can be paralleled with a transition in Dôtaku.

The so-called Auditory Dôtaku in the earlier stage, in which sonic function has been preponderant among the others, are provided with figurative representation, to be devised in agralian communal feasts. Such representation are totally nihilized among the so-called Visibility Dôtaku which are megalosized to give oppressive impression to the attendants of political ceremonies. The transition is the one of the results of out-growth of a political operations sponsored by the chieftains. The process is represented on, in another respect the development of the incipient tumuli, constructed to dispose the chieftains and their kin.

#### List of Figures

- Fig. 1 Signs on Yayoi V Potteries from Karako Site, Nara Pref. (after KOBAYASHI, Y., 1943)
- Fig. 2 Distribution map of Signs in Kinki District (after SAHARA M., 1971)
- Fig. 3 Classification of Signs (after FUJITA S., 1982)
- Fig. 4 Signs on Yayoi I Potteries from Karako Site.
- Fig. 5 Classification of Signs (by the author)
- Fig. 6 Figures and Signs of Deer.
- Fig. 7 Figures and Signs of Silo.
- Fig. 8 Figures and Signs of Bird.
- Fig. 9 Figures and Signs of Boat.
- Fig. 10 Figures and Signs of Dragon.
- Fig. 11 Figures and Signs of Hunters and Woman Shaman.
- Fig. 12 Composit Signs.
- Fig. 13 Compositions of Figure and Sign.
- Fig. 14 Composit Figures.
- Fig. 15 Corpus of the Potteries with Signs in Yayoi I—IV, Kinki District.
- Fig. 16 Corpus of the Potteries with Signs in Yayoi IV, Eastern Part of Japan.
- Fig. 17—34 Corpus of the Potteries with Signs in Yayoi V—VI, Western Part of Japan.
- Fig. 34 Signs on Bronze Ritual Instruments.